

京都大学構内遺跡調査研究年報

2004～2006年度

京都大学文化財総合研究センター

序

この年報は2004年度から2006年度の3年間にわたっておこなった、学内の遺跡調査の成果とそれに関連する研究をまとめたものである。それぞれの調査は学内の施設の建設予定地内の遺跡を対象としたものであるが、先史時代から近世にわたる従来の成果に、新たな知見を加える資料も得られている。また第Ⅱ部の紀要においては、吉田キャンパスを含む比叡山西南麓の北白川の地形や環境の形成に大きな転機をもたらした、弥生時代の土石流の規模や影響が及んだ範囲などについて考察したものである。

こうした成果が有効に活用されるように社会へ広く発信することは、大学の調査機関としての責務であり、調査時の現地での説明会、当センターのホームページなどを通じて情報の公開を図るとともに、大学がおこなう社会へ向けたさまざまな行事のさいには、尊攘堂を利用して過去の発掘調査による出土資料を公開している。この年次報告もその一端を担うものであり、ご高覧いただきご批評をお願いしたい。

埋蔵文化財研究センターは2008年4月に改組され、学内共同利用施設の文化財総合研究センターとして発足した。従来と同様に学内の施設の建設にともなう埋蔵文化財の調査を実施するとともに、文化財の分析・保存および活用などに関する、学際的な領域の研究の拠点となり、構内遺跡という良好なフィールドを活用した研究者の養成の場ともなることを目指している。学内学外の多くの方々のご指導とご教示を仰ぐとともに、本センターを有効に活用していただくよう願っている。

おわりに、本年報で報告した調査を進めるにあたっては、多くの方々からご指導ご助言をいただいた。とりわけ、発掘を実施するにあたってご協力を賜った、施設環境部、人間環境学研究科、総合人間学部の関係各位に、厚くお礼申し上げる次第である。

2009年3月

京都大学文化財総合研究センター長

上原真人

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2004年4月1日から2007年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学文化財総合研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系、 $x = -108,000$
 $y = -20,000$ ）が（ $X = 2,000$ $Y = 2,000$ ）となる京都大学構内座標により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：S E，土坑：S Kのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
Ⅰ：京都大学北部構内B C 30区の発掘調査
Ⅱ：京都大学本部構内B A 22区の発掘調査
Ⅲ：京都大学吉田南構内A P 21区の発掘調査
Ⅳ：京都大学構内における分布調査・立合調査
（例 Ⅰ 1：京都大学北部構内B C 30区出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影は、それぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、笹川尚紀が担当し、清水芳裕、千葉豊、伊藤淳史、富井眞、磯谷敦子、北尾敬子、柴垣理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度

目 次

第 I 部 京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2004～2006年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の経過	1
2 調査の成果	1
第 2 章 京都大学北部構内 B C 30 区の発掘調査	3
1 調査の概要	3
2 層 位	4
3 遺構と遺物	7
4 小 結	13
第 3 章 京都大学本部構内 B A 22 区の発掘調査	15
1 調査の概要	15
2 層 位	15
3 遺 構	17
4 遺 物	20
5 小 結	23
第 4 章 京都大学吉田南構内 A P 21 区の発掘調査	25
1 調査の概要	25
2 層 位	26
3 遺 構	28
4 遺 物	30
5 小 結	39

第5章 京都大学構内における分布調査・立合調査	41
1 京都大学 桂キャンパスにおける分布・立合調査	41
2 芦生研究林構内の立合調査	46
3 本部構内の立合調査	47
4 京都大学北部構内B D30・33区の立合調査	51
参 考 文 献	55
京都大学構内遺跡調査要項	57
報 告 書 抄 録	65

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要XIX

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

——京都盆地東部の白川弥生土石流の堆積物調査——

1 はじめに	69
2 白川弥生土石流の概略	70
3 粒度分析	70
4 考 察	81
5 おわりに	85

図 版	卷末
-----	----

図 版 目 次

- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 図版 2 京都大学北部構内 B C 30区
- 1 表土除去後，調査区全景（南から）
 - 2 茶褐色土上面検出の遺構（北から）
 - 3 黄色砂上面検出の遺構（南から）
- 図版 3 京都大学北部構内 B C 30区
- 1 暗褐色粘質土上面（南から）
 - 2 調査区中央南北トレンチ（北から）
 - 3 調査区東壁，洪水性堆積物（南西から）
 - 4 縄文土器出土状況（東から）
 - 5 調査区北壁の層位（南から）
 - 6 調査区南壁の層位（北から）
- 図版 4 京都大学北部構内 B C 30区
- 1 縄文土器，弥生土器
 - 2 S P 5 出土遺物，S P 12 出土遺物，黒褐色土出土遺物
- 図版 5 京都大学本部構内 B A 22区
- 1 A 区完掘後全景（南から）
 - 2 A 区北壁の黄色砂（南から）
 - 3 A 区暗灰色土上面（東から）
 - 4 C・D 区完掘後全景（南から）
 - 5 E 区東壁（西から）
- 図版 6 京都大学本部構内 B A 22区
- 1 先史時代の土器
 - 2 石鏃
 - 3 石鏃（同上裏面）
- 図版 7 京都大学吉田南構内 A P 21区
- 1 黄色砂上面遺構完掘全景（南から）
 - 2 溝 S D 2（吉田二本松 7 号墳周溝）内須恵器出土状況（西から）
 - 3 集石 S X 1 検出状況（東から）
 - 4 調査区西壁北半の層位（S D 2・黄砂・黒褐色土）
- 図版 8 京都大学吉田南構内 A P 21区
- S D 2 出土遺物，S K 3 出土遺物，茶褐色土出土遺物

図版9 京都大学構内における分布調査・立合調査

芦生研究林構内の立合調査

- 1 調査地全景（南東から）
- 2 職員宿舎地点（西から）
- 3 職員宿舎地点南壁層序（北から）

図版10 京都大学構内における分布調査・立合調査

本部構内各地点の立合調査（その1）

- 1 335地点全景（西から）
- 2 335地点西壁藩邸堀断面確認状況（東から）
- 3 329 e・336 a 地点付近全景（南から）
- 4 329 e 地点近世白色粗砂層検出状況（西から）
- 5 329 f 地点付近全景（南西から）
- 6 329 f 地点近世路面層断面確認状況（南から）

図版11 京都大学構内における分布調査・立合調査

本部構内各地点の立合調査（その2）

- 1 326地点全景（東から）
- 2 326地点断面黄色砂確認状況（南から）
- 3 329 b 地点掘削状況（東から）
- 4 329 b 地点掘り上げ状況（東から）
- 5 329 b 地点北壁（南から）
- 6 329 a 地点煉瓦組水路確認状況（南から）

挿 図 目 次

北部構内 B C 30 区の発掘調査	
図 1 調査区の位置……………	3
図 2 調査区北壁の層位……………	4
図 3 調査区南北方向の層位……………	5
図 4 検出遺構……………	8
図 5 灰白色細砂, 明褐灰色細砂, 青灰色細砂, 灰褐色シルト, 灰色シルト II, 淡褐色シルト, 暗褐色粘質土, 表土出土土器……………	9
図 6 S P 5, S P 12, S P 1, 黒褐色土出土遺物……………	10
図 7 茶褐色土下部, 茶褐色土上部出土遺物……………	11
本部構内 B A 22 区の発掘調査	
図 8 調査地点各区の層位……………	16
図 9 近世の遺構……………	18
図 10 先史時代の様相……………	19
図 11 先史時代の遺物……………	21
図 12 歴史時代の遺物……………	22
吉田南構内 A P 21 区の発掘調査	
図 13 調査区の位置……………	25
図 14 調査区西壁の層位……………	27
図 15 調査区検出の遺構……………	29
図 16 黒褐色土, S D 2, S K 3 出土遺物……………	32
図 17 S D 1, S D 3, S K 2 (1), S P 18 (1), 茶褐色土 (1) 出土遺物……………	33
図 18 S X 1 出土遺物……………	35
図 19 S K 1, S K 2 (2), S P 2, S P 10, S P 15, S P 16, S P 18 出土遺物……………	36
図 20 茶褐色土出土遺物 (2)……………	37
図 21 茶褐色土出土遺物 (3)……………	38
図 22 調査区周辺の古代以前の遺構……………	39
構内における分布・立合調査	
図 23 桂キャンパスの位置……………	41
図 24 分布調査地点……………	43
図 25 G 地点採集遺物……………	44
図 26 芦生研究林と立合調査地点の位置……………	46
図 27 本部構内の関連調査地点……………	48
図 28 335 地点尾張藩邸堀埋土, 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土 (1) 出土遺物……………	49
図 29 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土 (2), 329 e 地点白色粗砂層, 329 f 地点白色粗砂層, 329 f 地点路面層出土遺物……………	50
図 30 調査地点の位置……………	51
図 31 各地点の層位模式図……………	52

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別 粒度分析	
図32	採取地点の位置と白川……………69
図33	採取地点と黄色砂の堆積……………71
図34	K S (N)系統の状況……………73
図35	K S (S)系統の状況……………74
図36	T系統とL系統の状況……………75
図37	K S (N)系統の各試料の粒度分布・ 正規化曲線と全体の粒度分布の正 規確率紙上プロット……………88
図38	K S (S)系統の各試料の粒度分布・ 正規化曲線と全体の粒度分布の正 規確率紙上プロット……………96
図39	T系統の各試料の粒度分布・正規 化曲線と全体の粒度分布の正規確 率紙上プロット…………… 106
図40	L系統の各試料の粒度分布・正規 化曲線と全体の粒度分布の正規確 率紙上プロット…………… 119
図41	K S (N)系統の粒度特性の 垂直変動…………… 124
図42	K S (S)系統の粒度特性の 垂直変動…………… 125
図43	T系統の粒度特性の 垂直変動…………… 126
図44	L系統の粒度特性の 垂直変動…………… 127

表 目 次

表 1	京都大学構内のおもな調査……………58
-----	---------------------

第 I 部 2004～2006年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

- 第 1 章 2004～2006年度京都大学構内遺跡調査の概要
- 第 2 章 京都大学北部構内BC30区の発掘調査
- 第 3 章 京都大学本部構内BA22区の発掘調査
- 第 4 章 京都大学吉田南構内AP21区の発掘調査
- 第 5 章 京都大学構内における分布調査・立合調査

第1章 2004～2006年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 笹川尚紀

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2004～2006年度には、以下のように発掘調査3件、立合調査15件を行った。なお、2004年度において、分布調査1件も実施している。

発掘調査	北部食堂野外排水処理施設新営その他工事（北部構内B C30区）	（第2章，図版1—320）
	百万遍門改善整備工事（本部構内B A22区）	（第3章，図版1—321）
	吉田南構内環境整備（屋外便所設置その他）工事（吉田南構内A P21区）	（第4章，図版1—322）
立合調査	北部総合研究棟（農・生命）新営その他工事（北部構内B D33区）	（第5章，図版1—311）
	芦生研究林構内下水道施設整備工事	（第5章，表1—323）
	中央総合研究棟（工学部3号館）改修その他工事（本部構内A Y28区）	（第1章，図版1—324）
	北部植物園敷地境界ブロック塀改修工事（北部構内B C35区）	（第1章，図版1—325）
	経済研究所西側溝内舗装工事（本部構内A U21区）	（第1章，図版1—326）
	中央総合研究棟（旧工学部4号館・Ⅱ・Ⅲ期）改修その他工事（本部構内A Z25区）	（第1章，図版1—327）
	中央総務部分室他屋外給水管改修工事（本部構内A S21区）	（第1章，図版1—328）
	中央総合研究棟（法経済学部本館・Ⅱ期）改修その他工事（本部構内A W24区）	（第5章，図版1—329）
	北部総合研究棟改修（農学部総合館）施設整備等工事（北部構内B D30区）	（第1章，図版1—330）
	中央国際交流センターセミナーハウス新営その他工事（本部構内A T22区）	（第1章，図版1—331）
	西部構内屋外消火栓用ホース格納箱設置工事（西部構内A X21区）	（第1章，図版1—332）
	北部総合研究棟（数学・物理系）改修その他工事（北部構内B E28区）	（第1章，図版1—333）
	南部総合研究棟（薬学系・Ⅱ期）改修その他工事（病院構内A F15区）	（第1章，図版1—334）
	吉田地区ヘリウムガス回収配管工事（本部構内A T26区）	（第5章，図版1—335）
	時計台記念館北広場環境整備工事（本部A V24区）	（第5章，図版1—336）
分布調査	桂キャンパスDクラスター	（第5章，表1—337）

2 調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち、整理を終えたものについて、その成果を略述する（括弧内は図版1および表1の地点番号）。なお、北部構内B C30区は第2章，本部構内B A22区

は第3章、吉田南構内A P21区は第4章において、桂キャンパス、芦生研究林構内、本部構内A W24区・A T26区・A V24区、北部構内B D30区・B D33区の分布調査・立合調査の成果については第5章において、それぞれ詳述しているので参照されたい。

北部構内B C30区 弥生前期末の土石流本流が通過した方向が改めて押さえられるとともに、それによる窪みの痕跡も直下の層で認められた。土石流にともなう黄色砂層以下では、水成堆積層とともに土壌化した層も見受けられるが、遺構が未検出で遺物のごく少量であることから、本調査区は活動の拠点からやや離れた位置にあったことが考えられる。一方、9世紀以降における開発の活性化が汲み取られ、また中世後半以降では畑地・水田と耕作地として利用されていたことがうかがえる。

本部構内B A22区 弥生前期末の土石流にともなう黄色砂と、その直下の同時期の旧地表面が確認された。旧地表面の傾斜および付近の調査成果を勘案し、この当時の本調査区は、河川に挟まれた中州状の微高地であったことが復原されている。加えて、黄色砂の観察から、土石流は少なくとも二波存したことが指摘される。なお、近世後半の吉田村の絵図に合致する可能性の存する土地区画が検出されたものの、幕末に営まれた尾張藩邸にかかわる遺構は確認し得ていない。

吉田南構内A P21区 古墳北側の周溝とみられるものが検出され、吉田二本松方墳群の7基目の方墳として捉えられている。当遺構からは、5世紀後半の須恵器杯身と蓋が伏せた状態で並んで出土しており、供献にかかわると推察される。この当時の吉田地域における政治集団のことを考察する上で、重要な素材となろう。古代に関しては、とりわけ韃羽口が出土していることが注目され、以前に確認された10世紀初頭の鑄造関連の遺跡が本調査区にまで広がっていることが察せられる。

京都大学構内における分布・立合調査 桂キャンパス内・Dクラスター東側部分でも、遺跡が分布している可能性の強いことが主張される。芦生研究林構内では、土壌化の進んだ粘土層が確認されており、今後の遺跡の発見が大いに期待される。本部構内では、尾張藩邸の南堀や池泉関連の遺構、中・近世の白川道、近代煉瓦積水路などが検出されている。さらに、弥生前期末の土石流にともなう黄色砂およびその直下の層が、北部構内の立合調査とともに確認されており、それぞれにおいて旧地形の復原が試みられている。

以上のように、2004～2006年度は、とくに古墳時代と古代・近世について顕著な成果が得られた。いずれについても、微視的にも巨視的にも今後十分に分析を深めていく余地が残されており、整理と研究がさらに進捗することで、あらたな成果が期待されよう。

第2章 京都大学北部構内B C 30区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の概要

本調査区は、京都大学北部構内の西南部に位置し、北白川追分町遺跡に含まれる（図版1-320）。ここに、北部食堂野外排水処理施設の新管が計画されたため、これまでの調査成果を勘案して、新管予定地全域の発掘調査を実施した。また排水処理施設新管にともない埋設配管の工事が予定されていたため、配管予定地の一部についても事前に掘削をおこなって埋蔵文化財の有無をたしかめるとともに、残りの配管予定地については掘削時に立会調査を実施した。調査期間は、2004年4月20日から5月28日、調査面積は、排水処理施設部分71.5㎡、配管予定地14㎡、あわせて85.5㎡である（図1）。なお、配管予定地については黄色砂層に覆われる暗褐色粘質土上面、現地表面から約3mの深さまで掘削して調査したが、遺構は見つからず、遺物も細片が少量出土したのみであった。堆積物についても、排水処理施設部分と基本的に同一であるので、以下は排水処理施設部分の調査成果について記述する。

本調査区周辺ではこれまでの調査で、縄文時代晩期の堅果類集積遺構（229・297地点）

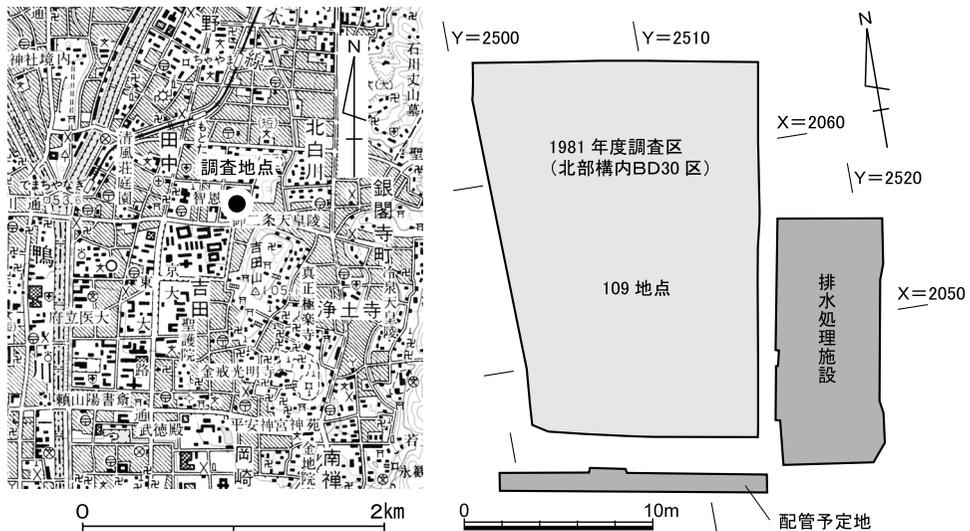


図1 調査区の位置 縮尺：左1/5万，右1/400

や埋没林（56・135地点）、弥生時代前期の水田遺構（276地点）、中期の方形周溝墓群（54・229地点）、平安時代中期の道路状遺構（297地点）や埋納遺構（208地点）、鎌倉時代の火葬塚（54地点）、幕末の土佐藩邸掘跡（208地点）などが見つかっており、長期にわたる人間活動の多様な営みが明らかになりつつある。

また、本東調査区の西に接する109地点では、幕末土佐藩邸の瓦溜、古代の建物遺構、弥生前期末の土石流跡などが発見されており、こうした時代の遺跡の東側への広がりについて、とくに留意しつつ調査を進めることとした。

2 層 位

調査区北壁の層位を図2に、調査区南北方向の層位を図3に示す。なお図3は、調査区東壁の堆積状況（第1層～第7層）と調査区中央に設置した南北トレンチ内の東壁の堆積状況（第8層～第20層）を合成して作図したものである。

まず黄色砂上面にいたるまでの基本的な堆積は上から順に、表土・攪乱（第1層）、赤褐色土（第2層）、灰黄色土（第3層）、茶褐色土（第4層）、黒褐色土（第5層）となる。第2層の赤褐色土は堅くしまった酸化鉄の集積層となっており、水田耕作に伴う可能性がある。第3層の灰黄色土は耕作土。第2層、第3層ともに、遺物は細片ばかりで年代決定に困難を伴うが、第2層は近世、第3層は中世後半と推定する。第4層の茶褐色土は

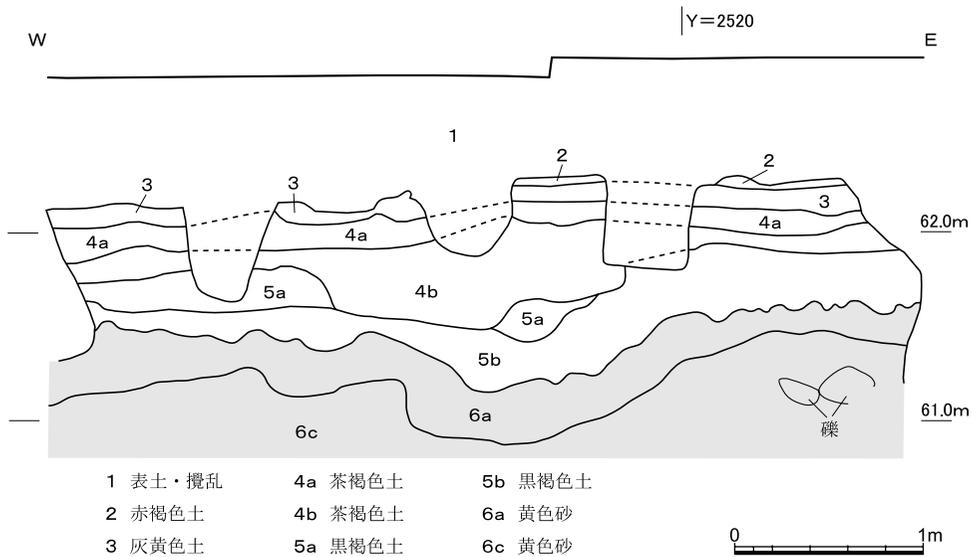


図2 調査区北壁の層位 縮尺1/40

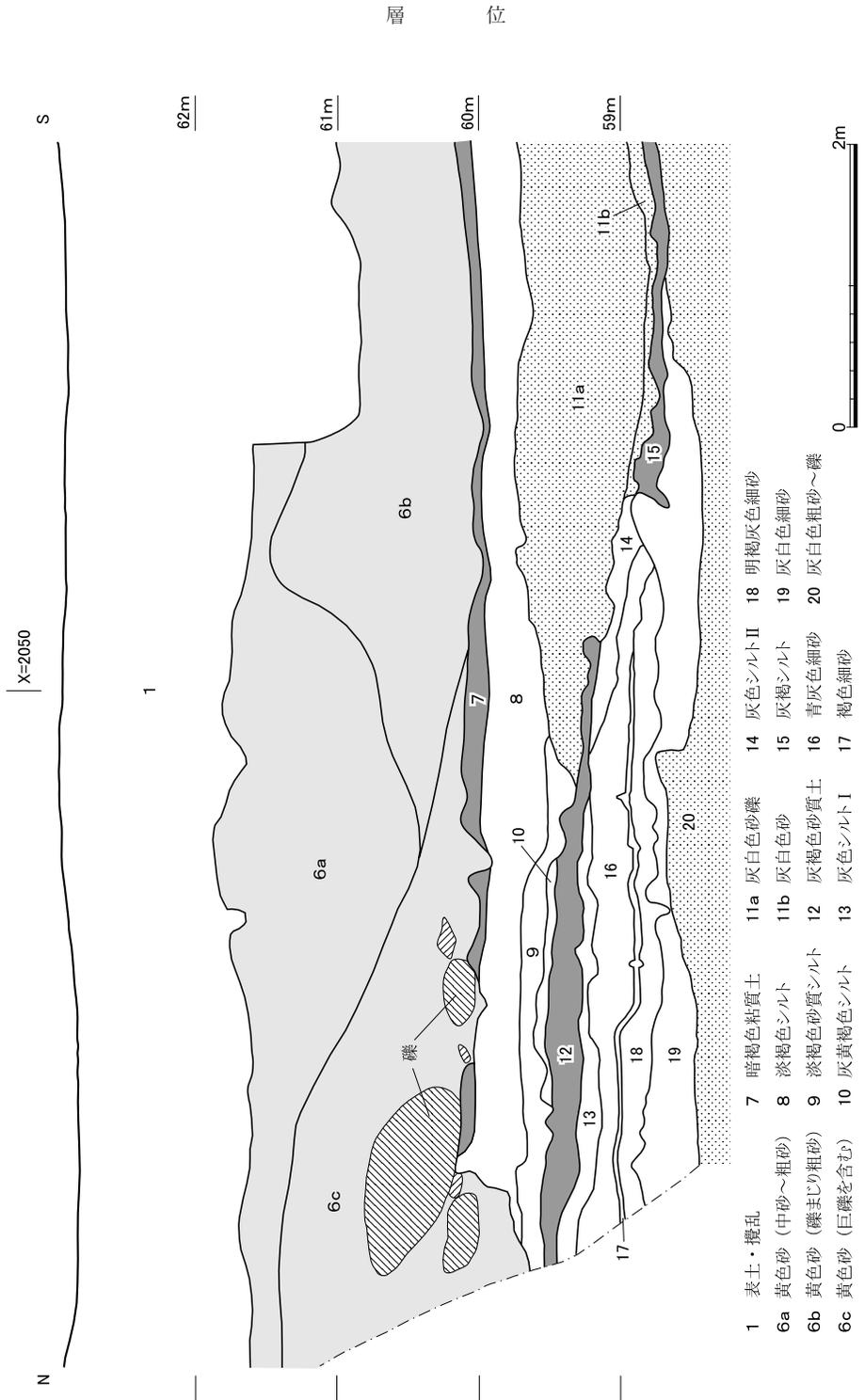


図3 調査区南北方向の層位 縮尺1/50

- 1 表土・攪乱
- 6a 黄色砂 (中砂～粗砂)
- 6b 黄色砂 (礫まじり粗砂)
- 6c 黄色砂 (巨礫を含む)
- 7 暗褐色粘質土
- 8 淡褐色シルト
- 9 淡褐色砂質シルト
- 10 灰黄褐色シルト
- 11a 灰白色砂礫
- 11b 灰白色砂
- 12 灰褐色砂質シルト
- 13 灰黄色シルト
- 14 灰色シルトII
- 15 灰褐色シルト
- 16 青灰色細砂
- 17 褐色細砂
- 18 明褐色細砂
- 19 灰白色細砂
- 20 灰白色粗砂～礫

層位

小礫混じりで、赤みの強い上半（4 a層）と黒みの強い下半（4 b層）に細別して遺物を取り上げた。4 a層は13～14世紀代の遺物を、4 b層は12世紀までの遺物を包含する。第5層の黒褐色土は、第4層と比較して小礫の混入がきわめて少ない均質な土壌である5 b層と、小礫の混入が4層に近い5 a層に細別して遺物を取り上げた。9世紀から11世紀までの古代の遺物を包含する。

第6層の黄色砂は、中砂～粗砂が基調となる6 a層、粗砂が主体で拳大の礫が混じる6 b層、幅1mをこえる巨礫を包含する6 c層に細分できる。弥生前期末に発生した洪水性堆積物である〔富井2008〕。6 c層は土石流本体であり、調査区北半に認められた。6 c層が覆っている部分では、下層の暗褐色粘質土（第7層）上面は、凹凸が著しい。6 b層はその最下部が層厚1cm前後のラミナのみえる黄白色細砂～微砂から構成されていた。6 b層に覆われている調査区南半の第7層は比較的平坦である。

第6層以下の堆積物は、第7層および第12層・15層が土壌化の進行した堆積物であるほかは、いずれも水の影響を強く受けて形成された堆積物である。なお、第6層以下については、第8層まで全面調査を実施したが、それ以下については崩落の危険性を考えて、調査区中央に幅80cmの南北トレンチを設定して調査をおこなった。

暗褐色粘質土（第7層）は、腐植混じりの土壌化した堆積物で、その上面は弥生前期末ごろの地表面である。縄文晩期（I 11～I 14）、弥生前期（I 15）の遺物が出土している。淡褐色シルト（第8層）からは、縄文晩期の土器（I 8）が出土している。

灰白色砂礫（第11 a層）は、径10cm前後の礫から構成される。扇状地上を流れた網状流路を埋積した氾濫性の堆積物。灰白色砂（11 b層）はその川底堆積物である。淡褐色砂質シルト（第9層）、灰黄褐色シルト（第10層）は、第11層の溢流堆積物であろう。上下の堆積物の年代から判断して、縄文後期後半から晩期前半におさまらるだろう。

第12層から第15層は灰～灰褐色のシルトないし砂質土。灰褐色砂質土（第12層）は土壌化が進行しており、灰褐色シルト（第15層）も土壌化しており、これらは一連の堆積物とみてよい。第14層から縄文後期（I 7）、第15層から縄文中期・後期（I 5・I 6）の土器が出土している。青灰色細砂（第16層）からも縄文中期の土器（I 4）が出土している。褐色細砂（第17層）は、鉄分の沈着層である。

明褐色細砂（第18層）および灰白色細砂（第19層）からは、縄文中期中葉の土器（I 1～I 3）が出土した。第20層は灰白色の粗砂～礫。この面で、地表下4.5m、トレンチ内の深さも1.5mに達したため、安全性を考慮して調査を終了した。

3 遺構と遺物

先史時代の遺構と遺物（図版3・4，図4・5） 図4上段は黄色砂除去後，暗褐色粘質土上面の状況を示したものである。梨地で表現した部分は，地面の凹凸の激しい箇所（図版3-1），297地点で検出したのと同様の土石流における巨礫の通過痕跡を示すものとする。その北側の調査区北辺は巨礫が堆積し北側へ向かって急激に下がっている。土石流の本流が流れた谷部であろう。

I 1～I 14・I 16は縄文土器，I 15が弥生土器である（図5）。I 1は灰白色細砂（第19層）出土。同一個体と思われる破片が十数点出土したが。摩耗が著しく接合しない。2段右捻りの縦走縄文地に，半截竹管状施文具で山形文（I 1 a）や弧線文（I 1 b）を描いている。I 2・I 3は明褐色灰色細砂（第18層）出土。I 2は縦走縄文地に篋状施文具で弧線文を施している。I 3は口縁端部を刻み，縄文地上に，半截竹管状施文具で文様を施している。I 1・I 2は中期中葉の船元Ⅲ式に比定できる。I 3は船元Ⅲ式～船元Ⅳ式に對比しておきたい。

I 4は青灰色細砂（第16層）出土。中期前半の特徴である，捻りの粗い縄文を施している。I 5・I 6は，灰褐色シルト（第15層）出土。I 5は外反する器形で，捻糸文地に半截竹管状施文具で波状文を施している。中期後半の里木Ⅱ式。I 6は同一個体3点からなり，I 6 a・I 6 bは胴部，I 6 cは底部直上にあたる。外面は巻貝条痕，内面は撫でて仕上げる。後期前半の無文土器に比定できよう。I 7は灰色シルトⅡ（第14層）出土。垂下する2条の沈線文と渦を巻く沈線文の一部がみえる。後期前葉の北白川上層式に比定できる。

I 8～I 10は淡褐色シルト（第8層）出土。I 8は無刻みの凸帯文土器で，断面三角形の凸帯を口縁端部に貼り付ける。晩期末の長原式。I 11～I 15は暗褐色粘質土（第7層）出土。I 11～I 14は無文の胴部片で，削り（I 12）や条痕（I 13）をもつものがある。縄文後期～晩期の無文土器の一部であろう。I 15は口縁部資料で，傾きは判然としない。口縁端部に1条の沈線をめぐらし刻みを加え，口縁部には4条の沈線文を横走させている。弥生前期の土器と考えるが，特殊な器形になるかもしれない。

I 16は表土から出土した縄文土器。胴部資料で，間隔をあけて沈線文を垂下させ，その間に2段左捻り縄文を施文している。中期末の北白川C式。

古代・中世前半の遺構と遺物（図版2・4，図4・6・7） 図4中段は黄色砂上面

京都大学北部構内BC30区の発掘調査

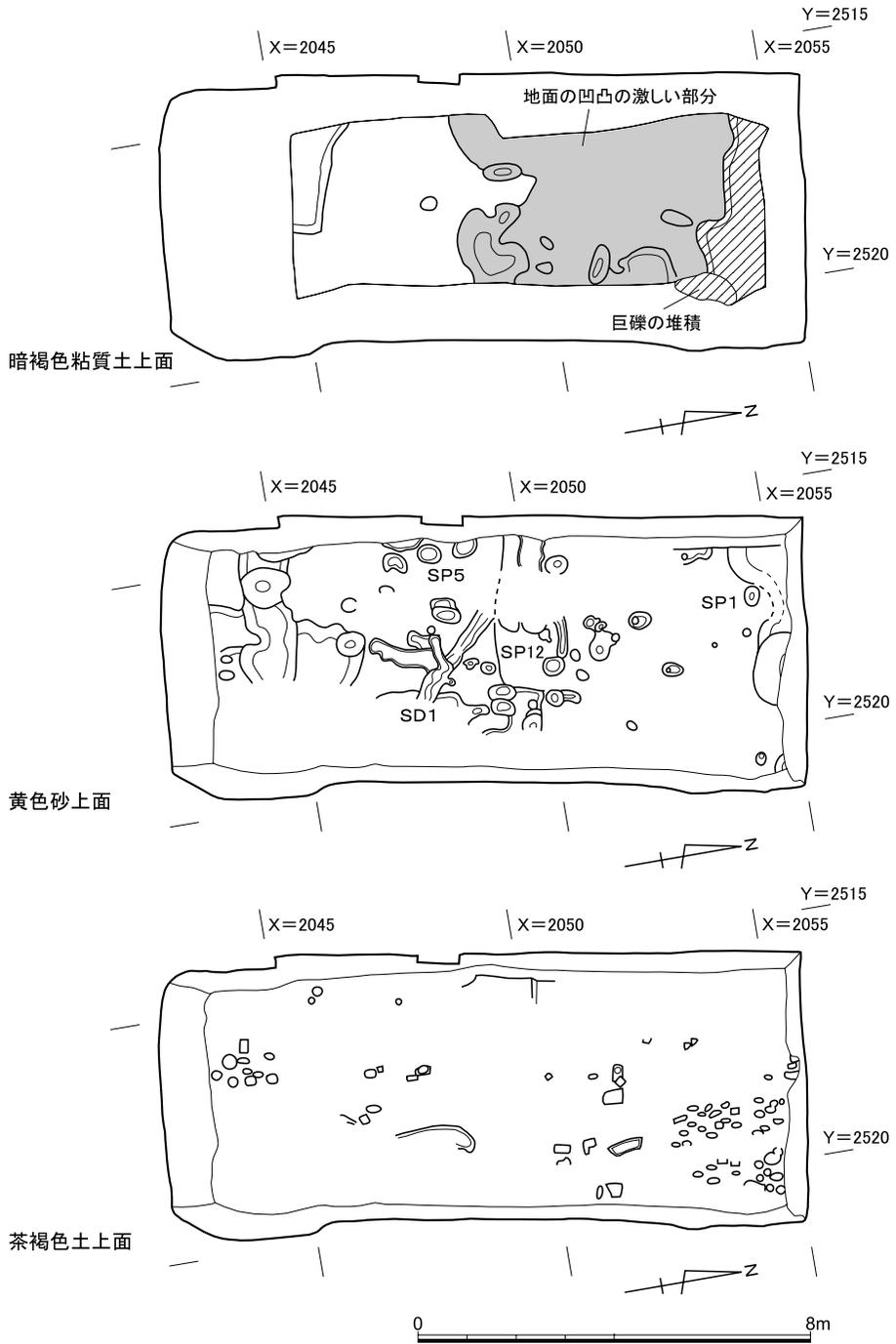


図4 検出遺構 縮尺1/150

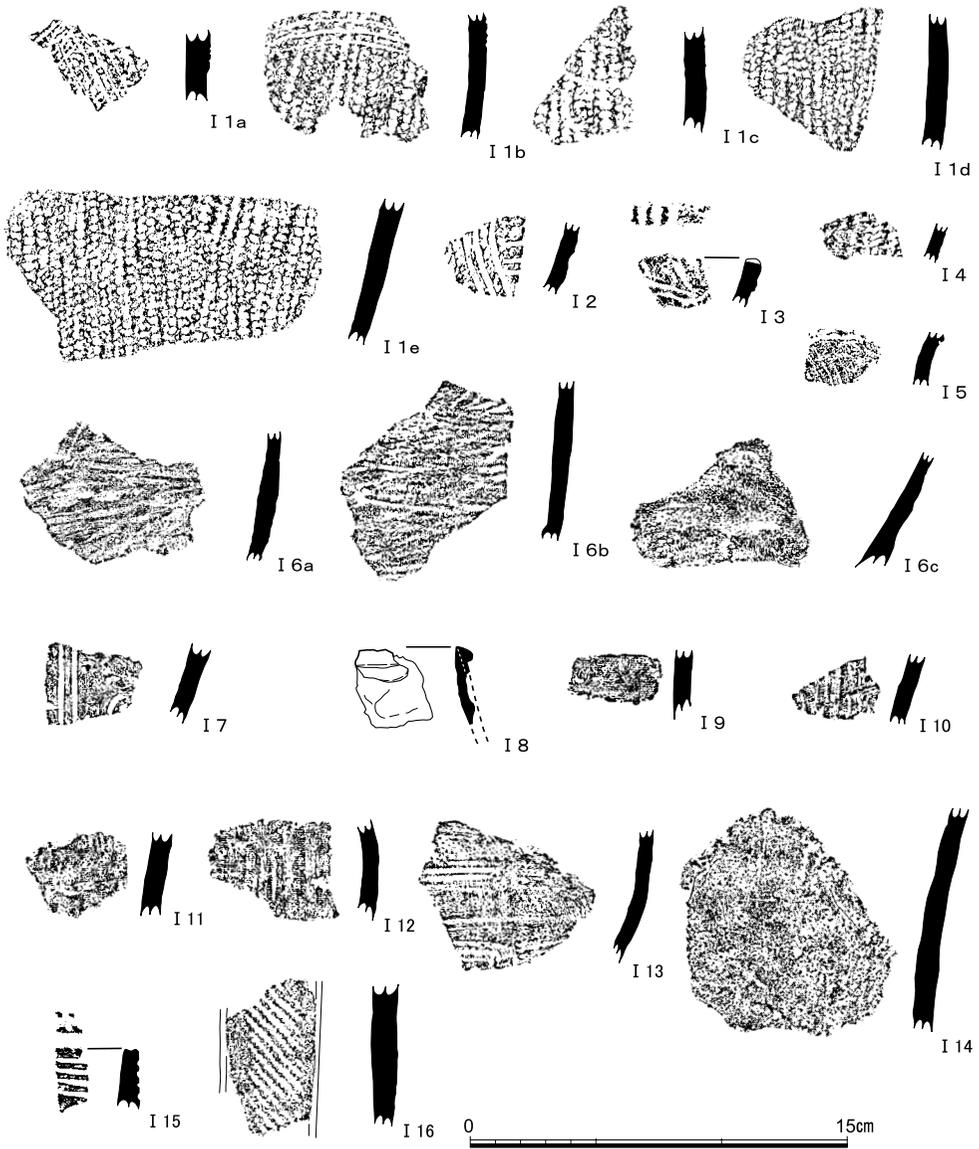


図5 灰白色細砂出土土器 (I 1 縄文中期), 明褐色細砂出土土器 (I 2・I 3 縄文中期), 青灰色細砂出土土器 (I 4 縄文中期), 灰褐色シルト出土土器 (I 5 縄文中期, I 6 縄文後期), 灰色シルトⅡ出土土器 (I 7 縄文後期), 淡褐色シルト出土土器 (I 8～I 10 縄文晩期), 暗褐色粘質土出土土器 (I 11～I 14 縄文後晩期, I 15 弥生前期), 表土出土土器 (I 16 縄文中期)
縮尺1/3

京都大学北部構内B C30区の発掘調査

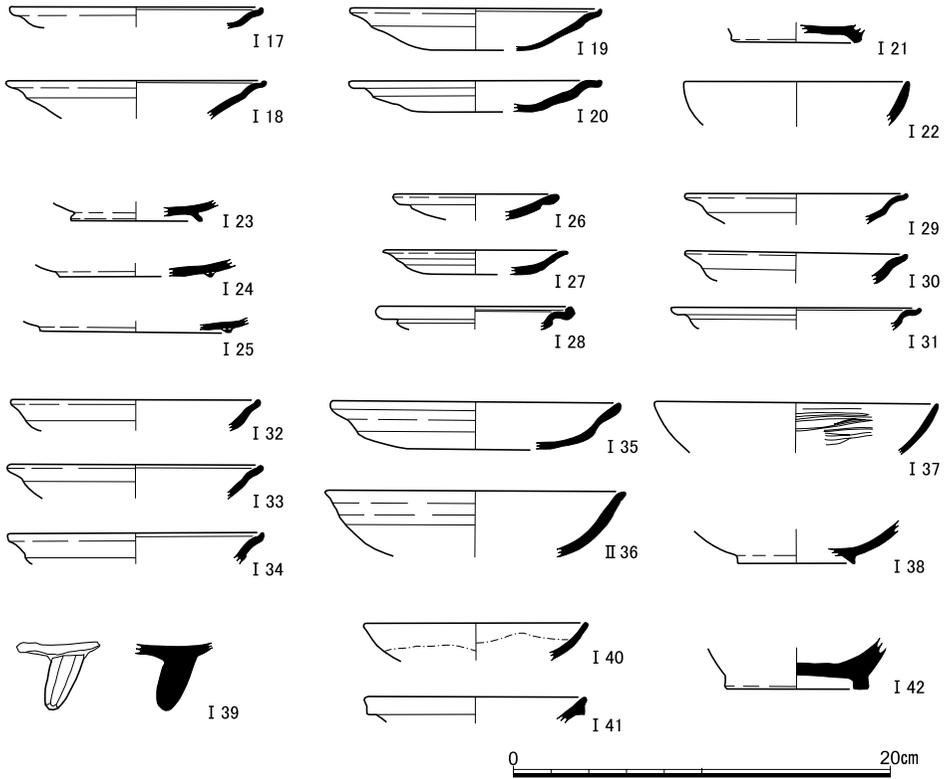


図6 SP 5出土遺物 (I 17～I 19土師器), SP 12出土遺物 (I 20土師器), SP 1出土遺物 (I 21土師器), 黒褐色土出土遺物 (I 22～I 36土師器, I 37～I 39黒色土器, I 40・I 41灰釉陶器, I 42須恵器)

で検出した遺構。柱穴状の小土坑や小溝がみられる。黒褐色土を埋土としており、SP 5からは10世紀前半、SP 12からは10世紀後半ごろの遺物が出土している。西に隣接する109地点では、10世紀前葉～中葉ごろの建物や柵、溝などを検出しており、一連の遺構の可能性が高いであろう。

I 17～I 19はSP 5出土の土師器皿で、ての字手法B₁類。I 20はSP 12出土の土師器皿で、B₃類。I 21はSP 1出土の土師器底部。

I 22～I 42は黒褐色土出土遺物。I 22は土師器椀。内外面とも、撫で仕上げ。I 23～I 25は土師器杯B。I 26～I 36は土師器皿。ての字口縁手法B類のほか、口縁部が外反する2段撫で手法C類が見られる。

I 37・I 38は黒色土器椀A類。I 39は黒色土器の脚。脚は7面に面取りして仕上げ、内外面とも黒色化している。風字硯の脚部の可能性がある。I 40・I 41は灰釉陶器。I 40は

遺構と遺物

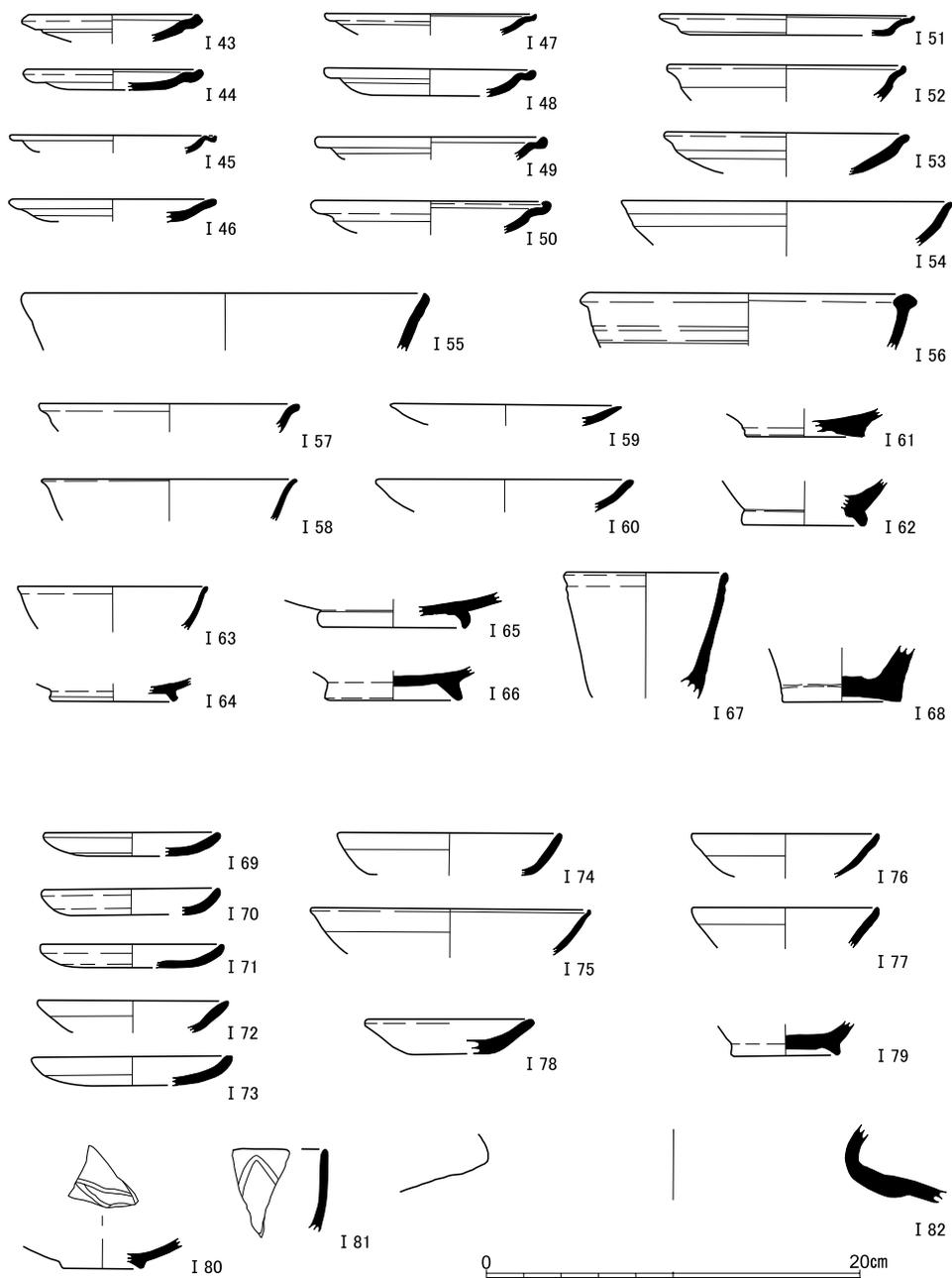


図7 茶褐色土下部出土遺物 (I 43~ I 55土師器, I 56須恵器, I 57~ I 62緑釉陶器, I 63~ I 67灰釉陶器, I 68白磁), 茶褐色土上部出土遺物 (I 69~ I 78土師器, I 79灰釉系陶器, I 80瓦器, I 81青磁, I 82須恵器)

皿で、灰釉は浸け掛けしている。I 41は長頸瓶の口縁部。I 42は須恵器。壺の底部。以上の資料は、9世紀後半から11世紀前半ごろまでのものであろう。

I 43～I 68は、茶褐色土下部（第4 b層）出土遺物。I 43～I 54は土師器の皿。ての字手法B₁～B₄類と2段撫で手法が見られるが、ての字手法は器壁が厚いB₃（I 48～I 50）・B₄類（I 43・I 44）が主体となり、2段撫で手法はいずれも弱く外反するC₂類（I 46・I 53・I 54）である。I 55は土師器鉢。残存率1/12で、復元口径は22cmである。口縁部がやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部をわずかに内側へつまんで成形している。内面は刷毛目、外面は撫でによって、仕上げている。I 56は須恵器すり鉢。口径17cm前後で、口縁部は内外に肥厚して玉縁状を呈する。

I 57～I 62は緑釉陶器。I 57・I 58は、口縁部が外反しつつ立ち上がる椀。I 57は素地が軟質で、淡緑色の釉を施釉する。I 58は須恵質で濃緑色の釉を施釉している。I 59・I 60は皿。いずれも須恵質で、濃緑色の釉を施釉する。I 61・I 62は椀の底部。I 61は軟質で、釉は淡緑色。円盤状高台に圈線を彫り込んで、蛇の目風の高台としている。I 62は須恵質で、濃緑色の釉を施す。有段輪高台であり、近江産とみられる。

I 63～I 67は灰釉陶器。I 63は椀の口縁部。I 64～I 66は椀ないしは皿の底部。I 65の高台はいわゆる「三日月状」を呈し、I 66の高台は比較的厚手で、端部はやや丸みを帯び外へ開く形態をとる。I 67は口径8.5cm前後で、コップ形の形態を呈する。

I 68は白磁壺の底部。径6.2cmをはかり、底面がわずかに凹んでいる。

以上の遺物は、下層の黒褐色土出土遺物と年代的に重なるものがありつつ、11世紀後半～12世紀前半までの遺物を含んでいる。

I 69～I 82は茶褐色土上部（第4 a層）出土遺物。I 69～I 75は土師器皿。1段撫で素縁手法D₃類（I 72～I 74）、1段撫で面取り手法D₄類（I 69～I 71）のほか、1段撫で素縁手法E₂類（I 75）がみられる。I 72は口縁端部に煤が付着する。I 76・I 77は灰白色を呈する土師器小椀。I 78は回転台成形の土師器皿。灰白色を呈し、底部に回転糸切りの痕跡をもつ。

I 79は灰釉系陶器椀の底部。底部を回転糸切りしたのちに、断面三角形の高台を貼り付けている。I 80は瓦器椀の底部。見込みに、暗文をもつ。I 81は鎬蓮弁文をもつ龍泉窯系の青磁椀。I 82は須恵器甕。

以上の遺物は、13世紀から14世紀までのものである。

中世後半の遺構 図4下段は、茶褐色土上面で検出した遺構。耕作痕跡と見られる、

小 結

灰黄色土を埋土とする小規模な土坑が北東辺と南西辺に集中して見つかった。遺構埋土および灰黄色土（第3層）からは年代を決定できるような遺物がほとんど出土していないので、時期決定には困難をとまなうが、上下の層の年代から判断して、中世後半期の耕作跡と考えておきたい。

4 小 結

先史時代の土地利用 弥生前期末の土石流にともなう黄色砂層は、1.8m前後の厚みをもって全面で認められ、調査区北端では黄色砂の下層に径1mをこえる巨礫を含む土石流そのものが堆積していた。これは、西に接する109地点で検出した土石流跡に連続するものである。この付近から北側が谷状の地形となり、そこを土石流の本流がやや北にふれながら西流したことが改めて確認された。

黄色砂層の直下には、弥生前期の地表面が土石流の流れた北端をのぞいて広がっており、この面で297地点で確認された土石流の通過痕跡（窪み）を追認することができた。掘削深度の関係から、第8層まで全面を調査したが、それ以下の面については調査区中央に設定した幅0.8mの南北トレンチによる調査とした。

黄色砂層以下では、直下の暗褐色粘質土（第7層）、灰褐色砂質土（第12層）および灰褐色シルト（第15層）が腐植を交えて土壌化しており、ある期間、陸地化して安定していたことを示している。第7層からは縄文晩期～弥生前期、第15層からは縄文中期・後期の土器も出土しており、人間の活動がこの地に及んでいたことを考えさせるが、遺物は少量・小片であり遺構もみつかっていないので、活動の中心地からはやや外れた場所であったと想定される。

これら以外の堆積物は、水成堆積の砂・シルトを基本としつつ、第11層のような氾濫性堆積物もみとめられた。この氾濫の時期は、上下の堆積物の年代から縄文後期後半から晩期前半までのある時期と考えているが、南西へ50m離れた297地点では、縄文後期後半（元住吉山式期）に白川系流路の氾濫があったことが明らかになっている。これらは、一連のものである可能性もある。こうした水成堆積物の何枚かの堆積層からも、縄文中期以降の土器が出土しているが、これらは原位置を保っているとは考えにくく、基本的には東方に展開した遺跡から流れ込んだものと想定したい。

歴史時代の土地利用 黄色砂上面で検出した古代の遺構は、柱穴状の小土坑や小溝からなり、出土遺物も、西に隣接する109地点と状況が類似していた。寺院あるいは別業など

と関連して、この地周辺の開発が9世紀後葉以降、活発化する現象を改めて確認した。中世前半期の土地利用形態は、はっきりしないが、中世後半期には、本調査区周辺は耕作地（畑地）となったことが、耕作痕跡などから確認された。近世に至っても、その状況に大きな変化はなかったと考えるが、酸化鉄の集積層がみとめられることから、水田が営まれたことが想定できる。

以上、報告したように、今回の調査地点は、100㎡に満たない狭小なものであったが、先史時代から江戸時代に至る土地利用の変遷に関して有益な情報を得ることができた、といえる。

発掘調査と資料の整理は千葉豊が担当し、磯谷敦子・長尾玲・下坂澄子・坂田千尋・井上美輪が測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。また、堆積物の観察について、増田富士雄氏（同志社大学）から貴重なご教示を賜った。末尾ながら、記して感謝いたします。

第3章 京都大学本部構内B A22区の発掘調査

富井 眞

1 調査の概要

調査地点は京都大学本部構内の西北隅に位置している（図版1-321）。ここに百万遍門歩行者通路の敷設が計画されたため、発掘調査を2006年1月10日～2月3日に実施した。調査面積は総計で98㎡である。

吉田本町遺跡に含まれる本調査区の周辺では、これまでにほとんど発掘調査が実施されていないが、南方に位置する60・272地点では、弥生時代前期末の土石流堆積層である黄色砂が、中世頃の高野川の氾濫により側方浸食を受けていることが確認されており、本調査区での古代までの遺構の存在は、ほとんど期待されなかった。その一方で、中世以降の活動として、古地図の研究から、幕末に尾張藩屋敷が現在の本部構内におかれていたことがわかっており、尾張藩邸西北部の様相の解明が期待された。

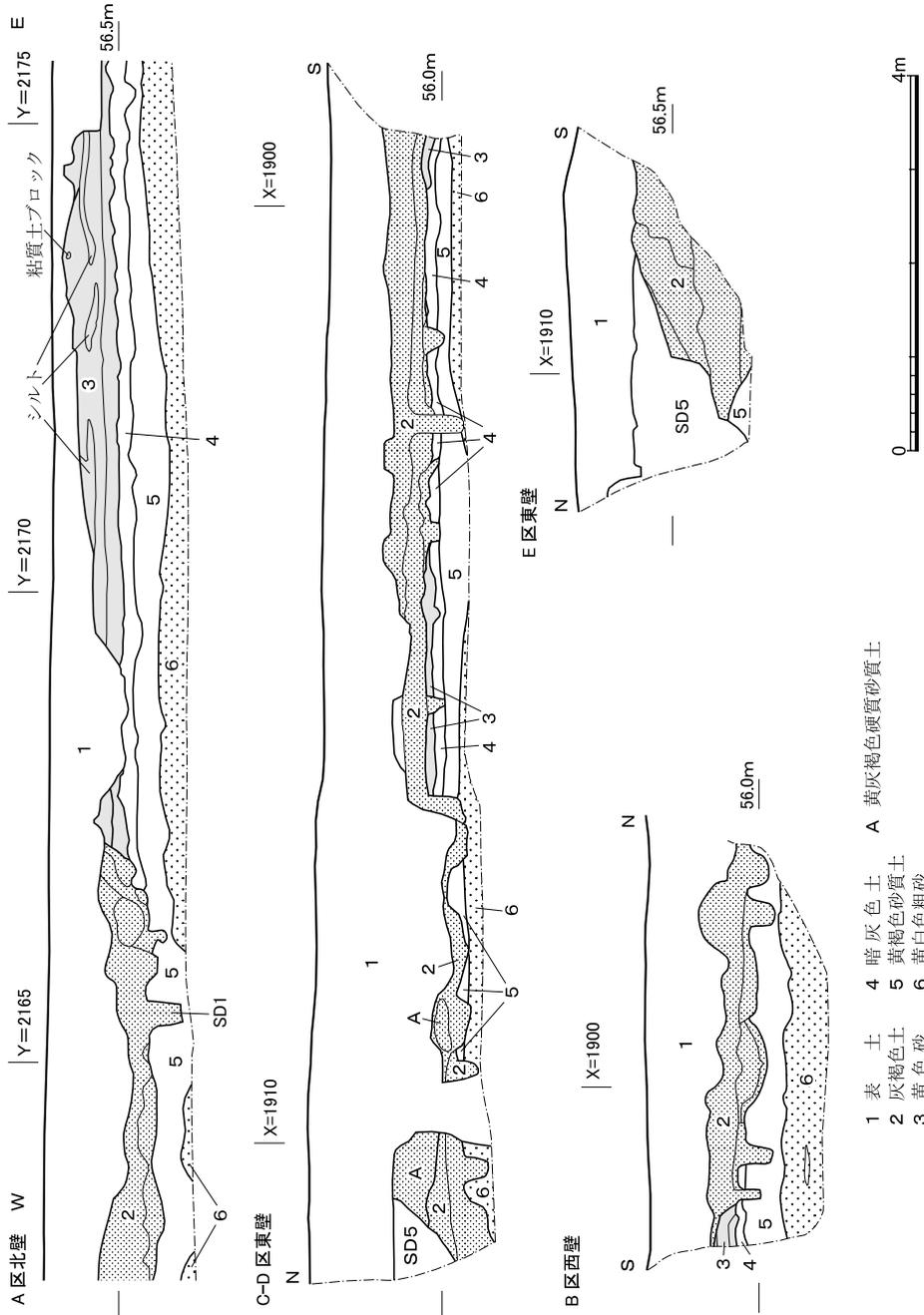
本調査に先行しておこなった試掘調査（後述するA区の東南辺付近およびB区）では、近世の遺物包含層に上部を削平された黄色砂の直下に、弥生前期末の旧地表面が残存している部分があることを確認した。そこで、近世だけでなく先史時代以後の遺構の存在も想定し得たため、5箇所の調査区を設定して調査をおこなった。

発掘調査の結果、近世の溝や畑境の段差と杭群、弥生前期末の旧地表面を検出した。遺物は、縄文時代から近代におよぶが、整理箱5箱を数えるにとどまった。

2 層 位

5つの調査区の基本層序は（図8）、表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、黄色砂（第3層）、暗灰色土（第4層）、黄褐色砂質土（第5層）、黄白色粗砂（第6層）となる。A区では、中央から東半にかけては表土下に黄色砂を認めるが、西辺では近世の遺物包含層である灰褐色土が黄色砂と下位の暗灰色土を削平するかたちで厚く堆積している。

灰褐色土は、厚いところで50cmを越え、19世紀の遺物を含む。全体的に礫や砂を多く含み、主に畑として機能していたと想定する。A区西半とB区でのみ、灰褐色土を上下に二分し得たが、A区東半やD区では平面発掘時には分離できなかった。C区やE区など本調査区北辺では、灰褐色土の上部は黄灰褐色を呈する硬質砂質土（図8-A）がブロック状



遺 構

に含まれるが、遺物をほとんど含まないので、その年代は19世紀以降としか特定できない。

黄色砂は、比較的良く残存しているA区では上方粗粒化を確認できた。暗灰色土と接する最下部から約10cmの厚みでシルトが堆積する。その上部には、細砂が20～50cm堆積するが、その中には、シルトを介在させる場合もあれば、5cm前後の灰褐色粘質土のブロックを含む部分もある(図版5-2)。Y=2175付近では、細砂の上位に粗砂が約20cm厚で残存している部分がある。黄色砂と暗灰色土の層界面には、構内の多くの地点と同様に、無数の生痕化石を確認できる。

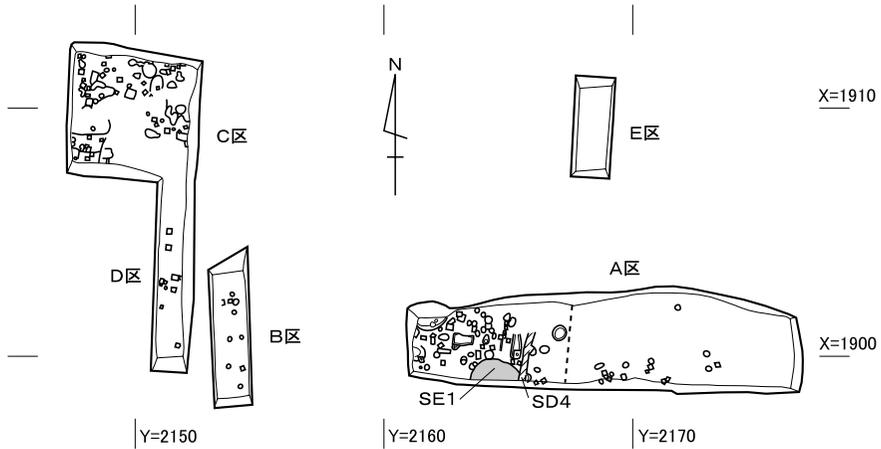
上面が弥生時代前期末の旧地表面となる暗灰色土は(図版5-3)、北辺には分布しないが、A・B・D区など、南半には確実に分布している。縄文時代晩期後半の二条突帯文土器である滋賀里Vなど、縄文晩期を中心に細片で150点以上の縄文土器が出土しているが、弥生時代の遺物は認められなかった。暗灰色土の下位の黄褐色砂質土は、調査区全域に分布する。暗灰色土から漸次的に移行する、あまり土壌化が進んでいない地層である。出土遺物は10点に満たないが、突帯文土器と特定できる破片は含まれない。ケズリ調整の胴部片が出土しているので晩期の堆積層と判断し得る。

黄白色粗砂は、ラミナが認められたり、層中にシルトや細砂などのレンズ状堆積が挟まれる部分もあるので、基本的に水成堆積を維持していると判断できる。遺物は発見できなかった。C区南辺で断ち割りをおこなって、ここでは、黄白色粗砂の厚みは約130cmであること、その下位には厚さ約100cmでやや黄色みがかかった灰褐色シルトが堆積していること、そしてさらにその下位には、拳大のチャートをはじめとして頁岩や花崗岩を含む褐色礫層が厚さ20cm以上堆積していること、以上を確認した。いずれも水成堆積と判断し得る。最下の礫層は高野川系だろう。

3 遺 構

A区とB区では、近世の遺構面を2面確認できたので、それぞれ、上位遺構面、下位遺構面と呼ぶ(図9)。下位遺構面では、両区でピット群を検出したほか、A区では、上位遺構面の段差に踏襲される南北方向の段差と、それにとまなう性格不明の円形の落ち込みSE1や南北方向の2条の溝などを検出した。遺物量はかなり限られているが、近世後半期の遺構と判断している。上位遺構面でも、両区でピット群を検出した。そのほか、A区では、南北方向の段差と、それにとまなう南北方向の2条の溝も検出した。いずれの遺構も出土遺物は数少ないが、明治よりは古い19世紀以降の遺構と判断している。A区の段差

近世下位面の遺構



近世上位面の遺構

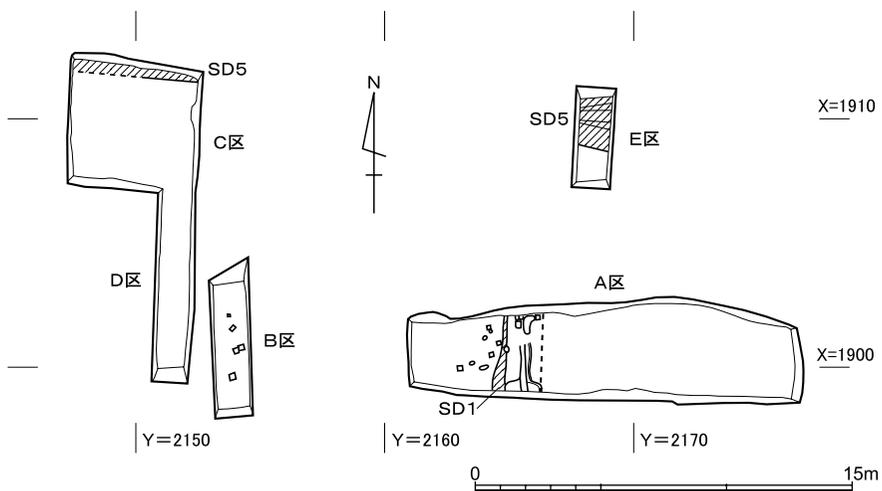


図9 近世の遺構 1/300

は、1800年頃までに作成された『山城国吉田村古図』に記されている「高畠」の小字内にある田畑の境の位置〔吉江2006〕とおよそ一致する。なお、A区東側のピット群は、どちらの遺構面に対応するかは判断できないので、便宜的に、下位遺構面の遺構平面図に示してある。

C区には、全域で検出したピット群や、西南辺の壁際で検出した棧瓦を含む小規模な近世後半期の瓦溜まりがある。A区のどちらの遺構面に対応するかは判断できないので、便

遺 構

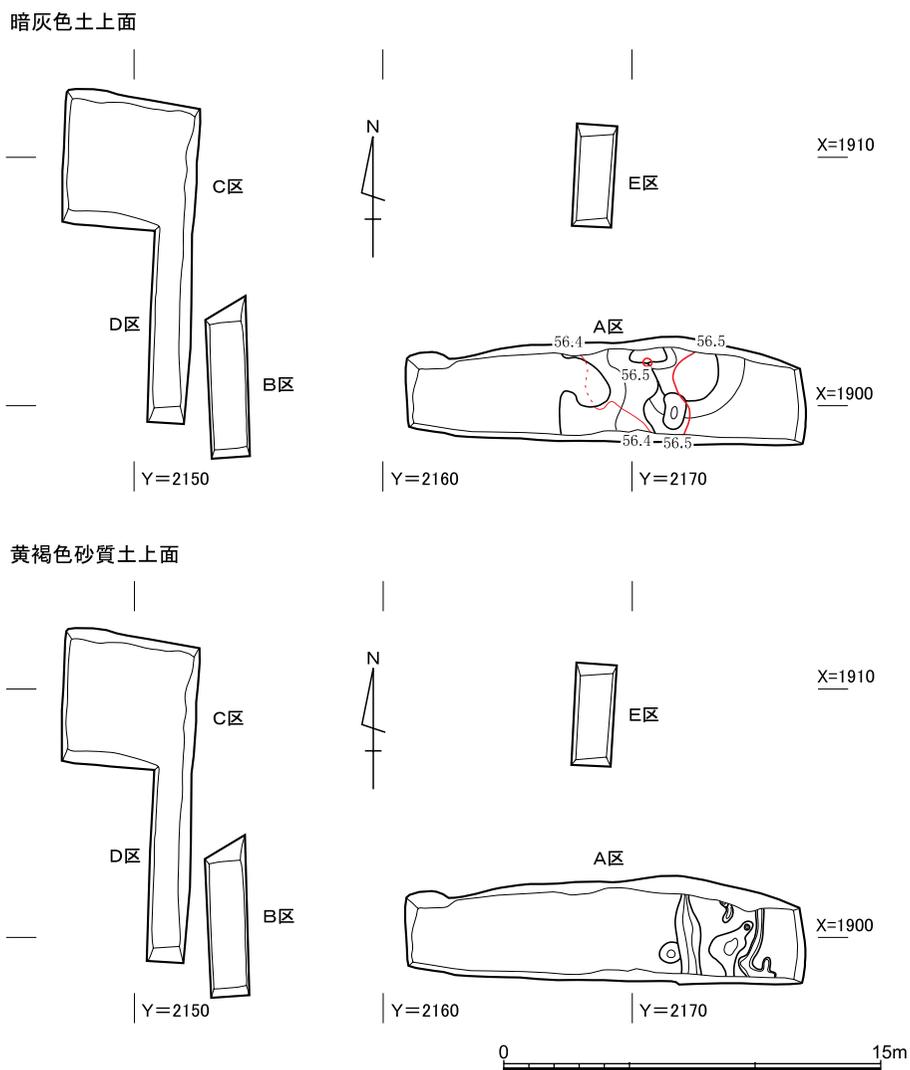


図10 先史時代の様相 1/300

宜的に、下位遺構面の遺構平面図に示している。

灰褐色土よりも上位の層準で検出した遺構として、C区とE区の北壁際で、北側へ大きく下がる落ち込みを検出した(図版5-5)。埋土は、灰褐色土上部の黄灰褐色砂質土ブロックよりは軟らかくて灰褐色土と同様の硬さで、色調も灰褐色を呈し、黄褐色砂質土(第5層)をブロック状に含む。現在の今出川通の標高よりも20cm以上落ち込んでいくことを確認できたので、大溝の南肩と想定している(SD5)。出土遺物量はきわめて限られてい

るので、19世紀以降としか判断できないが、レンガやガラスなどは確認できなかった。便宜的に、上位遺構面の遺構平面図に示した。

先史時代については、A区中央および東辺、B区、C区西南辺、そしてD区では、上面が弥生時代前期末の旧地表面となる暗灰色土の分布を確認した。(図10上)。A区とC・D区のそれぞれの断面観察によれば暗灰色土上面は、北および西にむかってかすかに傾斜する。暗灰色土上面では明確な遺構は確認できず、また、A区東辺には土器が散在しているけれども、A区中央や、それ以西のB区やD区では、遺物が出土しなかった。なお、暗灰色土の下位では溝状の窪みなどが確認できたが、人為的な遺構ではない(図10下)。

4 遺物

(1) 縄文時代の遺物(図版6, 図11)

先史時代の遺物の中では、明確に弥生時代と特定できる遺物は見られず、細片を含めて180点あまり出土している縄文土器のなかでも、晩期の土器がほとんどである。石器は13点出土した。剥片石器は、両極打撃によるものも含めて剥片が7点、石鏃の製作を途中で断念したと思われる調整剥離のある剥片が4点、そして石鏃1点の合計12点を回収できた。いずれもサヌカイト製である。礫石器では敲石が1点出土している。

Ⅱ1～Ⅱ17・Ⅱ19～Ⅱ25は縄文土器で、Ⅱ18は敲石。Ⅱ1～Ⅱ18では、Ⅱ9が歴史時代のピットからの出土であるほかは、いずれも暗灰色土からの出土である。Ⅱ1は、中期末の深鉢胴部破片。Ⅱ2～Ⅱ4は無文深鉢の口縁部。いずれも内外面ともナデ調整。Ⅱ2は口唇部に面取りをおこなっていることから、後期後半のものと判断する。Ⅱ3・4は同一個体と思われる。これらも後期のものだろう。Ⅱ5は、巻貝条痕と思われる外面調整の胴部破片。後期後半かもしれない。Ⅱ6～Ⅱ17は晩期の土器。Ⅱ6～Ⅱ9は晩期後半の突帯文土器の口縁部。Ⅱ6は口唇部が尖らない。端部の整形は、3本指でそれぞれの指が口縁外面と口唇部と口縁内面に当たるようにして摘みながらおこなっていると思われる。滋賀里Ⅳ式によく見られる特徴だが、口唇部の面取りは不明瞭。Ⅱ7～Ⅱ9は、口唇部が尖るか丸みを帯びるもので、2本指で摘みながら端部整形をしていると思われる。滋賀里Ⅴによく見られる特徴である。Ⅱ10～Ⅱ12は、ナデ調整が認められる口縁部から頸部にかけての破片。Ⅱ10はⅡ6と同一個体と思われる。Ⅱ11は、粘土帯を継いだ痕跡が良く残っている。Ⅱ12は、上半にナデ調整があり、下半はケズリ調整と思われるが、その境界の屈曲は甘い。Ⅱ11と同一個体と思われる。Ⅱ13～Ⅱ15は、滋賀里Ⅴの深鉢肩部の突帯部分。Ⅱ15

遺 物

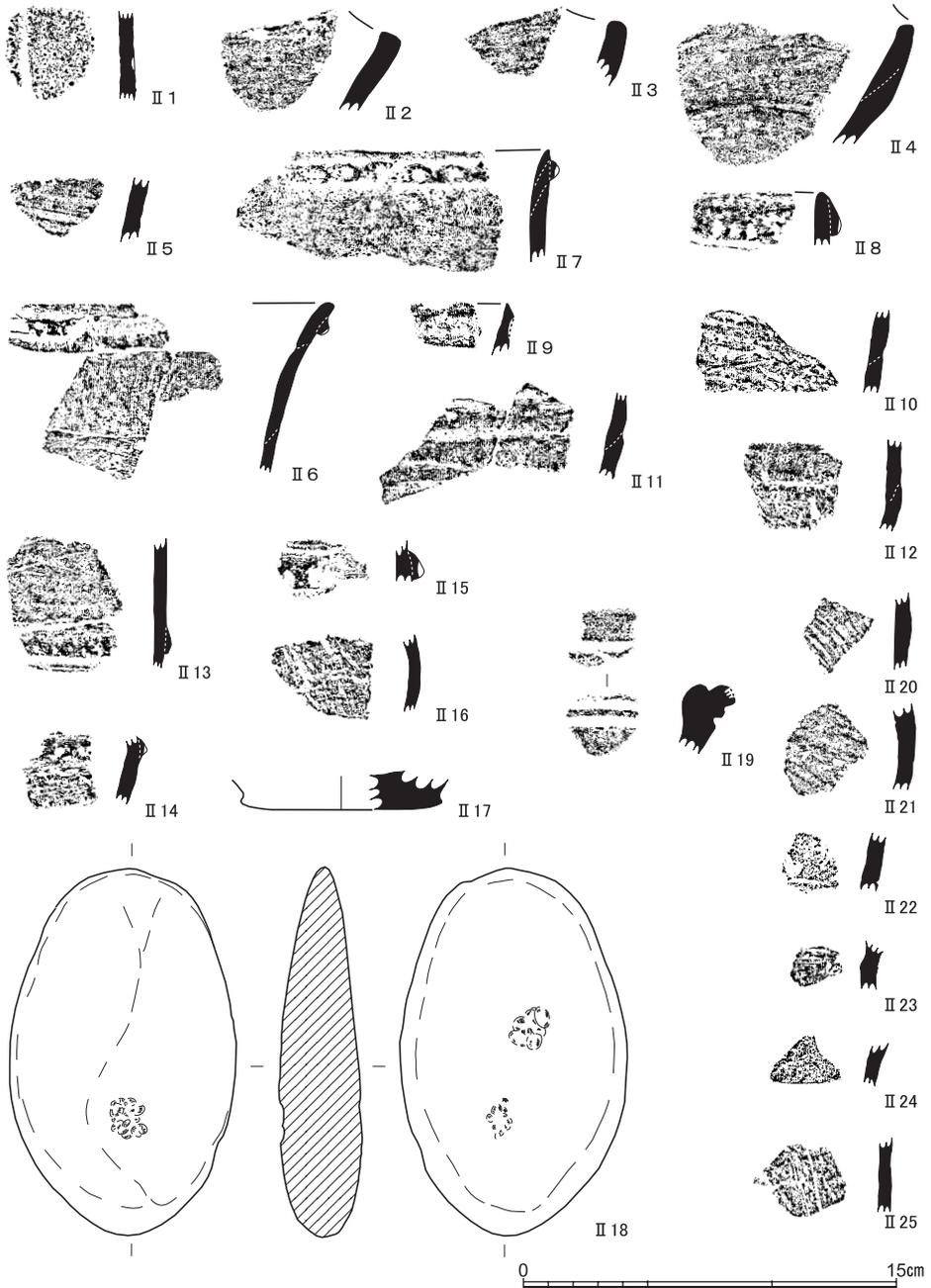


図11 先史時代の遺物 (II 1～II 8・II 10～II 18：暗灰色土出土，II 9：近世遺構出土，II 19～II 25：黄褐色砂質土出土) 縮尺1/3

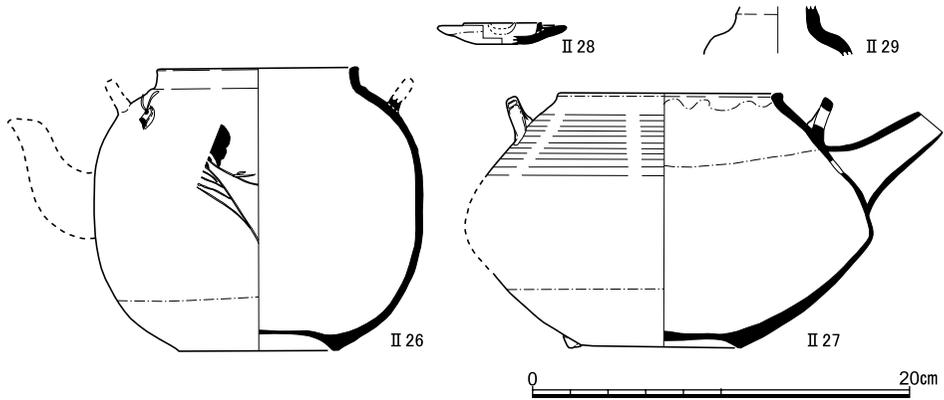


図12 歴史時代の遺物（II 26：SD 4 出土，II 27：SE 1 出土，II 28：SD 1 出土，II 29：SD 5 出土）

は、II 8 と突帯の形状や刻みが類似しており、同一個体と判断する。II 16の胴部破片は、ケズリ調整の上に煤が付着している。II 17は、突帯文土器の平底の底部。II 18は花崗斑岩製の敲石で、重量は489 gをはかる。

II 19～II 25は黄褐色砂質土から出土した縄文土器。II 19は、福田K 2 式の口縁部。口縁上面には、口唇部側に縄文が施されているようである。II 20は、巻貝条痕と思われる外面調整の胴部破片で、後期後半と思われる。II 21～II 24の外面調整はナデ。II 23の上部は突帯の根元から割れているのかもしれない。II 25は外面ケズリ調整の胴部破片で、晩期に帰属すると判断する。II 30～II 33は石鏃製作を断念した調整剥片で、II 34は石鏃。

(2) 近世の遺物 (図12)

全体的に出土量は少なく、一つの遺構から遺物がまとまって出土することもなかった。おもな遺構の出土遺物について以下に略説する。

SD 4 出土遺物 II 26は陶器土瓶。白と黒の二色のイッチン掛けで鶴が描かれている。包含層中にも上位遺構面で検出したSD 2 にも破片が紛れていた。近世後半期のものと判断する。

SE 1 出土遺物 II 27は陶器土瓶。全体にかなり歪んでいる。包含層中にも上位遺構面で検出したSD 1 にも破片が紛れていた。近世後半期のものと判断する。

SD 1 出土遺物 II 28は陶器灯明受皿。SD 1 は19世紀の遺構と判断する。

SD 5 出土遺物 II 29は青磁の壺のくびれ部分。SD 5 から出土したのはこの1点だが、SD 1 に切られる灰褐色土からは、近世後半の陶磁器や棧瓦の破片が出土している。

5 小 結

先史時代の成果 本調査区の約100m南南西に位置する60地点、および約200m南南西に位置する272地点では、黄色砂が後世の高野川の側方浸食によって削り去られていることが確認されていたので、本調査区では弥生時代の堆積層の残存が期待されなかった。しかし、予想に反して、北西にむかってかすかに傾斜する弥生前期末の旧地表面を確認できた。A区とC・D区のそれぞれの断面観察によれば暗灰色土上面は西にむかって緩やかに傾斜していると思われる点、その下位の黄褐色砂質土はC区北半でも近世の包含層の直下に確認されている点、以上の二点から、C区北半やE区にも黄色砂の堆積時には暗灰色土が広がっていたと考えられる。少なくとも本調査区内には、弥生前期の河道や流路は存在せず、下位の黄褐色砂質土が縄文晩期と思われる土器片を包含しているので、遅くとも縄文晩期からは、調査区一帯は弥生前期末まで白川も高野川もともに浸食を及ぼさない安定した環境にあったことがわかる。もっとも、縄文晩期の土器が狭い調査面積ながらも比較的多く出土している一方で、土器の出土していない弥生時代については、活動が低調だったと言えよう。

北部構内西南辺の297地点北西部では、北北東から南南西に向かう弥生前期末の流路の東肩を確認しており、また、109・320・297・276・208・52・265地点には、弥生前期末の土石流堆積物である黄色砂中に巨礫を確認できている。さらに、218地点では、黄色砂に覆われる西へ大きく傾斜する旧地形が確認できている。今回の調査では、60・272地点で残存が確認された弥生前期末の旧地表と同様に、そうした特徴から推測し得る弥生前期末の北東方面からの流路の西限を特定するのに役立つ。すなわち、かすかとはいえ本調査区の旧地表面は北西方向に傾斜している点は重要である。本調査区の東側に南西方向に張り出す地形の存在が想定できるからである。北部構内西南辺を流れ下ってきた流路が、218地点をその左岸とするようにして本調査区よりも東を進み、その右岸を形成した斜面の尾根を挟んで反対側の緩斜面が本調査区だった、と考えられるのである〔富井2003〕。つまり、本調査区は、弥生前期末には、東を流れるその流路と西の高野川とに挟まれて、中洲状に取り残されていた微高地だった可能性が高い。本調査区での弥生時代の活動が低調だった背景もここにあると思われる。

その一方で、晩期後半の突帯文土器が比較的高密度で出土していることは、縄文時代にはまだ、本調査区の東を流れる流路は、存在しなかったことを想定させる。もちろん、既

に窪地になっていた可能性はあるものの、いつも水が流れるような状態ではなかったのかもしれない。

弥生前期末の土石流堆積物である黄色砂の、上部の細砂で構成される部分には、シルトの堆積をレンズ状に確認できる。そうしたシルト部は、旧地表直上のシルト層とはもちろん連続しない。また、そうした細砂の上部、レンズ状のシルト部よりも上位に、粒径5 cmほどの礫状の灰褐色粘質土ブロックを1点確認できた(図版5-2)。上流で削り去られた旧地表と考えられる。こうしたことから、土石流には少なくとも二波があったことが、上流部の北部構内だけでなく〔富井2008〕、さらに下流のこの地点でもうかがえた。

歴史時代の成果 当初に成果が期待された、幕末の尾張藩邸に関する良好なデータの取得はかなわなかった。C区北端およびE区北端で確認できたSD5は、層位的には、近世の遺物包含層である灰褐色土の上位から切り込んでいる。75・89地点で確認された藩邸東南隅の堀や、277地点で確認された藩邸西辺南部の堀も、近世の遺物包含層の上位で表土ないし近代の地層よりは下位の地層から切り込んだものであるが、296地点では、藩邸に伴う遺構は、近世の遺物包含層と思われる灰褐色土中から切り込んでいる。本調査区は、灰褐色土の掘削中に認めた近世の二つの遺構面で、西落ちの段差やそれに平行する溝が検出されているから、遅くとも近世後半には段々畑となっていたことがわかる。すなわち、灰褐色土堆積中に藩邸が営まれていたとは考えがたく、上位遺構面は、尾張藩邸の営まれ始めた文久2年(1862)よりは古いと考えるのが妥当だろう。それよりも層位的に上位であるSD5は、その点では藩邸の時期とも考え得る。しかし、出土遺物がほとんどなく、また、北へ下がることは確かだがそれが堀だとしても規模は定かではない。さらには、現在の大学敷地の区画の北壁ラインとおよそ並行している。むしろ、近年の想定にならえば〔伊藤・梶原2007〕、本調査区は、藩邸の敷地内であって藩邸北限に位置してはいない可能性は十分にあり、SD5は、第三高等学校ないし京都帝国大学の造成に関わる近代以降の遺構と解釈するべきだろう。以上から、SD5を藩邸北限の堀と決定づけることには躊躇される。

発掘調査および整理調査は、吉江崇と富井眞が担当し、磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・長尾玲・和田晃・役重文範が測量・実測などの作業にあたった。また、暗灰色土上面の様相など地形や堆積状況に関して増田富士雄氏(同志社大学)より有益なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。

第4章 京都大学吉田南構内A P21区の発掘調査

伊藤淳史

1 調査の概要

本調査地点は、吉田南構内の西辺中央付近に位置しており、吉田二本松町遺跡に含まれる（図版1-322，図13）。ここに、構内環境整備にともなう屋外便所等の設置が計画されたため、2006年2月8に既存建物取り壊しにともなう立合調査を実施した。結果、遺跡の遺存がきわめて良好であることがわかり、予定地全面48㎡について、人力による発掘調査を2月15日までおこなった。

これまで吉田南構内では、先史時代から歴史時代にいたる各時期の遺構が見つかったが、とくに調査地一帯は、東側の111地点および220地点で平安中期の梵鐘鑄造土坑6基や関連遺構が確認され、現地に埋め戻し保存されるなど、重要度の高い遺跡のひろがる範囲といえる。またこのほかにも、弥生前期の水路や水田遺構、古墳中期の方墳群、奈良時代の掘立柱建物、中世の多数の井戸・溝・土器溜・石室や無数の柱穴などが見つかっており、長期にわたる活動が把握されている。

今回の調査においても、狭小な面積にもかかわらず多くの知見が得られ、整理箱7箱分の遺物が出土した。とくに、5世紀代の完形の須恵器杯・蓋の出土する古墳周溝とみられる溝や、鞆羽口の出土する平安時代土坑の発見は、古墳群や鑄造関連遺跡の西側へのひろがりを示す重要な成果といえよう。

なお、発掘調査は伊藤淳史が担当し、吉江崇・長尾玲の助力を得た。また出土遺物の整理については、北尾敬子の助力を得た。

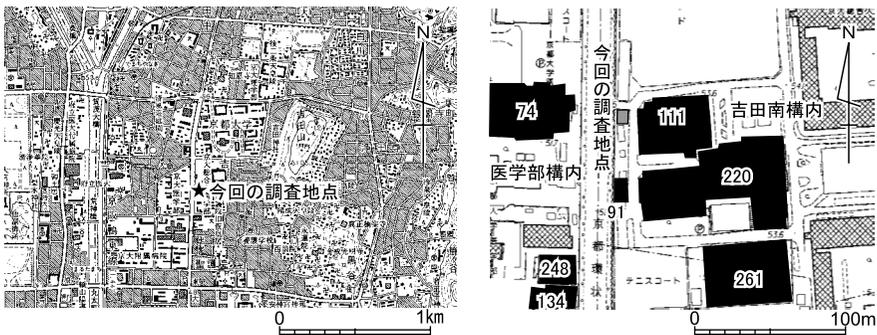


図13 調査区の位置（左：縮尺1/5万，右：縮尺1/5000）

2 層 位

今回の調査区西壁の層位を示す(図14)。この西壁は、吉田南構内の西縁を画する石垣の下部にあたっており、表土層(第1層)の上面は、この石垣の下端としている。

表土層以下、堆積は水平に近く、遺構による掘り込みをのぞいてきわめて安定している。

歴史時代の堆積 第2層の灰褐色土は、近世の遺物包含層で、おもに18世紀後半以降の陶磁器類を中心に含む。第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層。平均すると40cm程度の厚みがある砂質の土壤で、13～14世紀代の中世の遺物を中心としつつ、奈良～平安時代の遺物も混在している。層の上部ほど赤みを帯びて明るく、下部は暗い色調を呈するように、漸移的な色調の変化をしながら、第4層の暗茶褐色土へと移行する。これらは壁面の精査によってのみ事後に把握できたもので、面として掘り下げている際には、すべて茶褐色土として一括し、上層・中層・下層として人工層位でとりあげた。下層においても中世の遺物が含まれており、遺物の内容に目立った変化が認められないことから、第3・4層ともに中世の遺物包含層とみなしておきたい。周辺の調査区では、この下にさらに黒色を呈する古墳時代～古代遺物の包含層が確認されているけれども、今回は遺構SD2とSK3の埋土としてのみ認められ、面的なひろがりには認められなかった。中世の段階に第5層の黄色砂上面まで攪拌が及んで削平された可能性が高く、そのことが、茶褐色土内への多くの古代遺物の混入をもたらしているのだろう。

先史時代の堆積層 第5層の黄色砂は、弥生前期末のごく一時期に生じた土石流堆積層で、吉田南構内や本部構内の西半域、北部構内のほぼ全域などにひろく確認されて鍵層となっているものである。本調査区においては、層厚は60cm程度で、上半40cmは粒子が粗く、下半20cmは細かい。基本的に無遺物で、遺物は確認していない。第6層の黒褐色土は、黄色砂直下でひろく確認されている弥生前期以前の遺物包含層に相当する。きわめて黒色味が強い、堅く締まった粘質の土壤であるが、黄色砂との境となる層の上面は、2cm程度の厚みをもった淡茶褐色のシルトが膜状に覆っている。今回の調査では、工事の掘削深度がこの層の直上まででとどまることから、西壁際の1m幅のみの掘り下げにとどめた。縄文後期～晩期中葉ころとみられる粗製土器片が微量出土している。

以下の堆積は、西壁際の北端のみを深く掘り下げて確認した。黒褐色土は、色調が漸移的に薄くなりながら下部の第7層黄褐色土へ移行する。第6層と第7層の違いは、土壌化による黒色を呈しているか否かのみであって、質的には差がない。そして、この第7層は、

層 位

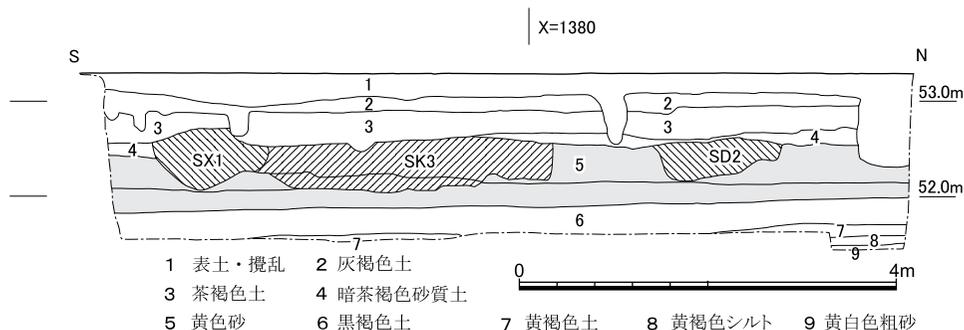


図14 調査区西壁の層位 縮尺1/80

黄褐色の堅い粘質土から、下部になるほどシルト質、そして黄白色の粗砂へと移行する。それぞれ第8・9層と分層しているが、境界は漸移的である。出土遺物は確認していない。

層位からみた周辺の地形環境 今回の調査成果と、周辺調査区での層位の情報とを総合して、一帯における地形環境についていささか検討しておきたい。

今回の調査区が位置する吉田南構内西縁の地表面は53.4m前後、近世の灰褐色土上面で53.1mをはかり、境界の石垣を挟んで東側をはしる東大路通り歩道面52.7mとで段差が生じている。この段差は、南北方向にはしるもので、現状地形では北方へいくほど高低差が生じている。調査区西方40mの74地点においては、調査区の東半の近世包含層は削平されてしまっており、表土下の中世包含層上面で51.5m程度をはかる。仮に50cmほど削平されていると見積もっても、今回の調査区とは1m以上の段差が、近世の段階にすでに生じていたとみてよい。74地点を含めた医学部構内一帯以西は、ほとんどの地点で平安末期以降の遺構・遺物しか見つからないため、その時期までは高野川系旧流路の影響を被る不安定な空間であったとみなされてきた。今回調査区は全くその影響を受けていないことが判明したので、74地点東端との間のどこかに、高野川系旧流路の東限のひとつを求めることが可能であろう。今回の調査区とこの74地点とで最も異なるのは、第5層黄色砂・第6層黒褐色土の存否であり、これらが弥生中期以降に浸食を被ったことで、現代にまで痕跡を留める段差の形成につながったと推察できる。

こうした復元は、すでに本部構内の60地点の所見などからも述べられてきた〔清水1991〕。ただし、60地点では、黄色砂を浸食する流路内に堆積する高野川系旧流路由来の砂礫層が確認できているのに対して、今回は未確認である。こうした、浸食崖ともいふべき状況が、現状地形の段差に近い位置で認められるのか、またそこに流路由来の砂礫が見いだされるのかどうか、今後機会を得て検証する必要がある。

3 遺 構

今回は、黄色砂上面ですべての遺構を検出した（図版7，図15）。

先史時代の地形 前節で述べたように、弥生前期以前の遺物包含層と推定される第6層の黒褐色土は、破壊が及ばないため、西壁際の1m幅のみ掘削している。そのため遺構は全く確認できていないが、西壁際のほかに北壁際・東壁際についても層上面のレベルのみは測定し、弥生前期末段階の地形復元の資料とした。その結果、最も高いのは調査区北西隅付近で52.01m、低いのは南東隅で51.80mであった。東に隣接する111地点でもほぼ同様な結果が得られており、弥生前期末の段階では、北から南に向けてごくゆるやかにくだる地形であったことがあらためて確認された。

古墳時代の遺構 調査区北辺を東西方向にはしる溝SD2は、堅く締まった黒色土を埋土とし、断面は浅いU字形を呈する。最大で幅140cmほどで、東へ向かうほど浅くなり、東壁付近では輪郭不明で断面にも表れていない。一方西壁付近では深さ30cmあまりをはかり、わずかに南へ屈曲するかのような平面形を呈する。底面からわずかに浮いた位置で完形の須恵器杯身（Ⅲ11）と杯蓋（Ⅲ10）がともに伏せた状態で並んで出土した（図版7-2）。こうした状況からみて、この溝は方形の古墳の北側周溝にあたる可能性が高い。東側の111地点で5基、220地点西辺で1基、方形周溝をもつ古墳がみつかっており、吉田二本松古墳群の1～6号墳とされている。出土する須恵器はいずれも5世紀後葉に比定できるもので、今回出土の須恵器もほぼ同時期の型式であることから、群を構成する古墳があらたに発見されたものととらえて、「7号墳」としておきたい。

奈良・平安時代の遺構 溝SD1とSD3、土坑SK3がある。このうちSD1は、淡い茶褐色土を埋土とし、幅1m深さ20cm程度をはかる。やや蛇行気味だが、東に振れる方位で南北方向にはしるもので、底面のレベルは南方がわずかに低い。平安中期の土師器片が出土している。SD3は、このSD1に切られるように検出された細い溝状遺構で、北西-南東方向の3m程度を検出している。須恵器片1点のみしか出土していないが、切り合い関係からみて、平安時代以前の遺構であることは間違いない。

土坑SK3は、西壁際で南北に3m程度と長く検出された隅の円い土坑。東西方向のひろがり、1mあまりが調査区内にかかるのみで、全形は不明。また南辺も中世の集石SX1に攪拌されており不明瞭となっている。埋土の上層は黒褐色の砂質土で、下層は黄色粘土をまじえた黒褐色土となり、この下層から鞆羽口（Ⅲ18）が出土している。東側の111

遺 構

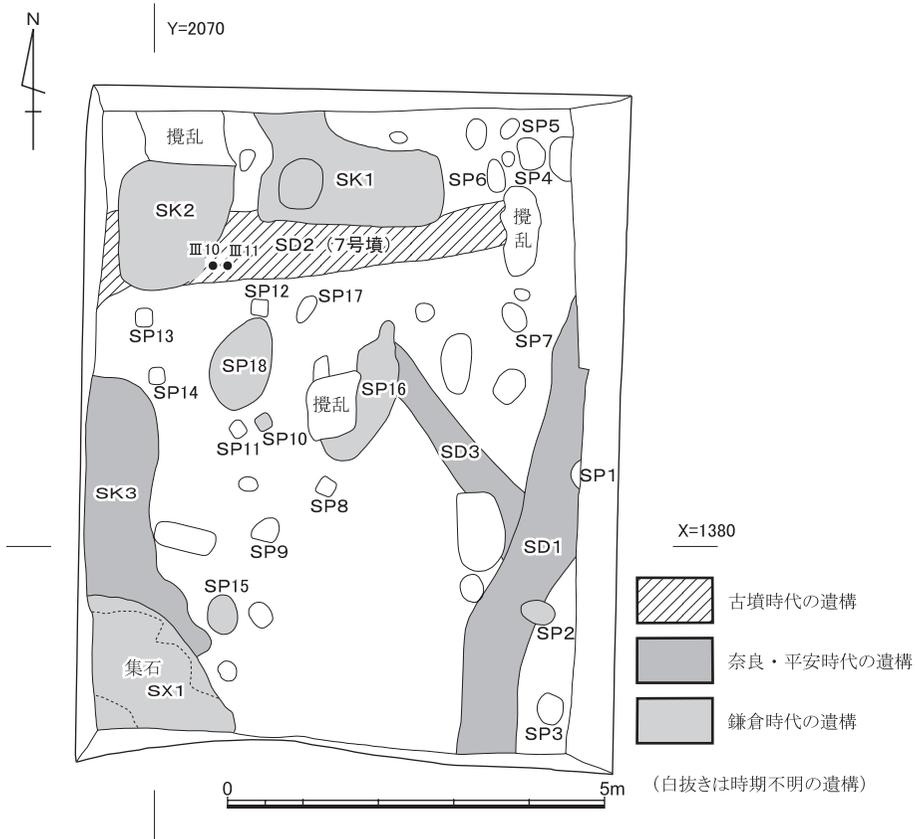


図15 調査区検出の遺構 縮尺1/100

地点および220地点における平安中期（10世前葉ごろ）の梵鐘鑄造土坑群まで30mの位置にあり、それらの鑄造施設で使用した羽口や粘土塊を廃棄した遺構と判断する。ただし、他の出土遺物に平安中期のものはなく、古墳～奈良時代に帰属するとみられるものが占めて、まとまりがない。鑄造施設が古墳を壊して設けられている状況からみて、造営や操業時に出土した先行する時期の遺物もあわせて廃棄されたものと理解したい。

中世の遺構 1mあまりの規模をもつ不定型な土坑SK1・2、集石遺構SX1のほか、小規模な土坑にSP2・10・15・16・18がある。このうちSP15は内部に扁平な石を据えた柱穴である。いずれも埋土は茶褐色土で、出土した土師器から、13世紀後葉～14世紀前葉の鎌倉時代後半期に比定される。

調査区北辺の土坑SK1およびSK2は、ともに深さ50cm程度。土師器やおおぶりの陶

磁器片がまとまって出土し、廃棄土坑とみられる。調査区西南隅の集石S X 1は、幅1 m 高さ50cmあまりの規模に15cm程度大の石を集め、弧を描くような平面形で西および南の調査区外へと続く。石室遺構のコーナー部がの可能性もあるが、石積みは乱雑である。黄色砂を30cm以上掘り窪めて石を積み、集石内や周辺部から多量の遺物が出土している。

4 遺 物

(1) 古代以前の遺物 (図版8, 図16~17)

縄文時代の遺物(Ⅲ1~Ⅲ9) 第6層の黒褐色土中より出土した破片を示す。Ⅲ1・Ⅲ2は口縁部で、丸く収めた端部に刻み目を施している。縄文晩期中葉の粗製深鉢かとみられる。Ⅲ3~Ⅲ9は無文の胴部片で、外面は削りや撫でで仕上げている。こうした特徴からみて、いずれも後期~晩期の粗製深鉢片であろう。

S D 2 (7号墳) 出土遺物 (Ⅲ10~Ⅲ12) Ⅲ10・Ⅲ11は須恵器蓋と杯で、完形。溝内で伏せた状態で並んで出土した。Ⅲ10は口径12.5cm高さ4.8cm, Ⅲ11は口径10.8cm高さ5.8cm。双方の外面は時計回りの回転篋削りののち、回転撫でで丁寧調整され、削り痕はほとんど消えている。器形としては蓋・身とも稜がシャープに作られており、法量や調整なども考慮すると、これらは陶邑編年〔田辺1981〕におけるT K23型式に比定できる。Ⅲ12は須恵器甕の底部とみられる破片で、わずかに窪む。底部外面は、中央付近を手持ちで撫でつけており、外周を回転撫で調整している。

S K 3 出土遺物 (Ⅲ13~Ⅲ18) 古墳~奈良時代とみられる各時期のものが混在している。Ⅲ13は土師器甕。球胴で、くの字状に屈曲する頸部から直線的に短い口縁部が立ち上がる。器壁は薄く、内面には浅い刷毛調整が、外面には底部付近から軽く削り上げている痕跡がみられるものの、全体として摩滅。古墳時代に属するものだろう。Ⅲ14は土師器の浅い鉢形土器。器壁はやや厚手で、口縁部内面と外面胴下半に粗い刷毛調整がのこる。奈良時代に比定できる。Ⅲ15は須恵器蓋。頂部を欠き、口縁部は横撫で調整されて短く外反する器形。復元口径13.0cm。型式比定は難しいが、古墳時代であろう。Ⅲ16は須恵器杯B底部。高台は剝離して痕跡だけが残る。奈良時代だろう。Ⅲ17は須恵器鉢。平底の底部から丸みをもってたちあがり、直線的な口縁付近がわずかに内傾する器形で、焼成はやや甘く灰色を呈する。平底の底部に篋おこし痕が残る、周囲は時計回りに回転篋削り、胴部から口縁にかけて横撫で調整。器形から7世紀後葉ころの製品かとみられる。

Ⅲ18は鞆羽口の先端部分。外径7.2cm, 内部の送風口の径は3.2cm。石英や長石の砂粒を

多量に含んだ胎土である。先端は丸くすぼまるような形状で、その周囲を中心に鉞滓が厚く付着しているほか、発泡したり溶融してガラス化している部位もみられる。220地点の鑄造土坑内にも同様な羽口が数点廃棄されており、また病院構内においても中世段階のものが出土し、小型の溶解炉用のものとされている〔五十川1991〕。

S D 1・S D 3 出土遺物（Ⅲ24・Ⅲ31） Ⅲ24は土師器皿で、「て」字状口縁手法のB₂類。Ⅲ31は須恵器杯Aの破片。

茶褐色土および中世遺構への混入出土品（Ⅲ19～Ⅲ23・Ⅲ25～Ⅲ30・Ⅲ32～Ⅲ43）
中世の遺構や包含層である茶褐色土から出土した古代の遺物を種類別に呈示する。

Ⅲ19～Ⅲ23は製塩土器で、奈良時代の製品だろう。砂粒を多く交えた粗い胎土で、器壁は厚く、粘土紐の継ぎ目を明瞭に残すようなつくりである。いずれも小破片だが、口唇部は尖らせるものと明らかな面をもつものとがみられる。これまで本部構内や吉田南構内の奈良時代の遺構・遺物の見つかる地点では、同種の製品がよく出土している。

Ⅲ25・Ⅲ26は土師器。Ⅲ25は土師器皿B₁類、Ⅲ26は鉢。口縁部は水平に近く外折し、端部を内側に巻き込むように仕上げる。内面は丁寧に横撫で調整されているが、外面は粘土紐の継ぎ目が残る。いずれも茶褐色土の上層から出土。

Ⅲ27は二彩陶器の破片。白色の精良な胎土で、両面に緑色～淡黄色の釉が残る。

Ⅲ28は白色土器の底部。削出しの円盤状高台で、内外面とも丁寧な磨きが確認できる。精良な胎土で堅緻な焼成である。施釉の痕跡は確認できないので白色土器としておく。

Ⅲ29・Ⅲ30は黒色土器碗の口縁。いずれも内面のみ黒色処理して研磨するA類。

Ⅲ32～Ⅲ43は須恵器。Ⅲ32～Ⅲ35は杯A、Ⅲ36・Ⅲ37は杯B、Ⅲ38～Ⅲ40は壺Gの口縁や底部、Ⅲ41・Ⅲ42は蓋、Ⅲ43は外面に格子目叩きを施す甕。

以上のうち、Ⅲ22がS P 18、Ⅲ39・Ⅲ41がS K 2、それ以外は茶褐色土から出土した。

(2) 中世の遺物（図版8，図18～21）

S X 1 出土遺物（Ⅲ44～Ⅲ82） Ⅲ44～Ⅲ60は赤褐色を呈する土師器皿。小皿ではⅢ44～Ⅲ48がE₁類、Ⅲ49～Ⅲ53はE₃類。大皿ではⅢ54がE₁類、Ⅲ55～Ⅲ60がE₂類。Ⅲ61～Ⅲ68は灰白色を呈する土師器碗。小碗は底部わずかに凹む形状である。

Ⅲ69は瓦器鍋。強く外折して立ち上がる口縁部で、口径27cm。Ⅲ70・Ⅲ71は常滑産陶器甕の胴部スタンプ文と、口縁部。Ⅲ72～Ⅲ74は青磁の合子蓋、梅瓶、および鎬蓮弁の碗。Ⅲ75は青白磁の破片。毛彫り風の文様で飾られ、瓶の胴部とみられる。Ⅲ76・Ⅲ77は軒丸瓦の瓦当片。Ⅲ76には右回りに頭部を巻き込む巴文の一部が残る。Ⅲ78は石鍋の鏝部分の

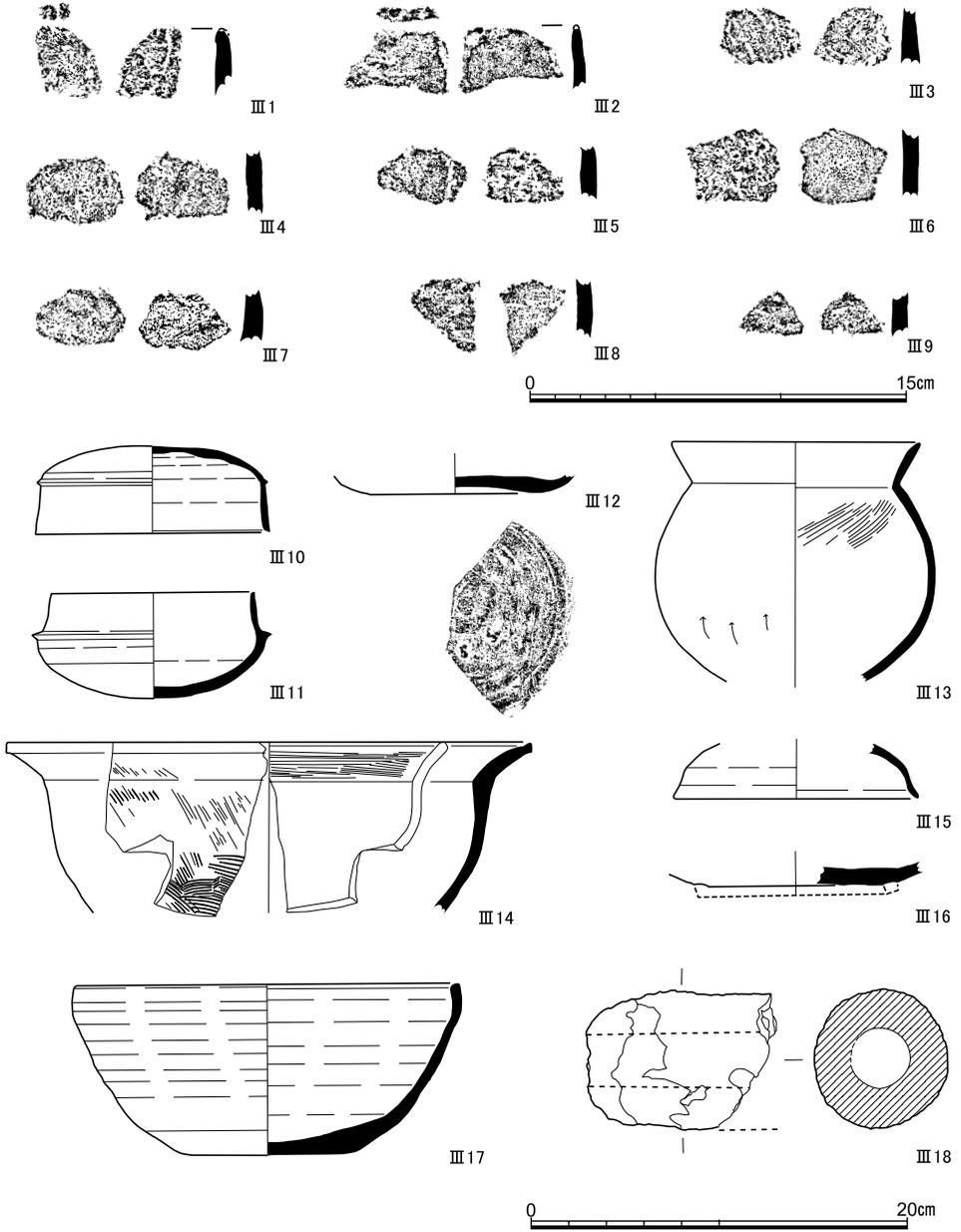


図16 黒褐色土出土遺物（Ⅲ 1～Ⅲ 9 縄文土器），S D 2 出土遺物（Ⅲ 10～Ⅲ 13 須恵器），S K 3 出土遺物（Ⅲ 13・Ⅲ 14 土師器，Ⅲ 15～Ⅲ 17 須恵器，Ⅲ 18 轆羽口） Ⅲ 1～Ⅲ 9 縮尺1/3

遺 物

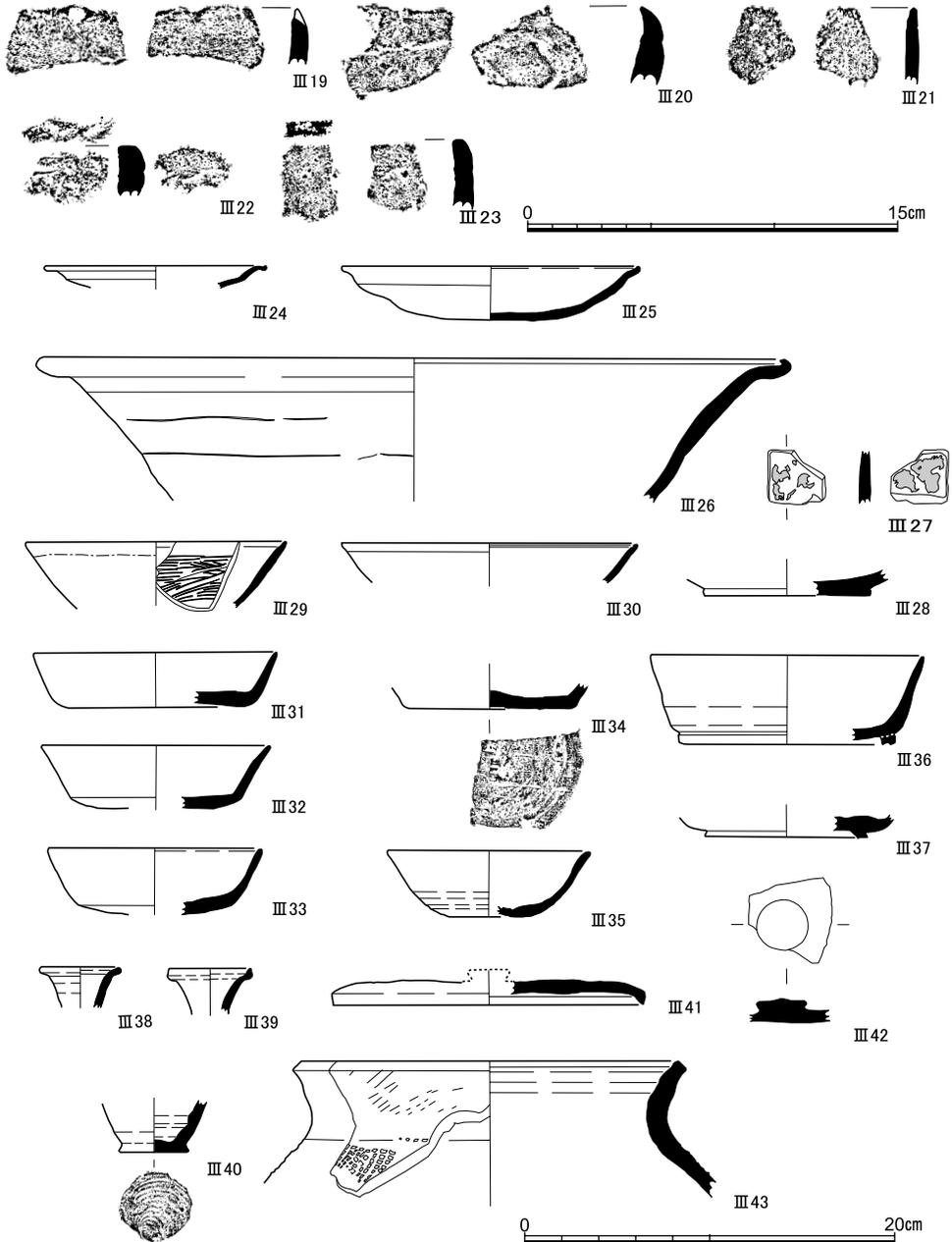


図17 S D 1 出土遺物 (Ⅲ24土師器), S D 3 出土遺物 (Ⅲ31須恵器), S K 2 出土遺物(1) (Ⅲ39・Ⅲ41須恵器), S P 18 出土遺物(1) (Ⅲ22製塩土器), 茶褐色土出土遺物(1) (Ⅲ19～Ⅲ21・Ⅲ23製塩土器, Ⅲ24～Ⅲ26土師器, Ⅲ27二彩陶器, Ⅲ28白色土器, Ⅲ29・Ⅲ30黑色土器, Ⅲ32～Ⅲ38・Ⅲ40・Ⅲ42・Ⅲ43須恵器) Ⅲ19～Ⅲ23 縮尺1/3

破片で、内面を仕切るように突起部が設けられる。Ⅲ79～Ⅲ81は砥石。Ⅲ79は黄白色で軟質の石材で、目は細かく、かなり薄くまですり減っている。Ⅲ80・Ⅲ81は淡赤褐色を呈し、目はやや粗い。Ⅲ82は宋銭で、元豊通寶（1078年初鑄）の篆書体。

S K 1 出土遺物（Ⅲ83～Ⅲ85） Ⅲ83・Ⅲ84は常滑産かとみらる陶器甕の口縁。Ⅲ83は内面に自然釉がかかり、細くすぼまる口唇部端面に細い凹線1条が施される。Ⅲ84は面をとる口縁部で、横撫でで仕上げる。ともに、比較的古相の型式的特徴を示している。Ⅲ85は壁土と思われる焼土塊で、赤褐色を呈する。下面は平滑に仕上げているが、もう一面には藁が抜けたような圧痕が明瞭にのこる。

S K 2 出土遺物（Ⅲ86～Ⅲ100） Ⅲ86～Ⅲ94は土師器。Ⅲ86～Ⅲ91は赤褐色を呈する皿類で、Ⅲ86は口縁部をまっすぐつまみ上げただけのような特殊品。Ⅲ87は小皿で一段撫で手法E₁類の口縁部をもつ。以下は大皿で、Ⅲ88はD₃類、Ⅲ89はD₅類、Ⅲ90・Ⅲ91はともにE₁類。Ⅲ92は灰白色を呈する椀。Ⅲ93は回転糸切り底をもつ土師器小皿で、灰白色を呈する。Ⅲ94は口径12.4cmをはかる器壁の厚い特殊品で、内外面とも粘土紐の継ぎ目痕をそのまま残す。口唇部は一段撫で面取り手法風に仕上げる。黄褐色を呈する。

Ⅲ95・Ⅲ96は瓦器。Ⅲ95は小型の輪花椀の完形品で、見込みに暗文で花文を施す。Ⅲ96は鍋で、逆L字状に屈曲するしっかりとした口縁部をもち、口径26.0cmをはかる。

Ⅲ97・Ⅲ98は須恵器で、東播系の須恵器摺鉢と甕。Ⅲ99は灰釉系陶器の小皿。

Ⅲ100は滑石製の円盤形を呈する蓋で、中央に方形の孔が開いている。

S P 2・10・15・16・18 出土遺物（Ⅲ101～Ⅲ112） 中世の小土坑やピットからの出土品。Ⅲ101～Ⅲ104・Ⅲ106～Ⅲ108・Ⅲ110は赤褐色を呈する土師器皿で、D₆類ないしE₁類。Ⅲ105・Ⅲ109は灰白色の土師器椀で、小形でも底部は凹まない。Ⅲ111・Ⅲ112は白磁で、Ⅲ111は椀の底部、Ⅲ112は水注などに付属する扁平な把手とみられる。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ113～Ⅲ164） Ⅲ113～Ⅲ133は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅲ113・Ⅲ114はD₃類、Ⅲ115～Ⅲ117はD₆類、Ⅲ118～Ⅲ126はE₁類、Ⅲ127はE₃類の小皿。Ⅲ128～Ⅲ133はいずれもE₁類の大皿。Ⅲ134～Ⅲ140は灰白色を呈する椀、Ⅲ141～Ⅲ143は灰白色を呈する受皿。Ⅲ142・Ⅲ143はともに完形品。

Ⅲ144～Ⅲ148は瓦器。Ⅲ144・Ⅲ145は椀で、Ⅲ144は器壁が薄く、内面にまばらな磨きが見られるのに対して、Ⅲ145は器壁が厚く、内外とも密に磨かれており、いびつだが厚ぼったい高台がしっかりとつく。ただし、やや摩滅している。ともに楠葉型とみられるが、後者の方が型式的に古いものであろう。Ⅲ146は厚手の器壁をもつすり鉢状の器形に

遺 物

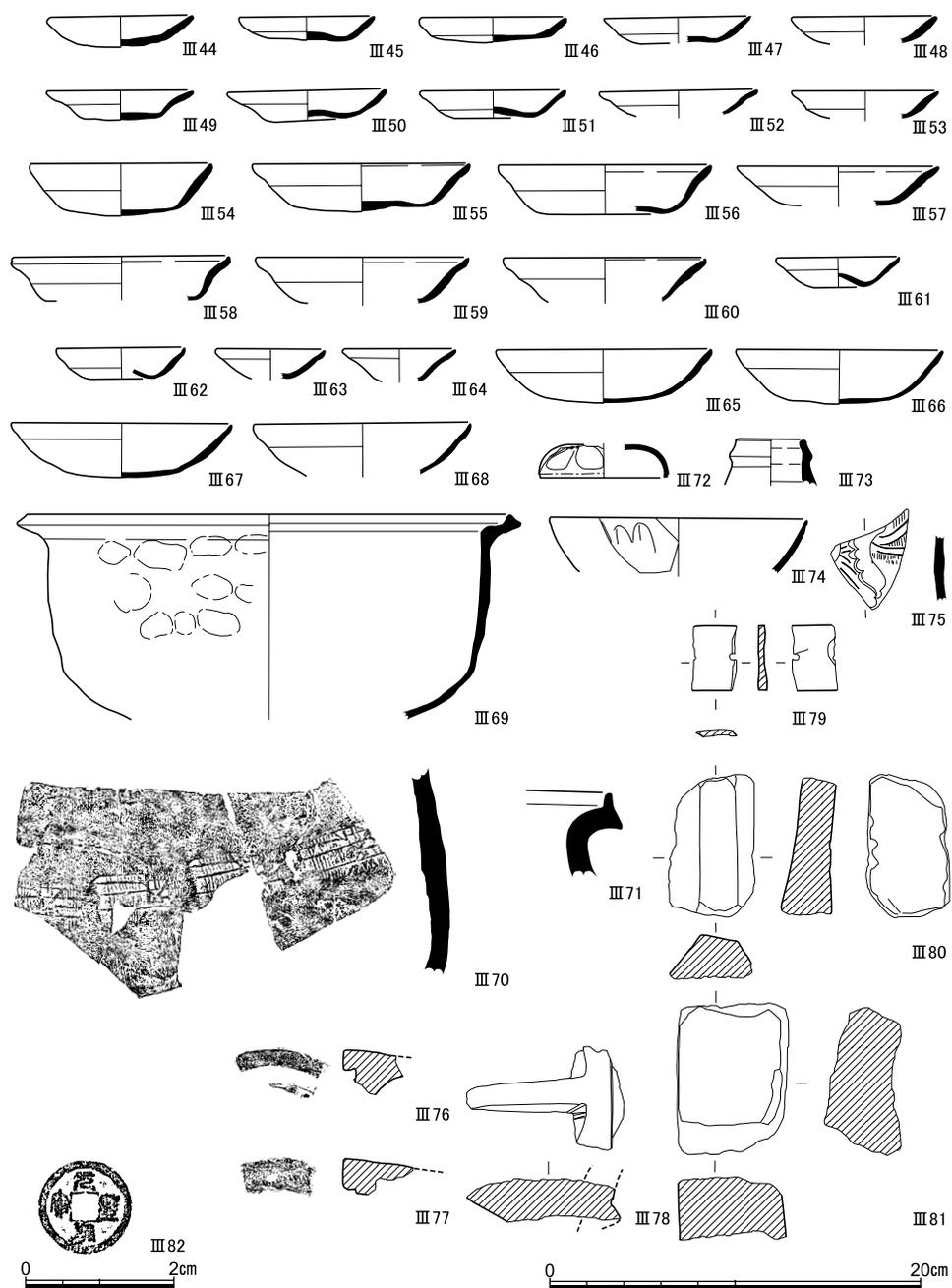


図18 S X 1 出土遺物 (III 44~III 68土師器, III 69瓦器, III 70・III 71陶器, III 72~III 74青磁, III 75青白磁, III 76・III 77軒丸瓦, III 78滑石製品, III 79~III 81砥石, III 82銭貨) III 82のみ縮尺1/2

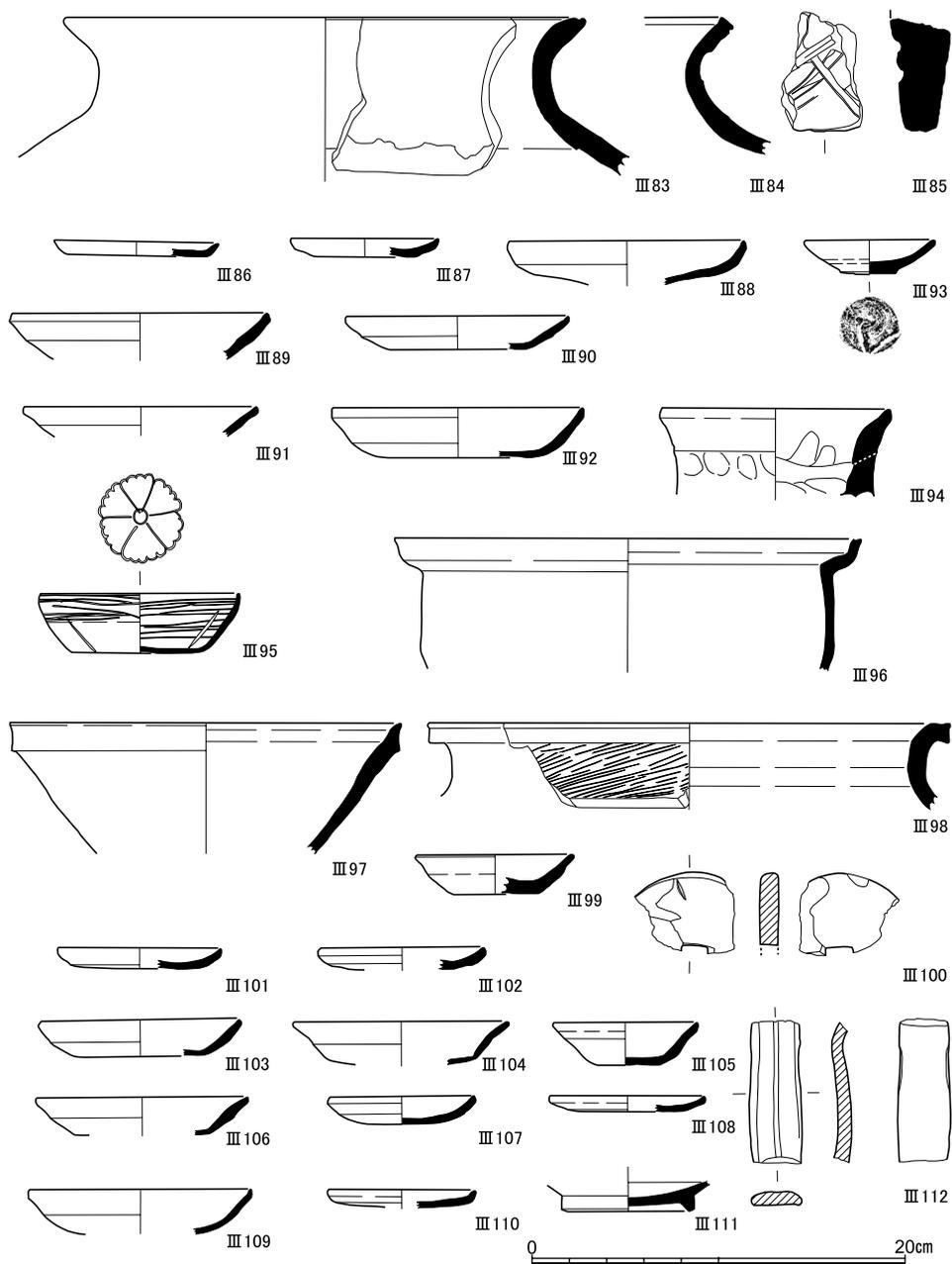


図19 S K 1 出土遺物 (Ⅲ83・Ⅲ84陶器, Ⅲ85壁土?), S K 2 出土遺物(2) (Ⅲ86~Ⅲ94土師器, Ⅲ95・Ⅲ96瓦器, Ⅲ97・Ⅲ98須恵器, Ⅲ99灰釉系陶器, Ⅲ100滑石製品), S P 2 出土遺物 (Ⅲ101~Ⅲ105土師器), S P 10 出土遺物 (Ⅲ106土師器), S P 15 出土遺物 (Ⅲ107~Ⅲ109土師器), S P 16 出土遺物 (Ⅲ110土師器), S P 18 出土遺物 (Ⅲ111・Ⅲ112白磁)

遺 物

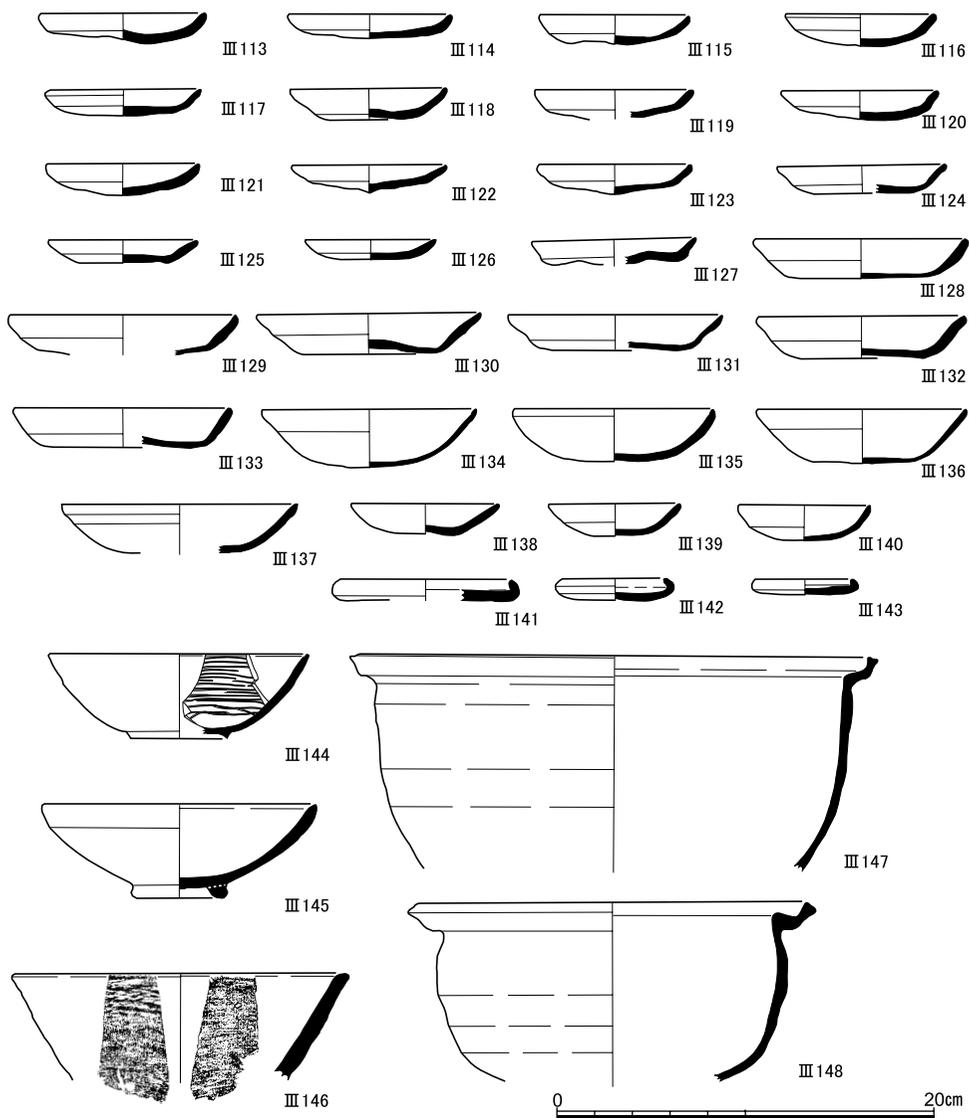


図20 茶褐色土出土遺物② (III 113～III 143土師器, III 144～III 148瓦器)

なるとみられるが、小片であり确实さを欠く。内面は磨かれているが、口縁部の外面付近に縄叩き痕が残る。III 147・III 148は鍋。ともにしっかりと屈曲して情報に立ち上がる口縁部をもつ。III 149～III 153はいずれも常滑産陶器甕の口縁部各種。端部はそのまま尖って収束するものから、上方に立ち上がる形状のものまでさまざまにみられる。III 154は褐釉陶器の壺。四耳壺であったとみられるが、剝落して欠失している。III 155・III 156は青磁の皿

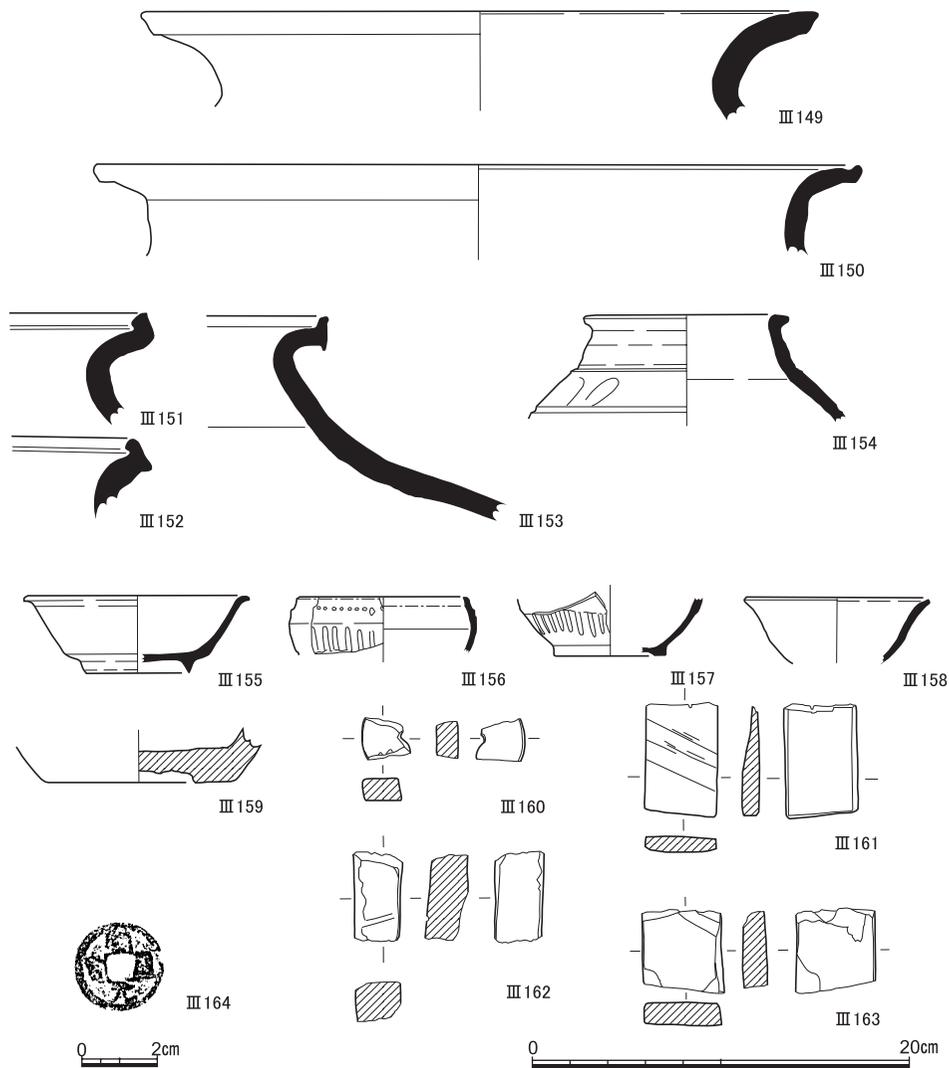


図21 茶褐色土出土遺物③ (Ⅲ149～Ⅲ153陶器, Ⅲ154褐釉陶器, Ⅲ155～Ⅲ156青磁, Ⅲ157青白磁, Ⅲ158白磁, Ⅲ159・Ⅲ160滑石製品, Ⅲ161～Ⅲ163砥石, Ⅲ164錢貨) Ⅲ164のみ縮尺1/2

と合子身, Ⅲ157は青白磁の合子身, Ⅲ158は白磁の口禿皿。Ⅲ159・Ⅲ160は滑石製品で, Ⅲ159は石鍋の底部で底面が剥落したもの, Ⅲ160は円形で中央部に穿孔したもので, 紡錘車状の製品かとみられる。Ⅲ161～Ⅲ163は砥石。薄手の扁平なものから角柱状のものまで各種がある。Ⅲ164は渡来錢で, 開元通寶 (621年初鑄)。

5 小 結

今回の調査成果の要点を簡潔にまとめつつ、周辺地点の調査成果もまじえて、先史時代から近世にいたる調査地一帯の変遷について復元を試みておく。(図22)

先史時代の遺跡 今回は、黄色砂の下層に安定した黒色腐食土層がみつめられたが、

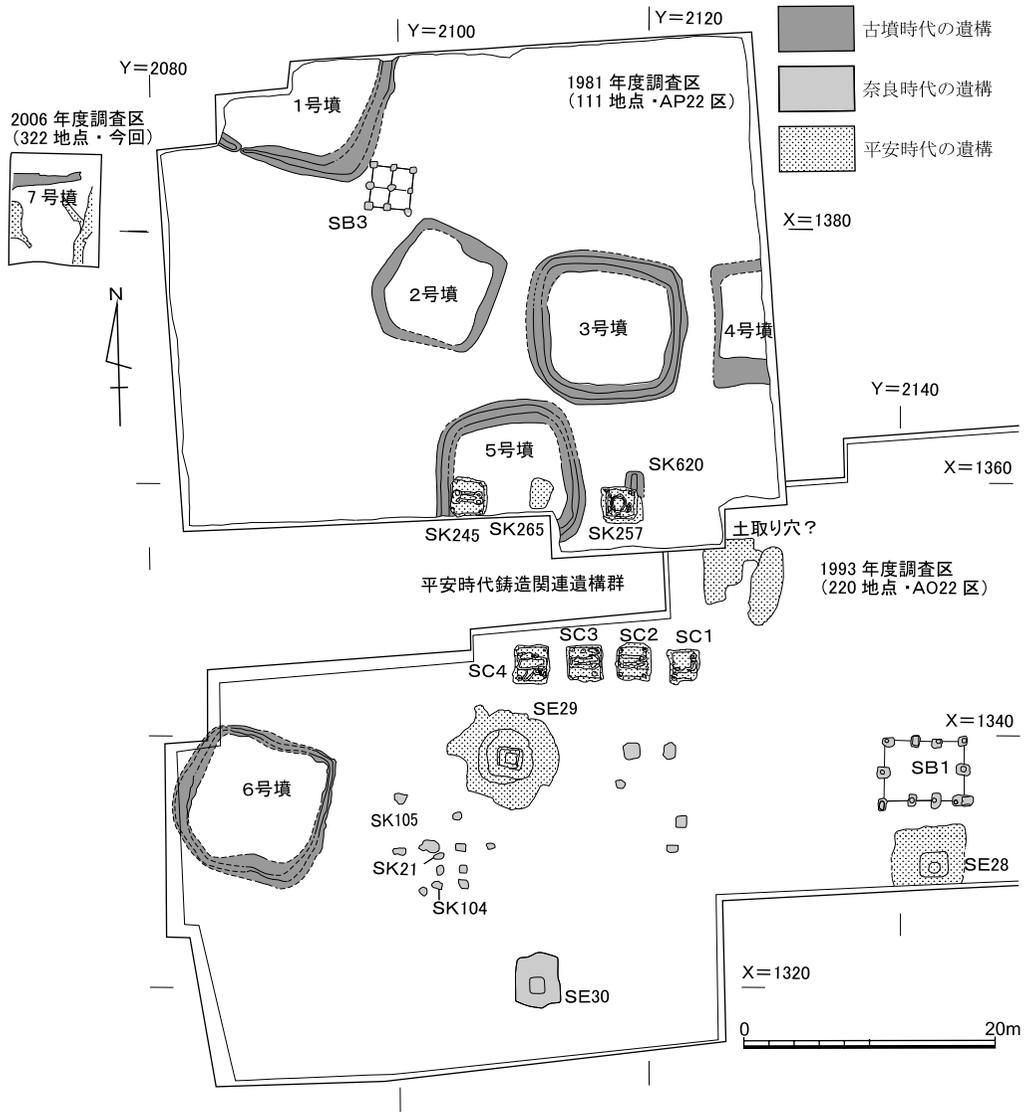


図22 調査区周辺の古代以前の遺構 縮尺1/600

発掘面積が狭小なこともあり、縄文後～晩期ころの粗製土器片を少量検出するにとどまった。調査区の東方では弥生前期の水田や流路、縄文晩期末の突帯文土器のまとまった出土地点などがみつがっているが、111・220地点とも西辺部ではそれらの時期の遺物の出土傾向には乏しくなっていくことから、少なくとも縄文晩期末から弥生前期にかけての遺跡のひろがりについては、今回調査地まで及んでいないとみなしうる。それとは別に後期～晩期中葉ころまでの土器の出土が目立つ傾向にあり、今後注意をはらう必要がある。

古墳時代の遺跡　今回は弥生中期に関する成果はなく、周辺でも弥生後期～古墳前期までの成果は得ておらず、5世紀後葉の方形墳検出段階まで空白期となる。今回は、北側周溝とみられる一辺を確認できたにとどまるが、西側の111地点西北部で検出されている方墳群に連なるものと判断でき、「吉田二本松7号墳」とした。鴨東地域ではこの段階の墳墓の様相はほとんどわかっておらず、供献とみられる須恵器資料とともに貴重な情報を提供する成果といえよう。なお、220地点西北辺の6号墳の成果報告も未刊行であり、次年度以降今回の成果と合わせて古墳群としての検討をおこなっていくことにしたい。

古代の遺跡　奈良時代については、遺構こそ検出されなかったものの、須恵器や製塩土器などが出土しており、111・220地点でみつがっている8世紀半ばころの遺跡のひろがり及んでいるものとみてよい。平安時代については、10世紀初頭の鑄造遺構群に関連するとみられる鞆羽口の出土が特筆される。ほかにも同時期の溝や遺物がみつがっていることから、鑄造遺跡のひろがりも今回の調査地点に及んでいると想定される。今後具体的な空間構造の復元にむけて、検出遺構の再検討をおこなうとともに、周辺での調査機会が生じた場合は十分留意して対応する必要がある。

中世の遺跡　鎌倉時代後半期を中心とするまとまった遺構と遺物が得られた。西側の220地点、その南方の261地点では室町時代にくだる成果も多数得られており、注意される。今回の調査地は、近代以前の地割では「字窪」に属し、東方の「字走り矢倉」と異なる。中世段階での土地利用の違いが反映されている可能性があり、今後遺構の配置や帰属時期などで検証する必要がある。

近世の遺跡　大学設置まで耕作地であったといえる以上の知見は得られていない。

第5章 京都大学構内における分布調査・立合調査

千葉 豊 伊藤淳史 富井 眞

第1章に記したように、2004～2006年度に京都大学構内で実施した分布・立合調査は16件である。このうち、桂キャンパスの1件、芦生研究林構内の1件、本部構内の3件、北部構内の2件については、重要な知見が得られたので、ここで報告しておきたい。なお、桂キャンパスについては、2001・2003年度の分布・立合調査の成果もまとめて詳述する。

1 京都大学 桂キャンパスにおける分布・立合調査

調査の概要 京都大学桂キャンパスは、TechnologyとScienceが融合するテクノサイエンス・ヒルの形成を目指して、1999年9月に工学研究科・情報学研究科の新キャンパスとして認められた。キャンパスは京都市西京区京都大学桂に所在し、敷地内は、A～Dの4つのクラスターに分かれている。2001年2月、Aクラスターでの総合研究棟建設工事の着工をはじめとして、順次、建物の建設工事が進行している(図23)。

4つのクラスターのうち、A～Cの3クラスターについては、その用地は住宅・都市整備公団によってすでに宅地開発されている。一方、Dクラスターについては、その北西側

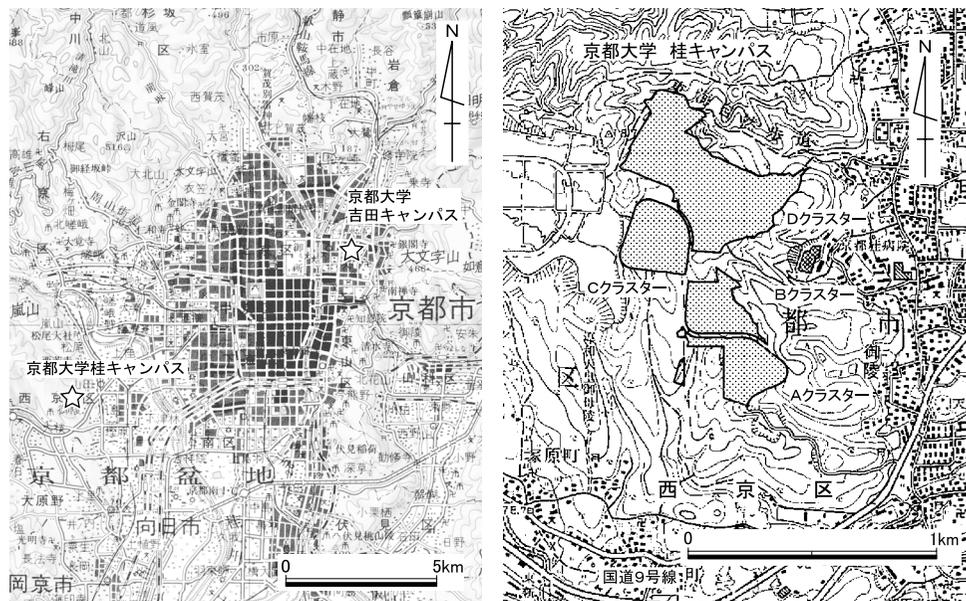


図23 桂キャンパスの位置 左：1/25万，右：1/3万

一帯が鎌倉時代創建の法華山寺および戦国時代の山城・峰ヶ堂城の範囲内となっており、山田桜谷古墳群および山田谷田山古墓群が北に隣接する地点に分布している〔京都市文化市民局2007〕。現況が山林や竹林で開発の手がほとんど及んでいないことから、遺跡登録地点についてはその状況を、遺跡として認定されていない地点については埋蔵文化財の有無を確認する必要があるが生じた。

このため、2001年11月20日、2004年1月28日、2004年7月1日の3回に分けて、Dクラスター全域の分布調査をおこなった。また2003年度には、Dクラスター内に調整池および工事用の取り付け道路の設置が計画されたため、2003年6月23日と2004年3月9日に立合調査を実施した。本報告は、2001年度～2004年度までにおこなった分布・立合調査の成果をまとめたものである。

なお、住宅・都市整備公団による宅地開発に先だって、A～Dクラスターを含む広範囲の分布・試掘調査が京都市埋蔵文化財研究所によっておこなわれている〔京都市埋文研1991〕。またDクラスターの北西側一帯が含まれる法華山寺跡（峰ヶ堂城跡）については、京都大学考古学研究会による詳細な分布・測量調査がおこなわれている〔京大考古研1992・94・95〕。この報告では、曲輪等に比定される平坦面に地点名がふられているので、今回の報告でもそれを併記しておきたい。

調査の成果（図24・25） 分布調査の成果を図24に記した地点ごとに列記する。

A地点：Dクラスター西北隅に位置するA地点には、明らかに人為的に造作されたと思われる平坦面がみられる。平坦面は3ヶ所確認でき、もっとも大きな平坦面は長さ60m、幅15m前後で、北東―南西方向に伸びる。この平坦面の北端、東側斜面下に、長さ・幅ともに10m前後の小規模な平坦面が2つ東西に並んで存在する。遺物は採集していないが、竹林ではないので相当古い遺構とみてよい。法華山寺ないしは峰ヶ堂城に関連する可能性がある。京大考古研がE平坦地群と名付けた地点にあたる。

B地点：Dクラスター中央北辺に位置する。尾根上に、人為的と思われる小さな平坦面がいくつか点在する。ただしこの地点付近には竹林が広がっており、竹林開発にともなうものの可能性が高い。

C地点：埋蔵文化財ではないが、調整池から西へ100～150m離れた工事用道路の北側切り通しで、断層を確認した。断層は、東が高く西が低くなっているように見える。破碎帯もともなっていた。西山断層群のひとつと思われる。

D地点：A地点から南へ100～150mの地点。この地点にも小規模ながら平坦面が確認

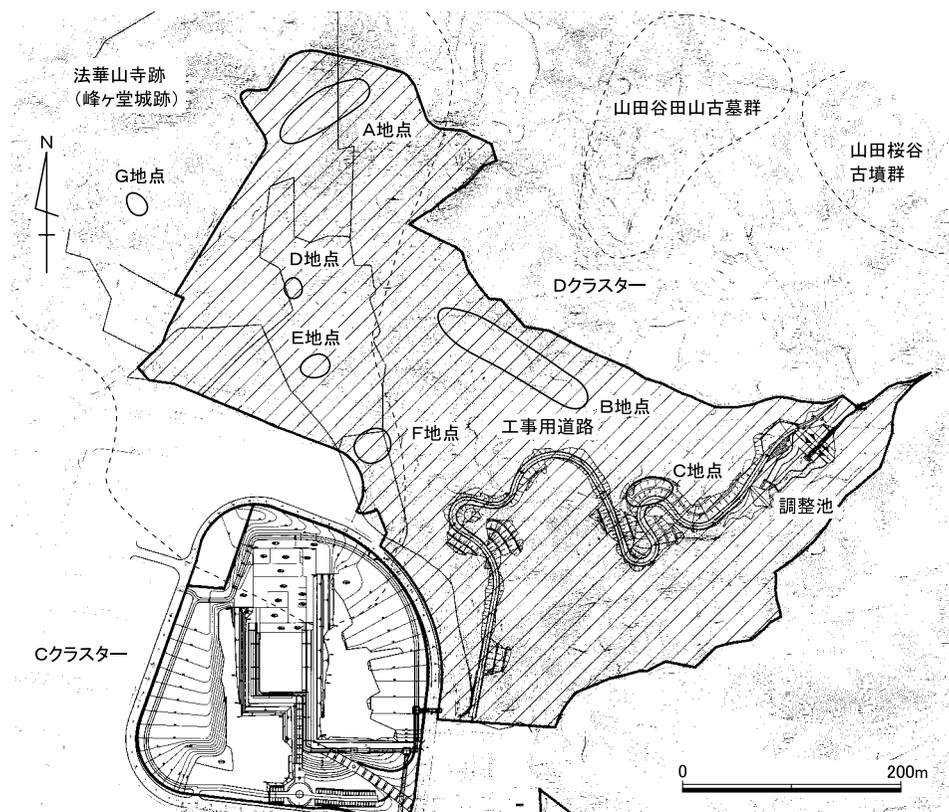


図24 分布調査地点 縮尺1/7000

できたが、現況が竹藪であり、竹林開発にともなう可能性が高い。

E地点：D地点から南へ70mの地点。谷状地形の奥部で、小規模な石垣を確認した。谷部を遮るように礫が野面積みされている。最大高1.2mをはかる。砂防堰堤と想定するが、構築年代は不明である。なおCクラスター内で、京都市埋蔵文化財研究所が試掘調査した「土手状遺構」は谷部をアーチ状に遮り裾部に礫を並べていて、砂防堰堤と想定されている〔京都市埋文研1991, pp.148-149〕。出土遺物から、江戸時代後半以降と考えられており、本地点の遺構の性格と年代を考える材料となろう。

F地点：E地点から南東90m前後で、京大考古研が中世の遺物を採集した地点。今回の踏査では、遺物の採集はできなかった。京大考古研のQ平坦地にあたる。

G地点：桂キャンパスの範囲外であるが、Dクラスター内に展開する法華山寺（峰ヶ堂城）の性格を明らかにする上で重要と考え、あわせて踏査をおこなった。京大考古研のT平坦地群。過去の踏査で、瓦罫類を主体とした多くの遺物が採集されており、法華山寺

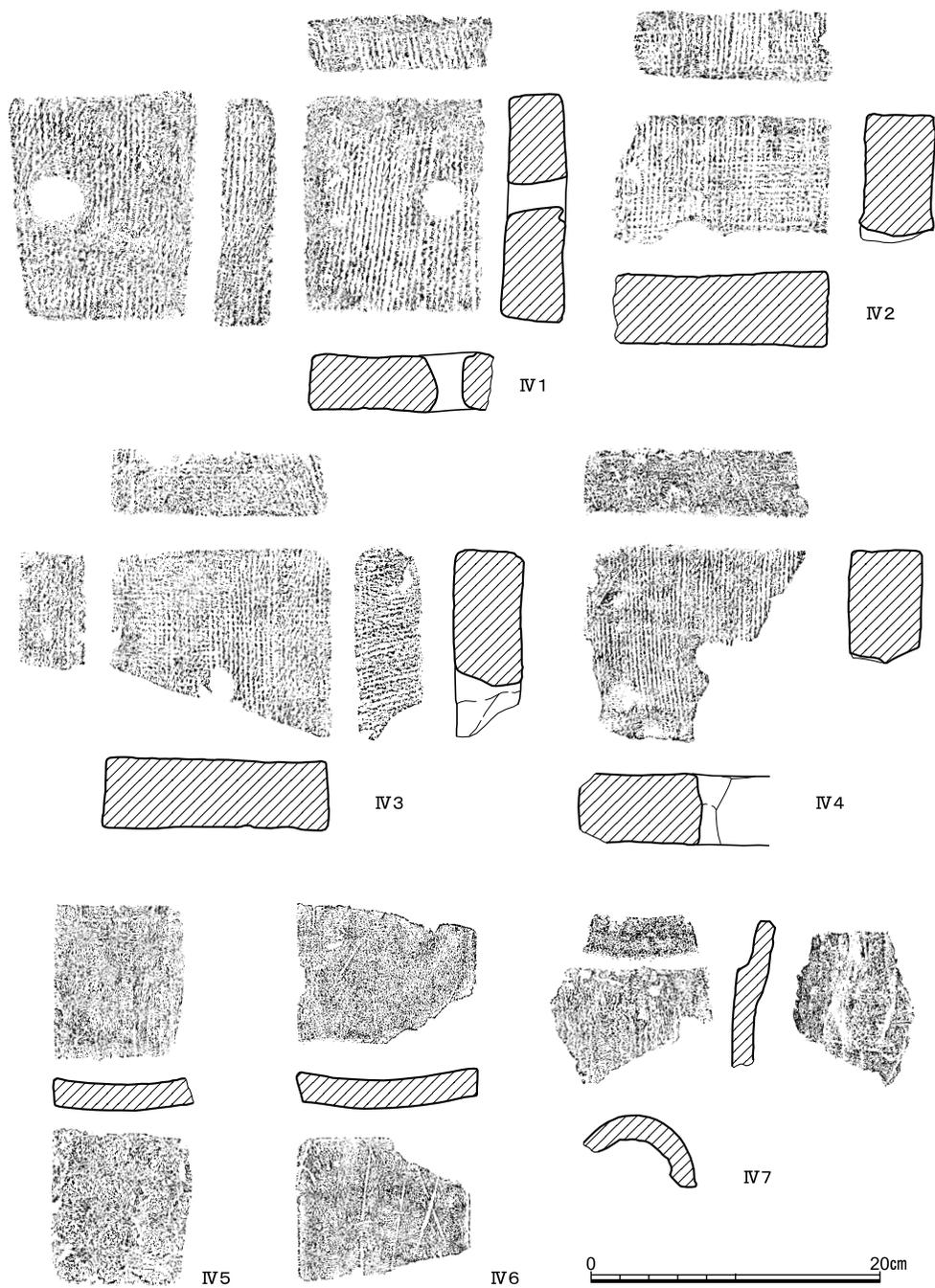


図25 G地点採集遺物 (IV1~IV4 罫, IV5・IV6 平瓦, IV7 丸瓦) 縮尺1/5

(峰ヶ堂城) 遺跡の中心的な部分にあたると思われる地点である。

T平坦地群の中で、TCと名付けられた標高の最も高い平坦地には、現在鉄塔が設置されているものの、その周囲に点在する平坦地群は比較的よく保存されている。そしてTC平坦地の北東側は、急な斜面となっているが、この斜面地には遺物が散在していた。

図25は、この地点で採集した遺物である。IV 1～IV 4は罫。いずれも全面に、縄叩きを施し、孔を穿つ。縄叩きは、長軸ないしは短軸のどちらかの方向にはほぼ平行するように施されるが、IV 2・IV 3のように90度直交させ重複して叩いているものもある。孔は両側からあけられており、開口部の直径は2～4 cmである。法量は短辺が15～16cm、厚さが4～5 cm前後。長辺は完形品がないため不明であるが、京大考古研の採集品に類似品があり、それによれば、33.5cm前後で、孔も2孔となるようである。IV 5・IV 6は平瓦。IV 7は玉縁のつく小型の丸瓦。凹面側の端部には面取りを施す。凸面に縦方向の縄叩きをもち、それを横方向の撫でによって消している。拓本でははっきりしないが、凸面に「×」の篋記号がある。

まとめ 法華山寺(峰ヶ堂城)の範囲内に含まれるDクラスター西半を中心として、遺跡の存在を想定させる観察所見を得た。また東半でも人為的と思われる平坦地を確認した。これらは最近の竹林開発にともなう可能性が高いとはいえ、さらに年代的に遡る可能性も捨て切れない。またE地点で発見した石垣については、その設置年代や用途・構造などをさらに調査する必要があるだろう。

以上の事実から、遺跡として登録されているDクラスターの西側一帯はもちろんのこと、現状では遺跡の範囲外となっている東側部分についても、中世寺院や戦国期山城の付帯的施設あるいは近世遺跡が展開している可能性を考慮すべきである。Dクラスターは、調整池や工事用道路の設置はあったものの、大部分の土地については未開発のままである。山林・竹林という現況であるので、分布調査は十分とはいえない。将来的な開発においては、さらに詳細な分布・試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認し、文化財保護の観点から必要な措置を講じつつ建物配置などの計画をしてゆく必要があることを指摘しておきたい。

分布調査および立合調査の参加者は以下の通り。清水芳裕(2001年11月20日・03年6月23日・04年3月9日)、千葉豊(全日程)、富井眞(2004年1月28日)、長尾玲(2004年1月28日・同年7月1日)。また、調査にあたっては、施設部担当職員および工事関係者のご協力をいただきました。末尾ながら記し、お礼申し上げます。(千葉 豊)

2 芦生研究林構内の立合調査

京丹波町（旧美山町）に所在するフィールド科学教育センター森林ステーション芦生（あしゅう）研究林は、京都市中心部から北に約35km、福井県と滋賀県に接する京都府北東部の由良川源流域に位置する（図26）。今回、研究林事務所（標高356m）構内に下水道施設整備が計画されたため、2004年10月29日に立合調査を実施した。

立合は、事務所構内のうち、職員宿舍棟などが立ち並ぶ平坦地を東西方向に横断する管路掘削工事にあわせて要所でおこなった（図版9）。いずれの地点でも、表土下に褐色や灰色の粘土層が安定して認められ、以下深さ2m程度まで粗砂層・砂礫層・粘土層が互層に水平堆積していた。大学敷地となる以前は水田であったとのことで、表土下の粘土層はその時期の耕作土層であろう。それ以下の堆積は、構内南側を流れる由良川に由来する自然堆積層とみられる。このように今回は、どの層からも人工遺物や人為的な地形改変の痕跡などは確認されなかったが、確認された粘土層のうちには、土壌化の進行した黒色腐食土層もあり、過去の一時期に湿地的な環境にあったことがうかがわれ、注意される。

芦生研究林の敷地内には、周知の遺跡は登録されておらず、また考古学的な調査が実施された履歴もない。今回は、広大な研究林敷地内の、それも事務所構内の一部というごく限られた知見であり、遺跡の存否を判断する材料はまだ無きに等しいと言ってよい。山城・丹波・若狭・近江の諸地域が境を接する内陸の山間地にも、各時代の豊富な文化財が存在することは良く知られており、今後も調査を継続していく必要がある。（伊藤淳史）



図26 芦生研究林と立合調査地点の位置（左：縮尺1/50万，右：縮尺1/5万）

3 本部構内の立合調査

吉田キャンパスの本部構内南半部では、多数の調査機会があった。以下に内容別に整理して報告しておく(図27)。

(1) 尾張藩邸に関連する調査成果

堀 本部構内の西半部に比定される幕末期の尾張藩吉田屋敷にともなう遺構としては、周囲を囲む堀があり、これまでに、75・89地点で東南隅のコーナー部が検出されているほか、188地点や293地点で南辺が把握され、277地点西壁際でも西辺とみられる落ち込みが確認されている。今回、335地点において、現地表下30cmの深さにおいて東西方向にはしる大規模な溝を検出した(図版10-2)。深さの確認には至っていないが、上面で幅4m強をはかる規模や、内部に黄色砂がブロック状に厚く埋積している様子は、75・89地点で確認された状況によく一致していることから、藩邸南辺の堀と判断した。遺物は少量しか得ていない(IV8・IV9)。「吉田御屋敷惣図」(名古屋市蓬左文庫蔵)では、南側中央付近には門と入り口があり、堀が途切れるように表現されているが、今回の調査範囲でそうした陸橋部は確認されなかった。なおこのほか、本部構内西縁の326地点の立合でも西辺の堀の確認が予想されたが、調査範囲内では検出されなかった。さらに西側に位置していたため、東大路通り拡幅により削平されてしまっている可能性が高い。

中央屋敷 「吉田御屋敷惣図」には、藩邸内の南半に政務や饗応の御殿空間とみられる屋敷風の建物や池泉が描かれている。これらに関する遺構については、296地点の調査において、近傍での瓦葺き建物の存在を知らしめる瓦溜まりや、池のものとみられる白色粗砂のひろがりが見ついている。今回296地点の北側一帯でひろく立合を実施し、329e・336a・336b地点で近世遺物を大量に包含する白色粗砂を多量にまじえた灰褐色土層を確認した(図版10-4)。藩邸廃絶後に、地泉やそれにつながる流路に廃棄された遺物群と想定する(IV10~IV49)。これまで本部構内で出土してきた藩邸関連の遺物は、陶器類に偏りがあり、染付磁器は少なかったが、今回は一定量が出土している。また、296地点出土品と同一個体となる可能性もある西洋陶器片も得ている(IV45)。この一帯が饗応空間として重要な位置にあったことがあらためて裏付けられたものといえよう。

(2) 中世・近世白川道に関連する調査成果

京の荒神口から近江坂本を結ぶ中世・近世の白川道は、本部構内を南西-北東方向に通る、これまでも各所で路面が確認されてきた。今回近世については、329f・331地点で路

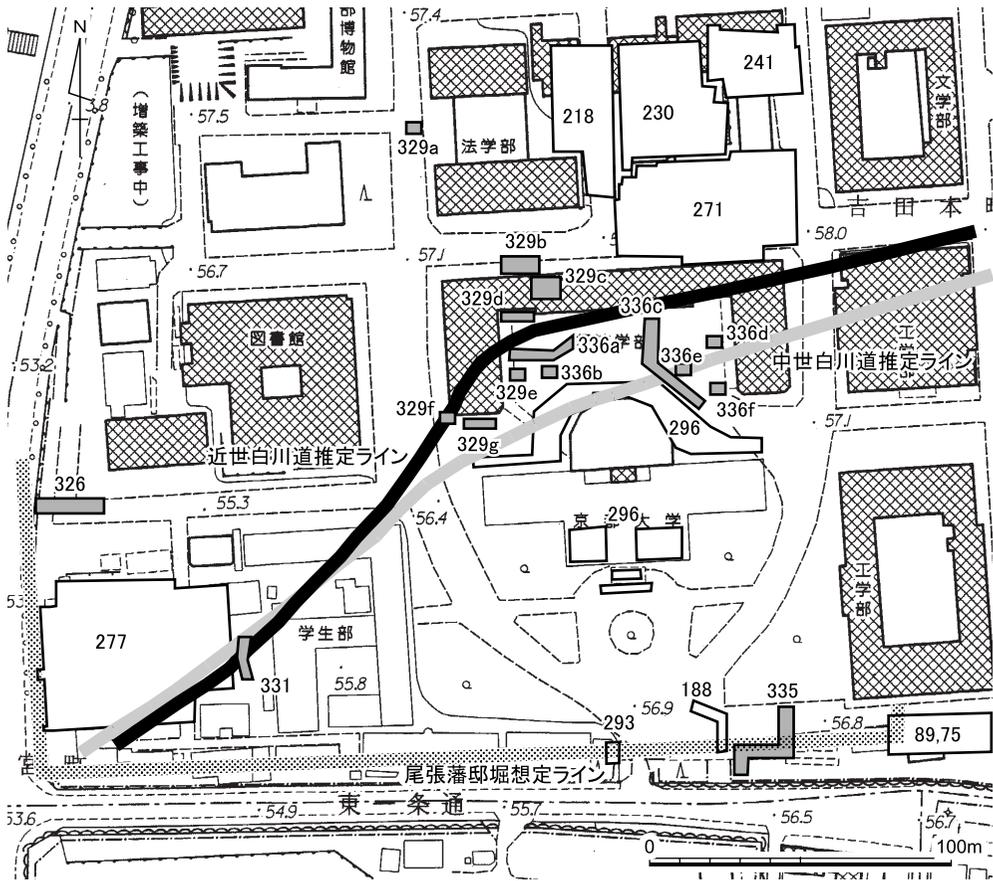


図27 本部構内の関連調査地点（梨地の地区が本年報関連の立合調査地点） 縮尺1/2500

面が確認された。中世については、336 d・e 地点で硬化面を確認した。296地点の調査では中世白川道のみが確認されており、近世白川道がどの程度北に離れてはしているかが課題となるところであったが、336 a 地点や329 c・d 地点などで路面が確認されなかったことも考慮して、(図27) に示すようなルートが描き得るようになった。

(3) その他の調査成果

先史時代の地形 弥生前期末の土石流堆積層である黄砂は、本部構内西半を中心に厚い堆積が確認されてきた。今回も326・329 b 地点などで、その直下の弥生前期以前遺物の包含層とみられる黒褐色土層とともに良好に確認された(図版11-2・4)。黄砂は、326 地点では厚さ1 m以上をはかり、下層黒褐色土層はほぼ水平堆積であった。329 b 地点では、現地表下約1 mの標高56.1m付近に黄砂の上面があり、下層黒褐色土層は標高55.3～

本部構内の立合調査

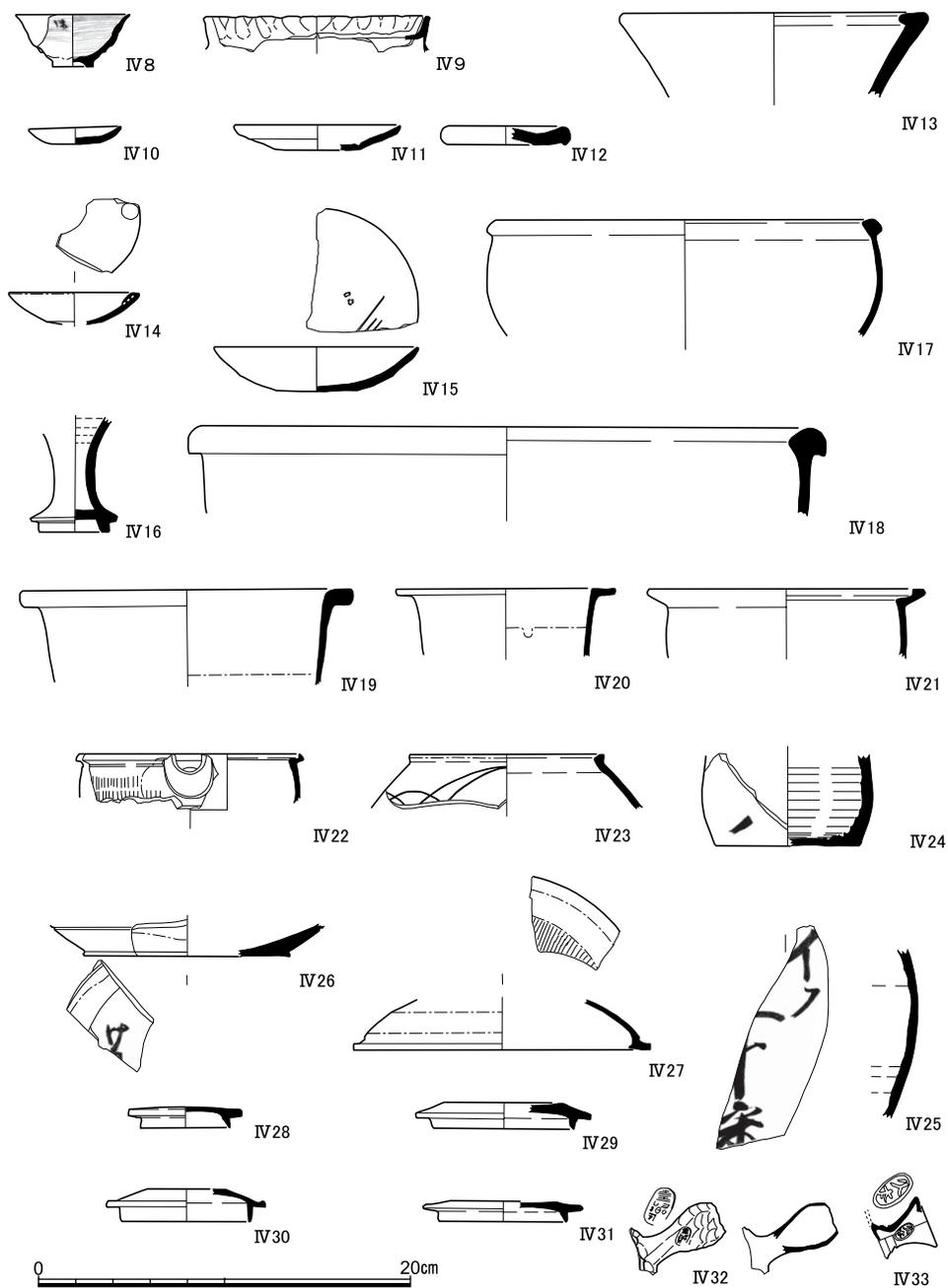


図28 335地点尾張藩邸堀埋土出土遺物 (IV 8・IV 9 陶器), 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土(1) (IV10~IV13土師器, IV14~IV33陶器)

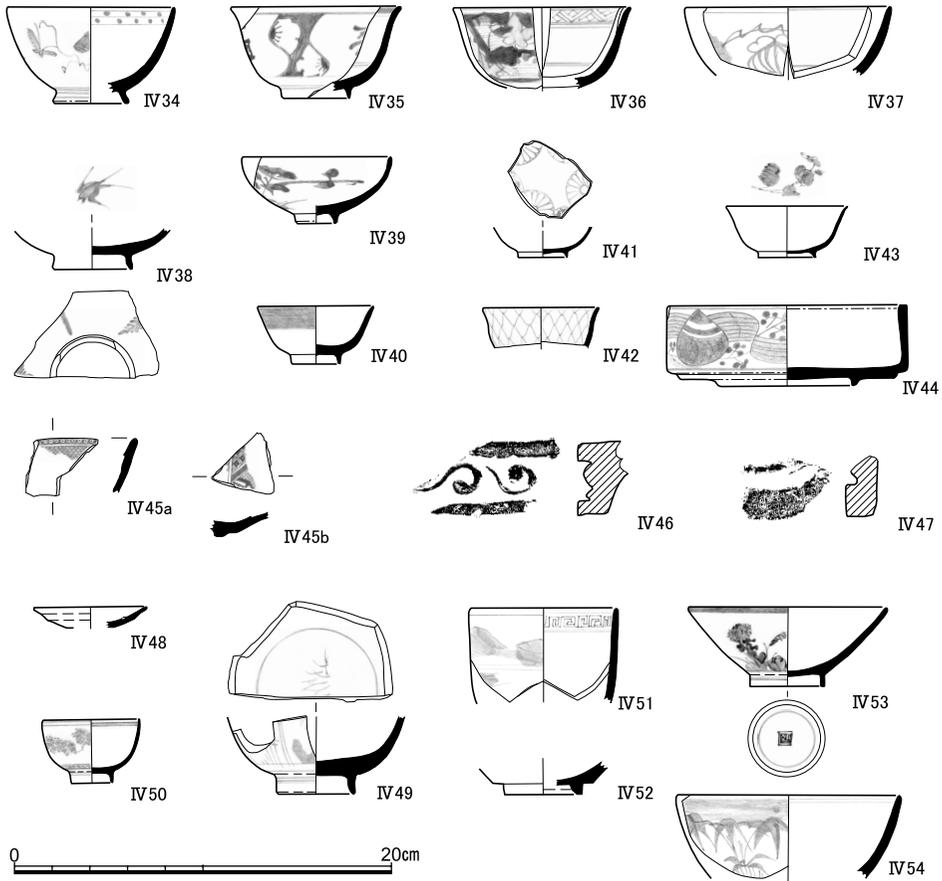


図29 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土出土遺物(2) (IV34～IV3744, IV45 a・b 西洋陶器, IV46・IV47 軒平瓦), 329 e 地点白色粗砂層出土遺物 (IV48 陶器, IV49 磁器), 329 f 地点白色粗砂層出土遺物 (IV50～IV53 磁器), 329 f 地点路面層出土遺物 (IV54 磁器)

55.6mと西へと下る斜面地形をなしていた。よって黄砂は西へむかい厚くなる。黒褐色土層からは縄文後期～晩期とみられる無文の粗製土器片が少量出土した。北側の218地点において、黄砂で埋積した西側へ急激に下る斜面地形が検出され、縄文後期中葉の遺物が出土している。今回の成果と関連づけられるであろう。

近代煉瓦積み水路の確認 329 a 地点において煉瓦積の水路が見つかった (図版11-6)。南北方向にはしりながら、この地点で西へ屈曲するようであり、現在も共同溝として利用されている。旧制第三高等学校や京都帝国大学時代の水路である可能性があり、今後機会を得て検証を続けていく必要がある。(伊藤淳史)

4 京都大学北部構内B D30・33区の立合調査

2003年度から継続していた北部構内の配管工事ともなう立合調査(図30-311地点)と、2005年度から始まった農学部総合館耐震補強工事ともなう総合館の立合調査(同330地点)では、弥生時代前期末の土石流堆積(「黄色砂」)およびその直前の旧地形などに関して、重要な成果が得られた(図30・31)。

311地点の調査 農生命総合研究棟の新営に附帯する配管工事ともない、2004年4～5月にかけて、農学部東門から北に延びる道路の東辺で立合調査をおこなった。東門から北部構内に入っておよそ15～20mの地点(図30-イ地点)では、南北方向に近接して並ぶ2基の野壺を検出した。構内座標でX=2050辺りである。上面は現代の地層に削平されているが、近世の遺物包含層である灰褐色土の堆積中ないし堆積後に構築されている。遺物は回収できなかったが、漆喰製であることから、江戸時代後期以降に築かれたと判断する。16世紀以降に敷設され京都大学が北部構内を買収した大正年間にも存在していた、221地点の西辺で検出された南北方向の道路は[千葉1998]、この延長線上に位置していることから、イ地点の東側に道路が存在すると思われる。

X=2130辺りと思われる基礎物理学研究所の西南部では(図30・31-ウ地点)、中世の



図30 調査地点の位置 縮尺1/4000

京都大学構内における分布調査・立合調査

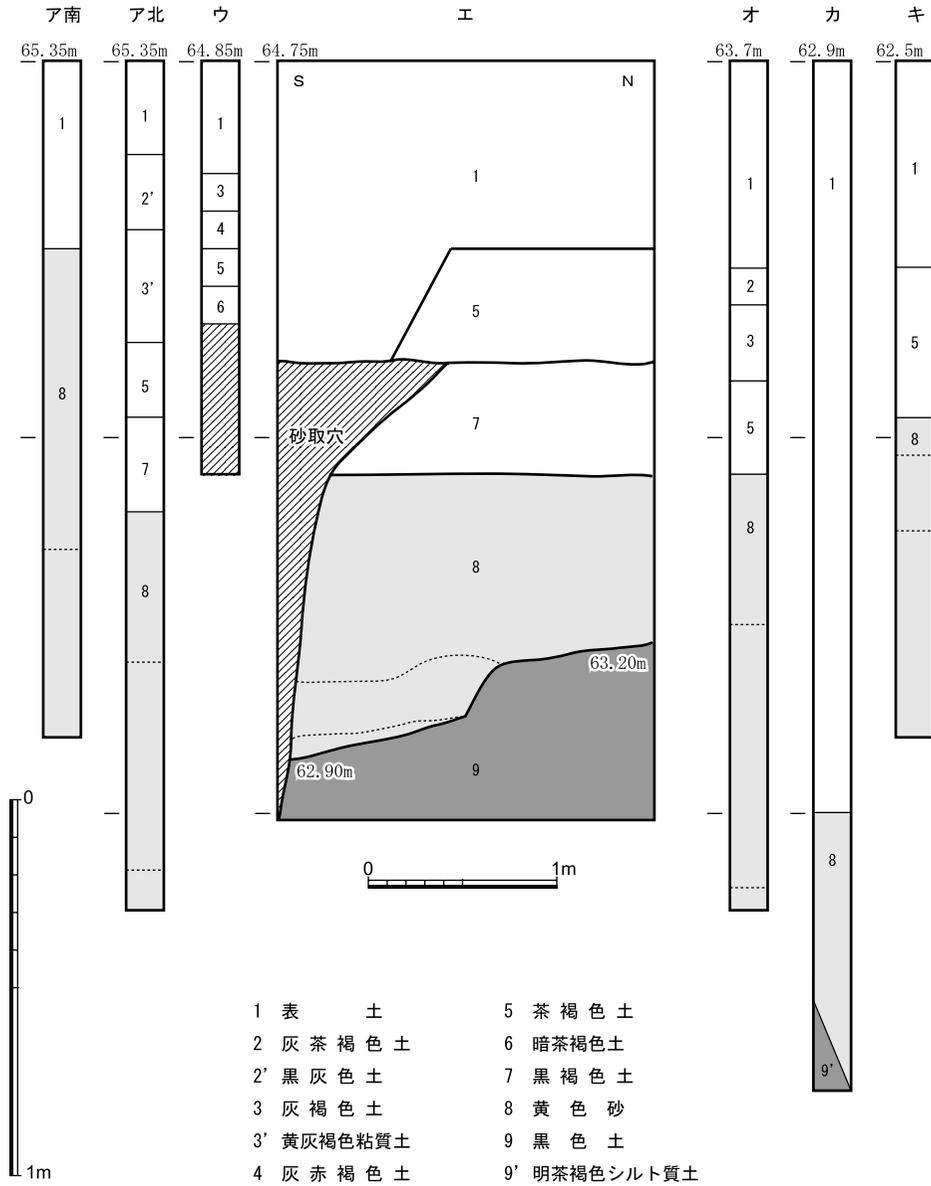


図31 各地点の層位模式図 縮尺：垂直方向1/20, 水平方向1/40

遺物包含層である茶褐色土の下位で、しまりのない暗茶褐色土が上部に堆積してその下位には砂層や黒褐色土が筋状に堆積する状況が確認できた。砂取り穴の埋土と判断する。基礎物理研究所の正面でも、茶褐色土の下位にしまりのない黒褐色土の堆積を確認でき、これも砂取り穴埋土の可能性がある。ウ地点の約50m北北西に位置する221地点でも、調査区西辺で中世前半期の砂取り穴が検出されているので〔千葉1998〕、それと一連のものと考えたい。

弥生時代前期末の土石流堆積物である黄色砂は、農学部東門から北部構内に入っておよそ5mの地点から、北に5mほどまでの間、構内座標でX=2040前後では(図30-ア地点)、現地表下120cmまでにその上面を確認できる。また、農学部総合館西北の建物入り口あたり、構内座標でX=2150前後まで北上した地点でも(同エ地点)、現地表下約120cmの深さで確認できる。この両地点の間は、基本的に、現地表下100cmでは黒褐色土ないしは茶褐色土が認められ、黄色砂の分布を確認できない。東門から北5mあたりでは(図31-ア南)、現地表下50cmで表土の直下に黄色砂が認められ、残存厚だけでも130cm以上ある。下半の方が粒径がいくぶん大きい。掘削最深部でも粒径5mm大の礫も多数含まれているので、弥生時代旧地表面は、おそらくこれよりも30cm以上は下位に位置していただろう。東門から北10mのあたりでも(図31-ア北)、標高64.1mほどで黒褐色土から漸次的に移行していく黄色砂が、同様に、その100cm下位の掘削最深部でも5mm大の礫を多数含んでいた。断面を細かく観察すると、単純に上方粗粒化するわけではなく、下半は最深部よりは細粒化しており、それから上方粗粒化して上半ではもっとも粒度が大きくなっている。

農学部総合館西北の建物入り口あたりのX=2140付近では(図30・31-エ地点)、黄色砂に覆われた南へ傾斜する弥生前期の旧地表面を確認できた。南北2m余りの長さにわたってその旧地形の残存を確認でき、北側で標高63.2m、南側では62.9mを測る。この傾斜は16地点東壁で確認されていた南落ち地形〔泉ほか1977〕に対応するのだろう。南落ちの傾斜がきつくなるまでは、粒径の大きい黄色砂が旧地表直上を覆う。傾斜がきつくなってからは、旧地表の直上には、黄白色シルトが南に進むにつれて徐々に厚みを増しながらも薄く堆積し、その上位にはやや白みがかって粒径の小さい黄色細砂が堆積している。エ地点の北側は2m北までは黄色砂の堆積を確認できたが、4m北では、100cmの掘削深度では黄色砂を確認できなかった。

330地点の調査 農学総合館西半の南辺、構内座標でX=2070・Y=2540辺りに(図30・31-カ地点)、弥生時代前期末の旧地表面を確認した。旧地表は、土壌化があまり進んでい

ない明茶褐色のシルト質土で、標高60.4mほどで緩やかに西へ傾斜している。直上を黄色色のシルトないし微砂に覆われている。掘削域では、旧地表の残存は南壁付近に限られるが、それでも、南壁中央から西北西に向かって、この旧地表の南側が黄色砂に削り去られている状況が確認できた。30m西南西に位置する109地点および320地点では、これに対応すると思われる、旧地表の北側が抉られている状況を確認しているので、〔浜崎1983, 千葉2009 (=本年報第2章)], 土石流の「本流」は、カ地点とこの2地点との間を西流していったことがわかる。この辺りで幅約20mということになる。

明茶褐色シルト質土が本来堆積していたであろう辺りの深さまで堆積している黄色砂は、壁面観察によれば、粒径が3mm程度までの風化花崗岩粒から成るが、上流の旧地表を抉ったことを物語る、明茶褐色シルト質土のブロックも散見できた。黄色砂は、上部を現代の地中構築物によって削平されており、旧地表よりも50cmほど上方までしか残存していないが、上方粗粒化していることは確認できる。すなわち、旧地表より数十cm上位では、粒径が5mmを超える粗砂が主体的で、その中には50~200mm大のチャートや花崗岩の礫が多数認められ、角礫も目立っていた。

黄色砂の厚い堆積は、カ地点の上流に相当する東方でも(図30・31-オ地点)、下流に位置する西方でも(同キ地点)、それぞれ確認することができた。上流のオ地点では、確認できた115cmの堆積厚のうち、最下位では、100mm前後の角礫が目立ち、しかも、花崗岩だけでなくチャートなどの堆積岩も少なからず含まれている。その上位は、粒径5mm程度までの風化花崗岩粒から成る。一方、黄色砂残存部の上部40cmほどは、それ以深よりも粒径の小さい風化花崗岩粒が堆積していて、粒径が3mmを超えるようなものはほとんどなかった。従って、このオ地点では、全体的に上方細粒化の傾向がうかがえることになる。

下流のキ地点では、確認できた85cmの堆積のうち、最上部の約10cmを除く上半の粒径が最も大きく、10~100mmの花崗岩礫も含まれていた。最上部と下半の風化花崗岩粒の粒径は、比較的小さいけれども、それでも5mm程度のものは含まれている。カ地点に比較的類似した層相と言える。キ地点では、上方粗粒化した後に細粒化が認められることになる。

(富井 眞)

参 考 文 献

- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 泉 拓良ほか 1977年 「農学部遺跡B E 33の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 五十川伸矢 1991年 「中世白河の鑄造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—北部構内B A30区（追分地蔵地点）出土資料の紹介—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 伊藤淳史・梶原義実 2007年 「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 京大考古研（京都大学考古学研究会）
- 1992年 『第44とれんち』
- 1994年 『第45とれんち』
- 1995年 『第46とれんち』
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
- 1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
- 1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G36区—』
- 1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』

参 考 文 献

- 1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
- 1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
- 2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
- 2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
- 2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
- 2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京都市文化市民局 2007年 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』
- 京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）
- 1991年 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦
- 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 清水芳裕 1991年 「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』角川書店
- 千葉 豊 1998年 「京都大学北部構内B F34区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 2003年 「京都大学本部構内A X22区の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 2008年 「土石流は初期農耕の地をどう通り過ぎたか—京都市北白川追分町遺跡の白川弥生土石流の堆積物調査—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
- 1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 浜崎一志 1983年 「京都大学北部構内B D30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』 第1部日本先史時代
- 吉江 崇 2006年 「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』

京都大学構内遺跡調査要項 2004～2006年度

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1) センター長
- (2) センターの研究部の主任
- (3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
- (4) 事務局長及び施設部長
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長

鎌田 元一（文学研究科教授）（～2005.3.31）
上原 真人（文学研究科教授）（2005.4.1～）

清水 芳裕（文学研究科助教授）
金谷 史明（事務局施設・環境部長）（～2005.3.31）
齋藤 福栄（事務局施設・環境部長）（2005.4.1～）

運営協議会委員

金田 章裕（文学研究科教授）
上原 真人（文学研究科教授）（～2005.3.31）
鎌田 元一（文学研究科教授）（2005.4.1～）
瀬戸口烈司（理学研究科教授）（～2006.3.31）
増田富士雄（理学研究科教授）（～2006.3.31）
竹村 恵二（理学研究科教授）（2006.12.1～）
高橋 康夫（工学研究科教授）
小崎 隆（地球環境学堂・学舎教授）
伊東 隆夫（生存圏研究所教授）（～2006.3.31）
山中 一郎（総合博物館教授）
大野 照文（総合博物館教授）（2006.12.1～）

研究部主任

清水 芳裕（文学研究科助教授）
同 研究員
千葉 豊（文学研究科助手）
伊藤 淳史（文学研究科助手）
富井 眞（文学研究科助手）
吉江 崇（文学研究科助手）
磯谷 敦子（施設部教務補佐員）
北尾 敬子（施設部教務補佐員）
柴垣理恵子（施設部教務補佐員）
事 務 室
松本 一代（施設部事務補佐員）

京都大学構内遺跡調査要項

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		島田真彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
1972	大阪府満		小野山節都 出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78 b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74 b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74 a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 B E 33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院 A E 15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81 a	
1976	植物園 B D 35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原
1976	病院 A H 17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78 a	
1976	教養部 A S 23区	35	吉野治雄	試掘	10		縄文土器, 須恵器	調77	
1976	北 B J 33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	調77	
1976	和歌山県 瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器, 人骨	埋78 a	
1977	病院 A F 14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
1977	医学部 A O 18区	41	泉拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1977	北 電 気 管	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 A Q23区 A N23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿比定地 A A18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 B E29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 B G32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 B G31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 A W28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 A Y22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 A N19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 B H37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 A M24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 A Z30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 A P19区	74	清水 芳裕 五十川 伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 A T27区	75	五十川 伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅穴住居, 中世土壙墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡を現地保存
1979	北 部 B D32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 A T27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 A X28区	90	泉 拓良 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京 都 府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 A O21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 A M22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 B D30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器,硬 玉管玉,弥生 土器,製塩土 器	埋84	
1981	本 部 A X28区	110	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	34	中世土器溜	土師器,瓦,陶 磁器,硯	埋83	
1981	教養部 A P22区	111		事前発掘	1716	古墳,古代 梵鐘造遺 構,中世門, 溝,墓	縄文土器,弥 生土器,須恵 器,土師器,鑄 型,溶解炉	埋84	梵鐘造遺 構を現地保 存
1981	京 都 市 本 山			分布調査			縄文土器,緑 釉陶器,灰釉 陶器	埋83	
1982	京 都 府 中 海 道		泉 拓良	試 掘	20	中世土器溜	縄文土器,土 師器	埋84	
1982	病 院 A F15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝	白磁	埋84	
1982	農 学 部 B F33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居 跡,中世土 坑	縄文土器,土 師器	埋84	
1982	和歌山県瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器,弥 生土器,製塩 土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
1982	本 部 A T29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠,建 物	土師器,瓦器, 陶磁器	埋86	
1982	農 学 部 B E33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田,溝	土師器,瓦器, 陶磁器	埋86	
1983	医 学 部 A N20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器,瓦器, 土師器	埋86	
1983	北 部 B F31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没 林,古代・中 世溝	縄文土器,土 師器,緑釉陶 器	埋87,富井98	
1983	医 学 部 A M19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立 合		中世土取り 穴	土師器,瓦器, 石鍋	埋86	
1984	病 院 A F19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池,井 戸,野壺	縄文土器,蓮 月焼	埋87	
1984	病 院 A J19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器	埋87	
1984	医 学 部 A N18区	143	五十川伸也 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘造 遺構	土師器,瓦器, 鑄型	埋88	
1985	北 部 B J31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝,建 物跡,土坑, 近世溝	弥生土器,土 師器,須恵器	埋88	
1985	病 院 A J18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器	埋89	
1985	病 院 A J19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器,鑄型	埋89	
1986	教養部 A P25区	167	清水 芳裕 宮本 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世 溝	土師器,近世 陶磁器	埋89	
1986	本 部 A X30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器,陶磁 器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 A L 20区	169	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器,陶磁 器	埋90	
1986	教養部 A L 23区	170	清水 芳裕 五十川伸 矢一志	試掘	24	中世溝	土師器,瓦器, 陶器	埋89	
1987	北 部 B D 33区	180	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	618	土坑,河川	縄文土器,土 師器,須恵器	埋90	
1987	本 部 A W 27区	181	五十川伸 矢一志	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器,土 師器,陶磁器	埋92	
1987	北 部 B H 35区	182	清水 芳裕	試掘	16	包含層	土師器,須恵 器	埋90	
1987	北 部 B D 28区	183	清水 芳裕	試掘	12	包含層	土師器,須恵 器	埋92	
1987	本 部 A T 25区	188	清水 芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 A R 19区	190	清水 芳裕 森下 章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器,瓦,陶 磁器	埋92	
1988	病院 A H 19区	191	浜崎 一志 千葉 豊 森下 章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器,瓦,陶 磁器	埋93	
1988	病院 A E 12区	192	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路, 溝,野壺,井 戸	土師器,瓦,陶 磁器	埋93	
1989	病院 A E 13区	198	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸, 野壺,柵列	土師器,陶磁 器,瓦	埋93	
1992	病院 A G 14区	200	千葉 豊 森下 章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器,陶磁 器	埋95	
1992	教養部 A R 21区	202	五十川伸 矢一志	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 A M 17区	207	五十川伸 矢一志	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器,陶磁 器	埋95	
1992	北 部 B A 28区	208	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	1242	噴砂,古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器,土 師器,陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬 戸	213	浜崎 一志 伊藤 淳史	立合		縄文包含層	縄文土器,石 器	埋95	
1992	本 部 A V 30区	214	千葉 豊 伊藤 淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴,近世野 壺	土師器,陶磁 器	埋97	
1993	北 部 B B 28区	217	清水 芳裕 古賀 秀策	事前発掘	1323	古代溝,中 世土坑	土師器,陶磁 器	埋97	
1993	本 部 A W 25区	218	千葉 豊 吉井 秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠,溝,土坑	縄文土器,石 器,土師器,陶 磁器	埋97	
1993	本 部 A U 30区	219	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝,中 世土器溜	弥生土器,土 師器,陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学 部 A O 22区	220	五十川伸 伊藤 淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構,中 世井戸,溝	縄文土器,弥 生土器,土師 器,陶磁器	埋99	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北 部 B F 34区	221	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器 溜,土坑,中 世・近世道 路	土師器,陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 A F 12区	222	伊藤 淳史	試掘	113	近世道路	土師器,陶磁器	埋97	
1994	北 部 B F 30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴,弥生方形周溝墓,平安土壙墓	縄文土器,弥生土器,土師器	埋98	
1994	本 部 A X 25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝,土器溜	土師器,陶磁器	埋99	
1995	総合人間学 A R 25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓,古代溝,土坑,中世溝	弥生土器,土師器,陶磁器,瓦	埋00	
1995	病院 A G 20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路,弥生流路,中世井戸,近世大溝	縄文土器,弥生土器,土師器,蓮月焼	埋00	
1995	病院 A F 20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池,土坑	土師器,陶磁器	埋00	
1995	本 部 A X 26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝,近世柵列	土師器,陶磁器	埋99	
1996	医学部 A N 20区	248	五十川 伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路,中世土取り穴,近世井戸	縄文土器,弥生土器,土師器,陶磁器	埋00	
1996	総合人間学 A R 24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物,土坑,溝	弥生土器,土師器,陶磁器,銭貨	埋02	
1997	総合人間学 A R 23区	254	伊藤 淳史	立 合		中世瓦溜	弥生土器,土師器,陶磁器,瓦	埋02	弥生～中世包含層
1998	総合人間学 A N 22区	261	千葉 豊 古賀 秀策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路,弥生方形周溝墓,中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器,弥生土器,土師器,陶磁器,瓦	埋05	
1998	本 部 A U 28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑,近世柱穴	土師器,陶磁器,瓦	埋02	
1998	総合人間学 A L 24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立 合			弥生土器,土師器,陶磁器	埋02	弥生～近世包含層
1999	病院 A F 20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸,土坑	縄文土器,土師器,陶磁器	埋03	
1999	医学部 A O 17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸,集石,土器溜	土師器,瓦,陶磁器	埋03	
1999	本 部 A W 26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝,中世井戸,瓦溜,近世溝		埋03	
1999	本 部 A X 22区	272	富井 眞	立 合		時期不明溝,高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北 部 B C 28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田,中世溝,近世井戸	縄文土器,弥生土器,石器,陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋壘, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴, 近世溝 石	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	発 掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2004	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		第5章	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	第2章	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	第3章	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南 A P 21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・ 溝, 中世土 坑・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 韃羽口	第4章	
2004	美 山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				第5章	
2004	本 部 A Y 28区	324	清水 芳裕	立 合				第1章	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		第1章	297地点の 古代道路と つながるか
2004	本 部 A U 21区	326	伊藤 淳史 吉江 崇	立 合				第1章	
2005	本 部 A Z 25区	327	清水 芳裕 吉江 崇	立 合				第1章	
2005	本 部 A S 21区	328	千葉 豊	立 合				第1章	
2005	本 部 A W 24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	第5章	縄文包含層
2006	北 部 B D 30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	第5章	中・近世包 含層
2005	本 部 A T 22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	第1章	中世包含層
2005	西 部 A X 21区	332	千葉 豊	立 合				第1章	
2006	北 部 B E 28区	333	富井 眞	立 合			縄文土器	第1章	中・近世包 含層
2006	病 院 A F 15区	334	千葉 豊	立 合			土師器	第1章	中世包含層
2006	本 部 A T 26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	第5章	
2006	本 部 A V 24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	第5章	
2001 ~ 2004	桂	337	千葉 豊	分立	布合	石垣	磚, 瓦	第5章	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせきちようさけんきゆうねんぼう2004～2006ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2004～2006年度							
編著者名	上原真人, 清水芳裕, 千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀							
編集機関	京都大学文化財総合研究センター							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほくぶこうない 北部構内 BC30区	きょうとふきやうとしききやうく 京都府京都市左京区 きたしらかわおいはけちやう 北白川追分町	26100	—	35° 01′ 36″	135° 47′ 10″	2004 0420 ? 2004 0528	85.5	北部食堂野外排水処理 施設新営
ほんぶこうない 本部構内 BA22区	きょうとふきやうとしききやうく 京都府京都市左京区 よしだほんまち 吉田本町	26100	—	35° 01′ 31″	135° 46′ 57″	2006 0110 ? 2006 0203	98	百万遍門歩行者通路 敷設
よしだみなみこうない 吉田南構内 AP21区	きょうとふきやうとしききやうく 京都府京都市左京区 よしだにほんまつちやう 吉田二本松町	26100	—	35° 01′ 14″	135° 46′ 53″	2006 0208 ? 2006 0215	48	屋外便所設置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北部構内 BC30区	散布地	縄文時代	自然流路		縄文土器			
	散布地	弥生時代	土石流					
	散布地	古代	柱穴	多数	土師器, 黒色土器			
	田畑	中世後期 ～江戸	小土坑					
本部構内 BA22区	散布地	縄文～ 弥生時代			縄文土器, 弥生土器, 石器		縄文晩期土器が高密度 で分布 江戸時代の絵図に符合 する段差	
	田畑	江戸時代	土坑 溝	1 5	陶磁器, 瓦			
吉田南構内 AP21区	散布地	縄文時代			縄文土器		小形方形墳の周溝検出 (吉田二本松7号墳) 平安中期の土坑から鞆 羽口出土	
	墓地	古墳時代	古墳周溝		1 須恵器			
	集落跡	奈良～ 平安時代	土坑 溝	1 2	土師器, 須恵器, 製 塩土器, 鞆羽口			
	集落跡	鎌倉時代	溝 集石	1 1	土師器, 陶磁器, 瓦 器, 銭貨			

緯度・経度は旧日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要 XIX

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析
——京都盆地東北部の白川弥生土石流の堆積物調査——

富井眞 谷口圭輔

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

—京都盆地東北部の白川弥生土石流の堆積物調査—

富井 眞 谷口圭輔*

1 はじめに

比叡山南麓の風化花崗岩地盤を集水域とする白川は(図32)、2400年前頃の弥生時代前期末〔今村・小林2007〕に大規模な土石流を発生させた。下流域に位置する京都大学構内遺跡に認められたその砂質土石流堆積物について、3地点で堆積物の粒度組成変化を検討した。その結果、1m程度の厚い堆積が残存しているところでは、上方粗粒化のまとまりとして堆積物を上部と下部の二つに分け得ることがわかった。このことは、この土石流が少なくとも2波から成る、という層相に基づく肉眼観察の解釈〔富井2008〕と整合的である。

本文は、第3章第2節を谷口が、その他を富井が執筆し、富井が編集した。

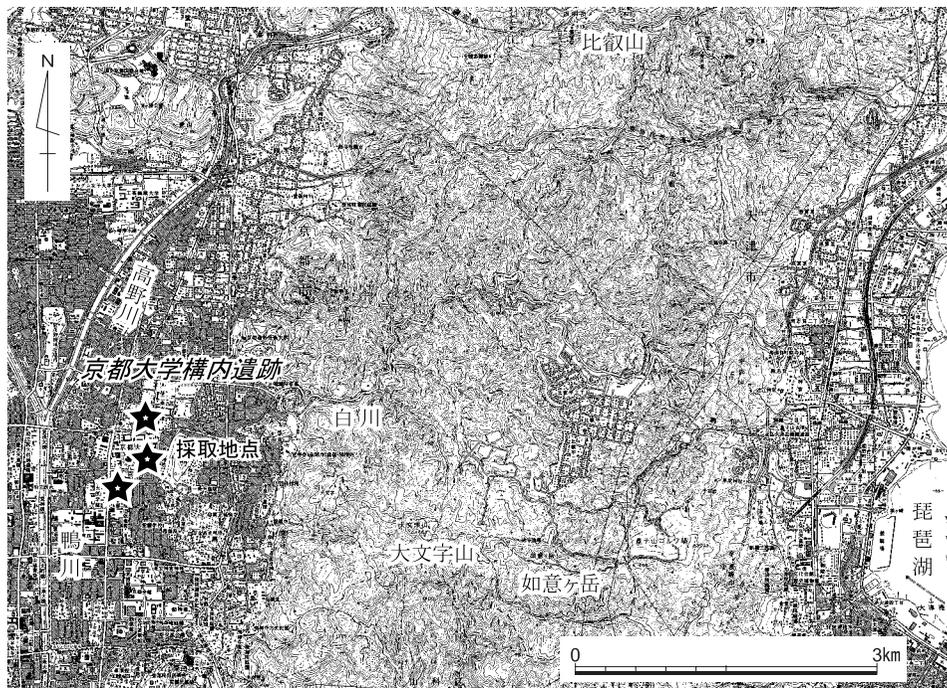


図32 採取地点の位置と白川 縮尺1/7万5千

*大阪大学大学院理学研究科

2 白川弥生土石流の概略

白川の下流域には、弥生時代前期末（2400年前頃）の旧地表面を覆った厚い土石流堆積物が各地に認められる。推定土砂量が70万 m^3 ほどに達する大規模な土石流であり、堆積した砂の厚みが2 mを超える地点もあれば、砂の中に2 mを超える巨礫が置き残された地点もある〔富井2005〕。この土石流堆積物は、風化花崗岩粒から成り、一帯の先史時代の考古学的発掘調査では、「黄砂」ないし「黄色砂」と呼ばれて鍵層として認識されている。

せいぜい数十年が一単位となるような考古学的な時間尺度では、この土石流は、瞬時の自然現象と考えられる。ポンペイのように、過去のある一瞬の状態をこの土石流がパッキングしている、という想定もできよう。その一方で、この土石流の直下では水田を検出しているので、先史土砂災害という観点からより細かな時間尺度で考える、すなわち当事者的な観点でこの土石流がどのように白川下流域を襲ったのかを考察することも、有意義である。事実、どの地点でもおよそ同様に黄褐色の砂が堆積しているものの、最下部の粘土ないしシルトから上方にむかって粗粒化していく地点もあれば〔泉1978, 伊藤1995〕、あるいは上方で細粒化している地点〔浜崎1983, 富井ほか2007〕もあり、各地点でまったく同じ堆積相を呈するというわけではない。土石流の流下していく様態を検討するには、堆積物の詳細な観察を高密度でおこなうことが不可欠なのである。

白川弥生土石流の堆積物については、京都大学構内遺跡の一連の発掘調査において、しばしば粒度分析が試みられてきた。しかし、試料採取地点は北部構内に限られており、しかも、黄色砂全体を一括りにしていたり〔竹村ほか1985〕、あるいは、「本流」と推定されている、北部構内でも限られたエリアにとどまっていたりする〔増田ほか2005, 秋山ほか2006〕。そこで、この土石流の様態を広域的に解明するべく、京都大学構内遺跡で、既往の発掘調査などの成果から、黄色砂の厚い堆積の残存が期待される3地点4箇所、堆積物の粒度分析をおこなった。

3 粒度分析

(1) 試料採取の方法と採取地点

土石流堆積物の試料採取地点は、北部構内（図33-K S地点）、本部構内（同T地点）、吉田南構内（同L地点）である。試料の採取は基本的には1 cm刻みだが、堆積物の粒径に応じて採取単位を変えてもいる。すなわち、含有している礫が大きい場合には、1 cm刻み

粒度分析

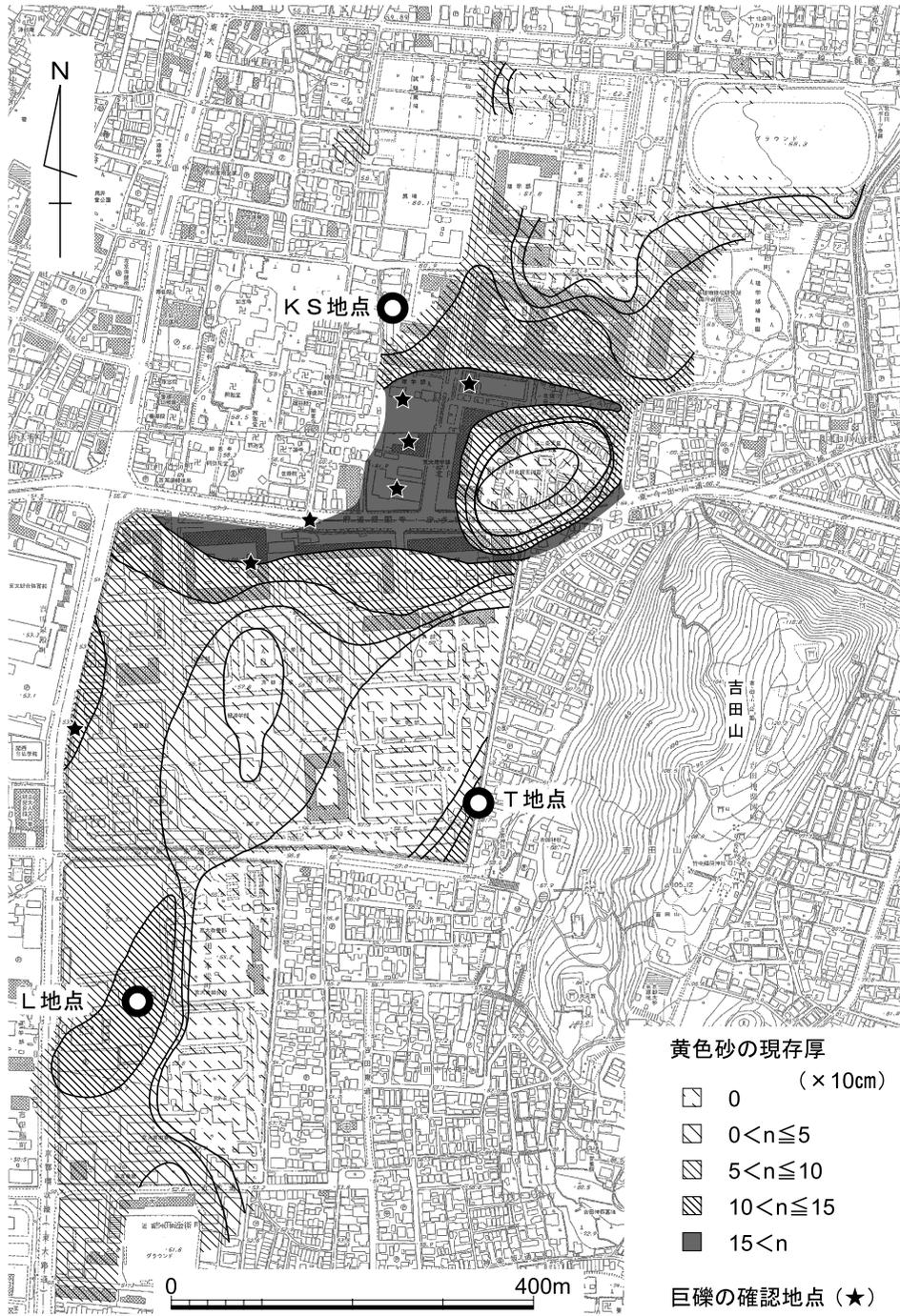


図33 採取地点と黄色砂の堆積 (〔富井2005〕より)

縮尺1/8000

では十分な分析量を確保できないので2 cmを1単位として採取し、その逆に、堆積物がシルトなど粒径が非常に小さい場合には、さらに細かく採取しても十分な分析量を確保できるので0.5cmを1単位として、微細な変化の抽出を試みるべく採取している。

KS地点は、2007年に、土石流の「本流」とも言うべき巨礫の分布の北限を探るために発掘調査した地点である〔富井2008〕。微細な粒度組成変化に「本流」とその縁辺との流態の違いが反映されるか確認するため、西流した本流の北限として認識した巨礫圧痕をまたぐように、調査トレンチ西壁の南端と北辺の2箇所を試料採取した(図34・35)。巨礫圧痕よりも北の試料をKS(N)系統、その約7 m南に位置する南の試料をKS(S)系統、と呼ぶ。KS地点は、黄色砂の直下に弥生時代前期末の旧地表面が認められるが、黄色砂の上部は中世の耕地開発によって削平されている。KS(N)系統は、堆積が残存している黄色砂から、肉眼観察によって土壌の混入を認めた最上部を除く、厚さ137cm分、153個を採取した。サンプル名は、最下位が「KS(N)-0」でそこから上方に向かって、「KS(N)-0.5」, 「KS(N)-1」, ,, とつづき、「KS(N)-137」までである。KS(S)系統も同様に、厚さ156cm分、193個を採取した。サンプル名は、最下位が「KS(S)-0」でそこから上方に向かって、「KS(S)-0.5」, 「KS(S)-1」, ,, とつづき、「KS(S)-156」までである。

T地点は、1993年度の発掘調査地点(図版1-219地点)で検出された枯れ谷状の窪地〔千葉ほか1997〕の延長と思われる、219地点北東隅から2 mほど東北東で、コア直径が約4 cmのボーリング調査によって試料採取した。この試料をT系統と呼ぶ(図36右)。T地点は、窪地下面の古土壌は確認できなかったが、下位の白色砂と黄色砂との間に、土壌化の未発達な8 cm厚のシルト質土をみとめた。219地点の層序から考えて、弥生時代前期末の土層と判断する。そして、それ以深からは白色砂も厚く採掘できた。そこで、T系統としては、後世の攪拌を受けた最上部を除く一方で、弥生前期末の旧地表以深にある白色砂の堆積も含めて、約240cm分、259個を採取した。サンプル名は、最下位が「T-281」でそこから上方に向かって、「T-280」, 「T-279」, ,, とつづき、「T-46」までである⁽¹⁾。黄色砂は、後述のように、T-223からT-46までの207個ということになる。

L地点は、1994年度の発掘調査地点(図版1-220地点)で検出した水田域〔伊藤1999〕の北側で、220地点北壁中央付近から10mほど北で、コア直径が約4 cmのボーリング調査によって試料採取した。この試料をL系統と呼ぶ。L地点は、220地点の発掘調査成果から、100cm以上の黄色砂の残存が期待されたが、後世の耕地開発による黄色砂の上部の削平が深くまで達していたので、残存厚は70cmほどだった(図36左)。黄色砂直下の弥生時代前期

粒 度 分 析

KS(N) 系統 (KS地点西壁北辺 : 試料採取前)



図34 KS(N)系統の状況

KS(S) 系統 (KS地点西壁南端：試料採取後)

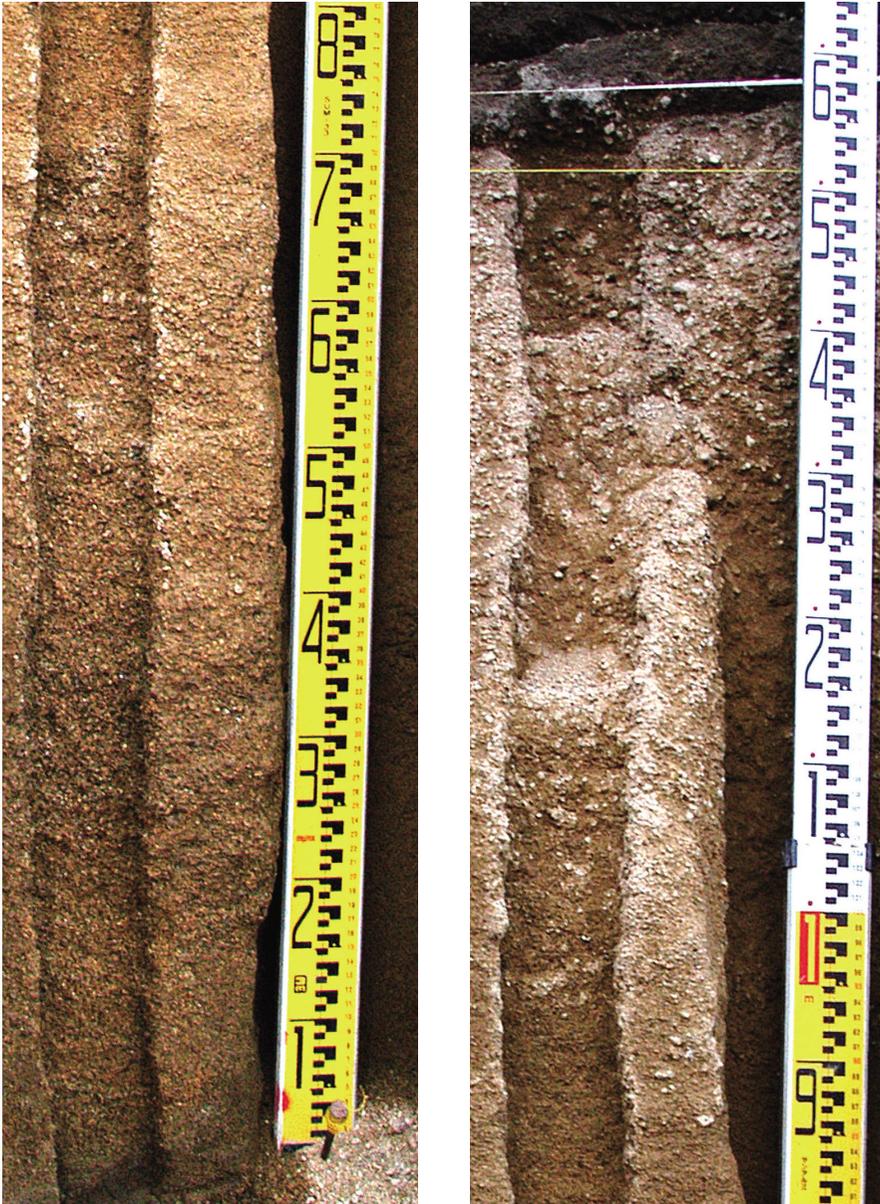


図35 KS(S)系統の状況

粒度分析

L系統



T系統

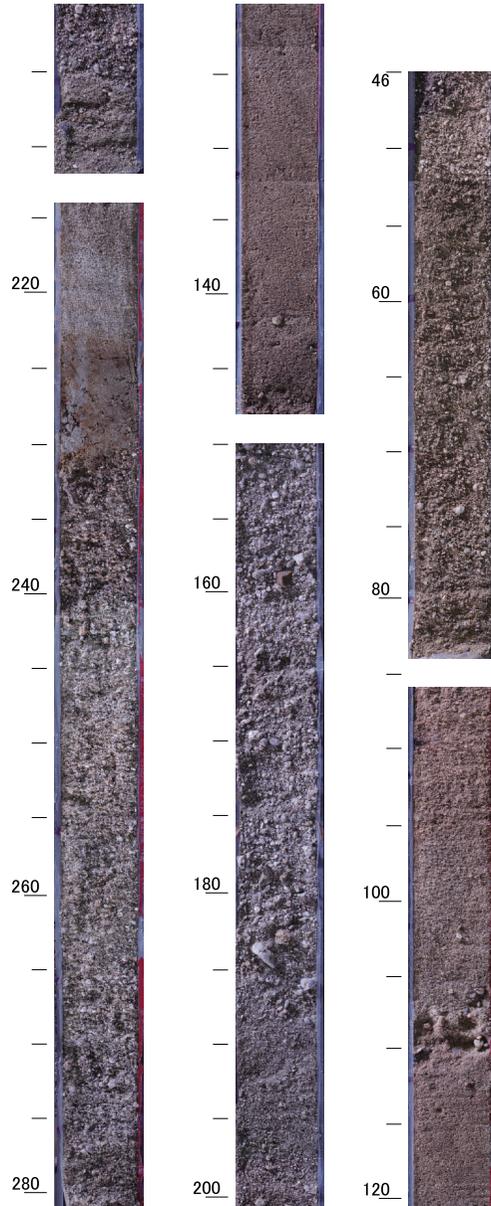


図36 T系統とL系統の状況

末の旧地表面は、明確に認められる。L系統は、堆積が残存している黄色砂から、後世の攪拌による土壌の混入を受けた最上部を除いて、厚さ69.5cm分、86個を採取した。サンプル名は、最下位が「L-125.5」でそこから上方に向かって、「L-125」、「L-124.5」、,、とつづき、「L-56」までである⁽²⁾。コア内には上位チューブの残留土が下位チューブに一部混入していたが（85～90cmあたり）、分析用試料を確保する上では問題なかった。

(2) 粒度分析の方法

沈降管天秤法による分析により、各試料の粒度分布を求めた。まず、採取された試料の乾燥状態での総重量を測定した。続いて、メッシュクロスを用いて粒径4φ以下の泥質分を除去し、再び乾燥重量を測定した。泥質除去済みの試料から、粒径分別を起こさないよう四分法を用いて2～7グラム程度を取り分け、自動沈降管天秤法粒度分析装置で粒度分布を測定した。沈降管天秤法粒度分析用アプリケーションプログラムには、「STube」〔成瀬2005〕を使用した。

含泥率は、泥質重量（総重量と泥質除去後の重量の差）を総重量で除することにより求められ、中央粒径・分級度・歪度は、測定で得られた粒度分布をもとに算出された。含泥率は試料に含まれる泥質の重量の割合を意味する。中央粒径は粒度分布の累積重量パーセント値が50%となる粒径のことで、ファイ（φ）スケールで表されるため粒径が小さいほど値が大きい⁽³⁾。分級度は粒度分布の幅を意味する量で、値が小さいほど粒度分布の中央粒径からのばらつきが少ない。歪度は、粒度分布の非対称性を表す量で、粒度分布曲線が粗粒側に傾く形状を取る際には正の値を、細粒側に傾く場合には負の値をとる。

また、各系統においては、各試料の粒度分布を基に全試料の重量の総和を求めてそれが全体で100%になるようにして、全体の粒度分布も作成した。そして、各試料において、全体の粒度分布と比較してどの粒径がどれだけ取り込まれているかを捉えるために、各試料の粒度分布を全体の粒度分布で割った値（正規化値）をプロットして正規化曲線も作成した。この正規化曲線によって、どの粒径が取り込まれやすいかわかる。すなわち、正規化値が1より大きい値をとる粒径は、全体に対してその粒径がより取り込まれやすく、1より小さい値をとるものは、その反対に全体に対してそれが欠乏していることを示すことになる〔増田ほか2005〕。

粒度の分析および測定作業は、K S地点については谷口が、T・L地点については秋山美奈子氏が、それぞれおこなった。以下に各地点の各試料の分析結果を図37～40に示し、含泥率・歪度・分級度・中央粒径について各系統の垂直変動を図41～44にまとめた。

粒 度 分 析

(3) 粒度分析の結果

砂質土石流堆積物である黄色砂の全体的な傾向としては、中央粒径が上方粗粒化の傾向を示して、含泥率は減少し、歪度は正の値を増して分布曲線が粗粒側に傾いていき、分級度は値が上昇して淘汰が悪くなる。

KS(N)系統 (図37・41) 堆積層観察では、72～88cmに細粒部を確認できる (図34)。全体の粒度分布では、中央粒径は 0.9ϕ になり、累積曲線は 0.8ϕ 、 2.5ϕ あたりに変曲点をもつ。粒度組成の垂直変化を見てみると、0～8.5cm、9～57cm、58～82cm、そして83cm以上と、四つのユニットに分離することができる。

第1ユニットは、中央粒径が2～3 ϕ の細粒砂相当域で上方細粒化する。2 ϕ より小さい粒径の正規化値が1以上であり、細粒砂や微粒砂などが取り込まれやすかったことがわかる。含泥率は一度減少した後に再び上昇する。歪度は含泥率の変化に応じて、正の値をとった後に負の値をとる。淘汰も、含泥率の変化を反映してはいるものの、基本的には良化傾向にある。

第2ユニットは、中央粒径・含泥率・歪度の点で第1ユニットからは急激な変化を経ているが、全体的にみれば、中央粒径が0～1 ϕ の粗粒砂相当域で徐々に上方粗粒化し、含泥率も5%を下回るようになる。正規化値が1以上になる粒径が、2 ϕ よりも大きい方へと徐々に変化していく。歪度は正の値をとり、淘汰はわずかずつ悪くなっていく。

第3ユニットは、中央粒径が0～2 ϕ の中粒砂～粗粒砂相当域で上方細粒化していき、分級度もそれに伴って良化していく。最も細粒化が進んだところでは、1 ϕ より大きい粒径である粗粒砂や極粗粒砂の正規化値が1以下になる。しかし、含泥率と歪度はそれぞれ、5%以下、+1前後、という状態を維持してほとんど変化しない。

第4ユニットは、中央粒径が中粒砂相当域の状況から漸次的に上方粗粒化していくが、第2ユニットと異なって、上部は極粗粒砂相当域にまで達する。含泥率は、ユニット上部でも、値の振幅が激しいものの5%以内にほぼ収まるままで、必ずしも減少するわけではない。歪度は+1前後で、淘汰は悪い。正規化曲線の形状に端的に表れているように、第2ユニットで取り込まれる大きい粒径よりもさらに大きい粒径までもが取り込まれるようになったことがわかる。

KS(S)系統 (図38・42) 堆積層観察では、70～90cmに細粒部を確認できる (図35)。全体の粒度分布では、中央粒径は 0.3ϕ になり、累積曲線は -1.3ϕ 、 0.9ϕ 、 2.2ϕ あたりに変曲点をもつ。粒度組成の垂直変化を見てみると、0～58cm、59～95.0cm、そして95.5cm以

上と、KS(N)系統の第2～4ユニットに対応するかのように三つのユニットに分離することができる。

第1ユニットは、KS(N)系統第2ユニットと同様に、当初は、中央粒径・含泥率・歪度の点で急激な変化を経ているが、中央粒径が $-0.5 \sim 1 \phi$ の領域で上方粗粒化し、含泥率も5%を下回るようになる。歪度は正の値をとり、淘汰はわずかずつ悪くなっていく。ユニット内での全体的傾向としては上方粗粒化ではあるけれども、その過程では、1.5～6.0cm (グループI)、8.5～27cm (グループII)、30～37cm (グループIII)、50～58cm (グループIV)、という4単位の上方向粗粒化のまとまりを抽出することができる。これらのグループ群が存在する点と、中央粒径が 0ϕ より大きくなる点がある点は、KS(N)系統第2ユニットとは異なる。含泥率も低めである。また、中央粒径が 1ϕ よりも大きい粒径になるグループIIより上位では、正規化曲線で 0ϕ より小さい粒径の曲線がKS(N)系統第2ユニットよりも滑らかで、取り込まれる粒径のばらつきが少なかったと言える。

第2ユニットは、中央粒径が $-0.5 \sim 1.5 \phi$ の領域で上方細粒化し、正規化値が1以上になるものが 0ϕ より粒径の小さいものだけになるまで細粒化する。含泥率は幾分上昇するが5%以下にとどまる。分級度は1を下回って淘汰がよい状態が第2ユニット内で持続される。歪度は、+1前後から徐々に0へ向かっていき、比較的大きな変化を見せる。ユニット内での全体的傾向としては上方細粒化ではあるけれども、その過程では、61～70cm (グループV)、73～83.5cm (グループVI)、90～95cm (グループVII)という3単位の上方向細粒化のまとまりを抽出できる。これらのグループ群の存在は、KS(N)系統第3ユニットと異なる点である。また、この第2ユニットでは、KS(N)系統の第3ユニットで多く取り込まれた小粒径のものよりもいくぶん大きい粒径のものまで、ある程度のサイズの広がりをもった粒径が取り込まれている。この点も、KS(N)系統第3ユニットと異なる。

第3ユニットは、中央粒径が $-0.5 \sim 1 \phi$ の領域で漸次的に上方粗粒化していくが、第1ユニットよりも、中央粒径が大きい。第1ユニットと同じように、上方粗粒化のまとまりが数単位あるのかもしれないが、明確には指摘できない。含泥率や分級度は、第1ユニットよりも振幅の幅が大きい。第3ユニットのなかでとくに大きな変化はない。歪度は+1前後で、淘汰は悪い。第1ユニットで取り込まれる大きい粒径よりもさらに大きい粒径までもが取り込まれていることが、正規化曲線の形状からうかがえる。KS(N)系統第4ユニットと異なる点は、中央粒径がしばしば 0ϕ より粒径が小さくなる点がある点、および、それと相関的であるが含泥率が高めな点である。

粒度分析

T系統 (図39・43) ボーリングコアの堆積相観察によって、224cmあたりを境にして、上部の黄色砂と、下部の旧地表面およびそれ以下の堆積物とに分けることができる (図36)。粒度組成の垂直変化をみてみても、最下部から226cmまでの下位と、その上位との二つに分離することができる。また上位でも、225~160cmの上方粗粒化のユニット、159~147cmの上方細粒化のユニット、146~71cmの上方粗粒化のユニット、そして70cmから最上部までの上方細粒化ユニット、以上の4つのユニットに分離できよう。これらを下位から順に、黄色砂以前の第1ユニットと、黄色砂を構成する第2~5ユニットと呼ぶ。

第1ユニットは、堆積相の観察から、旧地表と思われるグループII (231~226cm) とそれ以下のグループI (最下部から232cmまで) とに分けることができる。グループIは、京都大学構内遺跡の黄色砂よりは砂粒間の隙間が大きく、土石流よりは砂粒の密度が低いように思われる。粒度分析によれば、中央粒径はおよそ $0 \sim 1 \phi$ の間で振幅し、含泥率が低くて淘汰も比較的悪く、粒度分布ではピークを認めがたいことも多い。歪度は正の値をとる。グループIIは、細粒堆積物でありながらラミナを認められず、土壌化も進んでやや褐色がかっている。含泥率が20~80%と高率になるがその割りに淘汰が悪く、粗粒砂までも含む。

第2~5ユニットは、219地点との層序対比から、黄色砂相当と判断できる。したがって、ほかの3つの系統との比較のために、全体の粒度分布の算出に際して第1ユニットを除外している点は、注意されたい。そこで算出した土石流全体の粒度分布では、中央粒径は 1.7ϕ になり、累積曲線は -1.3ϕ 、 2.9ϕ あたりに変曲点をもつ。

第2ユニットの色調は、「黄色砂」と呼べるような黄色みがかった観はまったくなく、淡灰白色を呈する。また、堆積岩粒も散見できる。第2ユニットは、当初は、中央粒径・含泥率・歪度の点で急激な変化を経ているが、中央粒径が $-0.5 \sim 2.5 \phi$ の領域で段階的に上方粗粒化する。含泥率は基本的に5%を下回るが上方粗粒化の間隙では5%を超えることもある。歪度は徐々に正の値をとるように変化していき、淘汰もわずかずつ悪くなっていく。ユニット内での全体的傾向としては上方粗粒化ではあるけれども、その過程では、220~204cm (グループIII)、194~187cm (グループIV)、175~171cm (グループV)、165~161cm (グループVI)、という4単位の上方粗粒化のまとまりを抽出することができる。そしてグループIII~VIは、それぞれにおいて、中央粒径大型化・淘汰悪化・含泥率減少、という黄色砂の全体的特徴を凝縮的に有している。グループIIIを除くその上方の3つのグループにおいては、取り込まれる粒径の大きい岩屑物は粗粒ないし極粗粒で、第1ユニットのグ

ループ I よりも中央粒径はやや大きい。

第3～5ユニットは黄褐色を呈する「黄色砂」である。第3ユニット（159～147cm）は、中央粒径が $-0.5 \sim 2 \phi$ までの領域で上方細粒化し、含泥率も5%を前後まで上昇していく。ただし、ユニット上部でも、 1ϕ を超える細礫の正規化値も1を超えている。

第4ユニットは、中央粒径が $0 \sim 3.5 \phi$ までの領域で上方粗粒化するが、含泥率は基本的に5%を下回ることはない。 0ϕ より粒径の大きいものの正規化値が1を超えない粒度の小さいグループVII（146～90cm）と、その上位に堆積している粒度の大きいグループVIII（89～71cm）とに分けることができる。グループVIIは、中央粒径・歪度・分級度の点では穏やかな変化しか見せず、中央粒径は、130cm辺りまで極わずかに上方細粒化した後は、 $1 \sim 3 \phi$ の領域で穏やかに上方粗粒化する。歪度は徐々に負から正へと転じていくが、淘汰は良い状態を保ちほとんど変化しない。しかし、含泥率の変化は大きく、135cm前後までは上昇して20%を超えるピークに至ってからは減少に転じる。このグループはどの試料も含泥率が高率だが、特筆すべき点としては、105～90cmでは中央粒径が大型化していくにもかかわらず含泥率も上昇していくことである。ほかの2地点3系統でみられる黄色砂の傾向とは相容れない。

グループVIIIは、グループVIIよりも急激に中央粒径が $0 \sim 2 \phi$ の領域で上方粗粒化する。淘汰もグループVIIより悪化するが、含泥率はグループVIIの上半とあまり変わらず、5%を下回らない。上方粗粒化の背景には、正規化曲線にみられるように、 $2 \sim 4 \phi$ の粒径の欠乏傾向がある。

70cmから最上部までの第5ユニットは、中央粒径が、多少の振幅をしながらもやや細粒化していく。淘汰は、それに対応するようにやや良化していく。しかし含泥率は、基本的に5%以上ではあるものの、むしろ低下の傾向を見せる。歪度は正の値で振幅し大きな変化はない。正規化曲線よれば、この下位に位置する第4ユニットのグループVIIIと同じく、 $-1 \sim 0 \phi$ の粒径も取り込まれやすい状態を維持している。従って、このユニットは、大小様々な粒度が満遍なく取り込まれていく中で、その構成比率を変えながら上方粗粒化していくことがわかる。

L系統（図40・44） ボーリングコアの堆積相観察では、弥生時代前期末の旧地表に生痕化石は認められず、また、70cmあたりに細粒部を確認できる（図36）。全体の粒度分布では、中央粒径は 1.6ϕ になり、累積曲線は 3ϕ あたりまでは明瞭な屈曲点をもたない。粒度組成の垂直変化を見てみると、最下部～74cm、73～70cm、そして69cmから最上部、とい

考 察

う3つのユニットに分離することができる。

第1ユニットは、比較的単純に上方粗粒化して淘汰も徐々に悪化していく。ただし、旧地表から5cmほど上位の120cmあたりでは、わずかに上方細粒化する。その部分では含泥率の著しい上昇もみられ、またそれに対応して歪度も負の値へ大きく傾く。また、正規化曲線にみられるように、最下部から10cmほどは、 0ϕ やそれより粒径の大きい物も取り込まれている。

第2ユニットは、上方細粒化が認められる。ただし、含泥率にも変化はほとんどなく、むしろ、第1ユニットや直上の第3ユニット下部では認められない、 -1ϕ より粒径の大きい細礫が比較的取り込まれている。

第3ユニットは、第1ユニットと同じく上方粗粒化していくけれども、第1ユニットよりも粗粒成分が多くて含泥率が低い。また、含泥率は減少傾向にあるけれども、歪度は増加傾向をとらずに減少傾向であり、淘汰も悪化に拍車がかかっている。

4 考 察

(1) K S地点の様相

K S地点での主たる特徴は、KS(N)系統でもKS(S)系統でも、下位の上方粗粒化ユニットの上に上方細粒化ユニットが介在して、その上にまた上方粗粒化ユニットが存在することである。そして、上位の上方粗粒化ユニットの方が下位のそれよりも全体的に粒度が大きい傾向にある。KS(S)系統は、土石流に伴う巨礫の分布域内に位置するのに対して、KS(N)系統はその分布域外に位置すると想定されるとはいえ、両者の間隔はわずかに7mほどであり、このような基本的特徴を共有することは当然と言えるかもしれない。

しかしながら、両系統の間には、幾つかの相違点も認められた。ここで、あらためてそれを挙げておくと、KS(S)系統は、①最下部に上方細粒化する粒径の小さいものから成るユニットをもたない。また、KS(N)系統に比べて、②全体の粒度分布では粒径の大きいものがかなり多く含まれる。③下位の上方粗粒化ユニットの粒度が大きい。④下位の上方粗粒化ユニットの内部に複数の上方粗粒化のグループ群が存在する。⑤上方細粒化ユニットでもより大きい粒径のものまで取り込まれている。⑥上方細粒化ユニットの内部に複数の上方細粒化のグループ群が存在する。⑦上位の上方粗粒化ユニットでは粒度が小さくなることもある。⑧上位の上方粗粒化ユニットでは含泥率が高目である。

こうした相違点のうちでも少なくとも②・③・⑤は、土石流の「本流」とその縁辺とい

う性格に起因する可能性があると思われる。①についても、同様に理解できる余地がある。すなわち、石礫型土石流では、土石流本体の先端には先行泥水流があるようなので〔諏訪1991〕、砂質土石流でも同様の現象があるとすれば、西流する土石流が扇状地末端の傾斜変換点を経て営力が扇状に分散するときに、土石流の中を旧地表面に達する深さまでバウンドしていくような巨礫が分布しないKS(N)系統採取地では、土石流堆積の最下部に先行泥水流が、パックされるように遺存できたのかもしれない。ただし、この先行泥水流が上方細粒化するような性格のものなのかは、管見の限りではわからない。④・⑥のユニット内でのグループ群の存在は、上方粗粒化ユニットについては276地点でも確認されている〔増田ほか2005〕。これらの特徴が土石流の本流に特有の現象なのかは、今後の事例の集積を待って判断する必要があるだろう。

なお、②・③・⑤に対して適用した観点からすれば、⑦・⑧の特徴はむしろ土石流の流れの強い部分が、KS(S)系統採取地から7m北のKS(N)採取地へと移動したという理解も可能となろう。この点は、この地点では土石流が2波あったとする肉眼観察に基づく解釈〔富井2008〕を支持するものである。

(2) T地点の様相

第1ユニットでは、下部を構成するグループIは、コアではラミナを確認できなかったので、水が流れた状態そのままを維持しているとは言い切れないが、堆積相の観察からも粒度分析からも、自然流路の堆積物と考えたい。上部のグループIIについては、堆積相観察・粒度分析のどちらも、地表面となることもあった堆積物という判断へ導く。グループIの流路が放棄されて滞水し、干上がることもあった、という環境変遷を想定できる。この理解は、隣接する219地点で確認されていた、旧河道の凹地という地形情報と矛盾しない。

第3ユニットでは比較的急激に上方細粒化して、第3ユニット上部から第4ユニット下部にかけては、含泥率がスムーズかつ大幅に上昇していき20%を超えてピークに達した後はスムーズに10%程度まで減少していく。そして、両ユニットにまたがって、中央粒径が2φを超える状態が30cmは続いている。そうしてしてみると、T系統第2ユニットで認められる4つのグループにおいても、それぞれグループの上位には含泥率の上昇を認め得る。こうした特徴は、洪水性の氾濫性堆積の可能性も否定しない。すなわち、第2ユニットは徐々に規模を強めながらたびたび氾濫を起こしていた状況で、それが一時的にストップして第3ユニットから第4ユニットのグループVII下部まで上方細粒化していったとも考えられよう。第2ユニットの色調が黄色砂と異なって、むしろ白川砂のような白みが強い

点や堆積岩粒が散見できる点も示唆的である。

(3) L地点の様相

L系統は、KS地点など同様に、下位の上方粗粒化ユニットの上に上方細粒化ユニットが介在して、その上にまた上方粗粒化ユニットが存在する。しかしこの介在的な上方細粒化ユニットは、層厚が4cmと薄く、数十cmの厚みをもつKS地点の上方細粒化ユニットとは異なる。この程度の層厚ならば、例えばKS(S)系統の上方粗粒化ユニットである第2ユニットが内包するような、上方粗粒化グループ間の一時的な上方細粒化部の層厚とあまり変わらない。もっとも、L系統の上方細粒化ユニットは、 -1ϕ より粒径の大きい細礫が比較的取り込まれている点で、KS地点の上方細粒化ユニットとは異なり、また、中央粒径が 1ϕ よりも小さい粒径になるから、KS地点の上方粗粒化ユニット内の一時的な細粒化とも異なる。L地点の粒度は、上流に位置するKS地点のそれよりも全体的に小さい傾向にあることから、このL系統の上方細粒化ユニットも、下流域の特性と解すべきかもしれない。そうしてみれば、基本的には上方粗粒化のユニットが二つある、という点では、800mの間隔があるL地点とKS地点とでも、土石流の様態に根本的な違いはなかったと言えるかもしれない。

さて、L地点では旧地表にごく近い黄色砂の最下部では、含泥率の上昇を伴ってわずかながら上方細粒化するまでに、粒径の小さい一群がわずかに上方粗粒化している。旧地表面直上に生痕化石を認められないので、黄色砂が堆積したときの状態をそのまま維持していると考えられる。つまり、黄色砂の最下部付近での含泥率の上昇は、旧地表にいた生物が地表面の泥質を黄色砂の堆積後に黄色砂中に招き入れた、という可能性は低いと考えられる。黄色砂が旧地表直上でにわか上方粗粒化してから一度上方細粒化するという現象は、KS(N)系統と276地点でも認められる。この点でも、L地点とKS地点やその周辺との近似がうかがえる。そして276地点では、含泥率はわからないが、この特徴に対して、土石流に先行する洪水性の氾濫による堆積と推定している〔増田ほか2005〕。

洪水性とはいえ粒度は小さい点、そして、L地点のすぐ南の220地点では黄色砂に覆われた水田の表面に耕作痕跡の残存とも考えられる細かな凹凸が遺存していた点〔伊藤1995〕などを考慮すれば、少なくともL地点では、この洪水は小さな自然堤防上の高まりが崩壊した程度の弱く広域的だったものと考えられるかもしれない。

また、上位の上方粗粒化ユニットは、下位の上方粗粒化と同じく上方粗粒化していくけれども、構成成分や歪度や淘汰など、その内実的な特徴はむしろ異なっている。両者は似

て非なる堆積とみなしたい。そうみなすならば、L地点でも土石流には2波あったと考えることも可能であろう。

(4) 全体の様相

T系統の第2ユニットは、土石流の「本流」と想定された297地点の垂直粒度分布〔秋山ほか2006〕やKS地点のKS(S)系統の第3ユニットと、中央粒径や分級度の数値もよく似ている。また、T系統の第4ユニットとKS(S)系統の第1ユニットとL系統の第1ユニットは、中央粒径や分級度が同程度の数値をとる。つまり、T系統とKS(S)系統とでは、ともに二つの上方粗粒化ユニットをもちながらも、上下の特徴が対照的な関係にある。土石流の特徴として、粒径の小さいものは二次元的にみて縁辺部に分布する。このことを考慮すれば、土石流の最も営力の大きい部分が、KS地点を通過してKS(S)系統第1ユニットの堆積をみたときに、その縁辺部としてT地点では第4ユニットが堆積した、という仮説を立てられるかもしれない。

T地点では、土石流直前の安定した環境になる前には流路があったと思われ、その第1ユニットのグループIの中央粒径は、土石流下部ユニットである第2ユニットのそれと同程度であった。このT地点周辺では、KS地点付近とは異なって、直径1mを超えるような巨礫は分布していない。また、第2ユニットの色調は淡灰白色であり、いわゆる「黄色砂」よりは白みが強い。こうしたことから、このT地点の第2ユニットは、白川が通常運んでくる岩屑物が堆積したものとみなせよう。つまり、T地点では当初は上・中流域の河床堆積物がもたらされたと考えられる。T系統第2ユニットはユニット全体で上方粗粒化を示し、またその中に幾つかの上方粗粒化のグループを内包していた。これは、276地点〔増田ほか2005〕や、KS(S)系統第1ユニットと同様の特徴である。

しかし、KS(S)系統では、第1ユニットの上位に堆積している第2ユニットでは、若干の含泥率の上昇をみるものの含泥率自体は5%を下回り、またその時の中央粒径もせいぜい1φを超えるかどうかである。それに対して、T系統の第2ユニットは、上述のように、洪水性堆積の可能性も否定できない。

さて、T地点の東には、図33に示したように吉田山がある。さらには、土石流の堆積厚や巨礫の分布も物語るように、京都大学構内遺跡においては土石流直前の旧地形は起伏に富んでいる〔富井2005〕。こうした特徴から、土石流がこれら各地点を一様に流れたとは、無論考えがたい。また、T地点については、窪地であって、なだらかな緩斜面ないし平坦地であるKS地点一帯やL地点とは微地形がまったく異なるので、T系統は窪地という局

おわりに

所的な堆積を示しているに過ぎない可能性もある。しかし、今回試料採取した3地点では、T地点を含めてKS地点でもL地点でも、いずれにおいても、中央粒径が異なる二つの上方粗粒化ユニットを確認できた。このことを、ここでは積極的に評価してみたい。

そこで、それぞれの地点において、中央粒径が 0ϕ を超えるユニットを仮に、「主流」と呼び、 0ϕ に満たないユニットを「傍流」と呼べば、T地点では、まず洪水ないしは土石流の主流が通過してから土石流の傍流が通過し、また、KS地点一帯では土石流の主流が通過する前に傍流が通過していた、と言えるかもしれない。上流からの強い営力のベクトルが、南のT地点辺りから北のKS地点辺りに移動した可能性は充分にある。それに対して、L地点では、上方細粒化ユニットの特徴からみて、あまり時間をおかずに2波の傍流が流れ下ったと考えられるかもしれない。

前述のように、T地点やその周辺では巨礫の分布を確認できていないうえ、T系統の第2ユニットが土石流か洪水か判断できない点も踏まえれば、T地点については、必ずしも、2波の土石流、とは言えないかもしれない。第一の波が洪水の可能性があるからである。しかし、少なくとも、KS地点およびL地点に関しては、土石流には2波あったとする解釈〔富井2008〕は支持されていると言えよう。

このように、各地点で推測できる2つの「波」においては、いずれの地点でも、第一の波も第二の波もそれぞれ同一現象の同時異相、とは即断できない。むしろ、起伏に富んだ地形を間に挟んで800m隔たっているKS地点とL地点で、黄色砂中に上方粗粒化ユニットに挟まれる上方細粒化ユニットをどちらにも認め得る点は、却って、土石流堆積物は複数の波の複合堆積物と考えることもできる。以上のことから、白川弥生土石流は、初期には洪水をもなった可能性もある複数の土石流の複合的な大規模土砂移動現象だった、という結論を導くことができよう。

5 おわりに

白川下流域に位置する京都大学構内遺跡に認められた、弥生時代前期末（2400年前頃）の砂質土石流堆積物について、互いに離れた3地点で堆積物の粒度組成変化を検討した。その結果、1m程度の厚い堆積が残存しているところでは、上方粗粒化のまとめりとして堆積物を上部と下部の二つに分け得ることがわかった。そして、旧地形の複雑さやその二部構成の広域性から、この土石流が少なくとも2波から成っていて一過性のものではないことを推測した。

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

この分析は、平成18～20年度科学研究費補助金（若手研究B：課題番号18720209／研究課題名「花崗岩地盤山地を上流域にもつ畿内・瀬戸内の初期農耕社会の土砂災害と土地利用」／研究代表者「富井眞」）を得ておこなった。ボーリング調査によるコアの採取は、田中地質コンサルタントに依頼し、2006年9月26～28日に実施した。粒度分析作業は、秋山美奈子氏（本学理学研究科卒業生）にもしていただいたほか、成瀬元氏（千葉大学）・増田富士雄氏（同志社大学）には、作業の便宜を図っていただいた。末尾ながら記して謝意を表します。

〔註〕

- (1) コアは4本のチューブから成る。それぞれのチューブの継ぎ目には、上位のチューブ下端の残滓が下位のチューブの上端に含まれる場合もあったので、厳密に言えば、それぞれのチューブを連続させて一連のコアとみなすことはできない。そこで、継ぎ目には、便宜的に2cm分の空白を設定した。すなわち、下位から順に、T-215とT-212の間、T-151とT-148の間、T-87とT-84の間、以上の3つの継ぎ目である。
- (2) コアは2本のチューブから成り、チューブの継ぎ目には、上位のチューブ下端の残滓が下位のチューブの上端に含まれていた。そこで、T系統と同じく、継ぎ目には便宜的に2cm分の空白を設定した。すなわち、L-85とL-82の間の継ぎ目である。
- (3) ファイ（ ϕ ）スケールは、地質学で用いられる粒径を表示する単位で、2mmを基準として次式のように負の指数関数で示したものである。 $\phi = -\log_2(d/d_0)$ 、 $d_0=1\text{mm}$ 。

〔引用文献〕

- 秋山美奈子・増田富士雄・春田泰宏・松本 弾・田村 亨 2006「京都、白川扇状地にみられる弥生時代（2500年前）の砂質土石流堆積物の粒度特性」（2005年度日本堆積学会ポスターセッション）
- 泉 拓良 1978「京都大学北部構内の地形復原 —縄文時代から弥生時代—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』、43～48頁
- 伊藤淳史 1995「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第58号、1～8頁
- 伊藤淳史 1999「京都大学総合人間学部構内A O22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』、3～40頁
- 今村峯雄・小林謙一（編） 2007『高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集）
- 竹村恵二・飯田義正・石田志朗 1985「北白川追分町遺跡の堆積物」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ —北白川追分町縄文遺跡の調査—」（京都大学埋蔵文化財研究センター）、79～93頁
- 千葉 豊・伊藤淳史・古賀秀策 1997「京都大学本部構内A U30区・A V30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』、3～40頁
- 富井 眞・吉江 崇・伊東隆夫・外山秀一・上中央子 2007「京都大学北部構内B D28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』、201～262頁

おわりに

- 富井 眞 2005「京都白川の弥生時代前期末の土石流」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』, 225~262頁
- 富井 眞 2008「土石流は初期農耕の地をどう通り過ぎたか -京都市北白川追分町遺跡の白川弥生土石流の堆積物調査-」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』, 187~208頁
- 成瀬 元 2005「沈降管天秤法粒度分析用アプリケーション“STube”の特色と利用法」『堆積学研究』No.62, 55-61頁
- 浜崎一志 1983「京都大学北部構内B D30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』, 25~30頁
- 増田富士雄・田村 亨・富井 眞 2005「砂質土石流堆積物の粘度特性 -京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）-」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』, 263~276頁

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

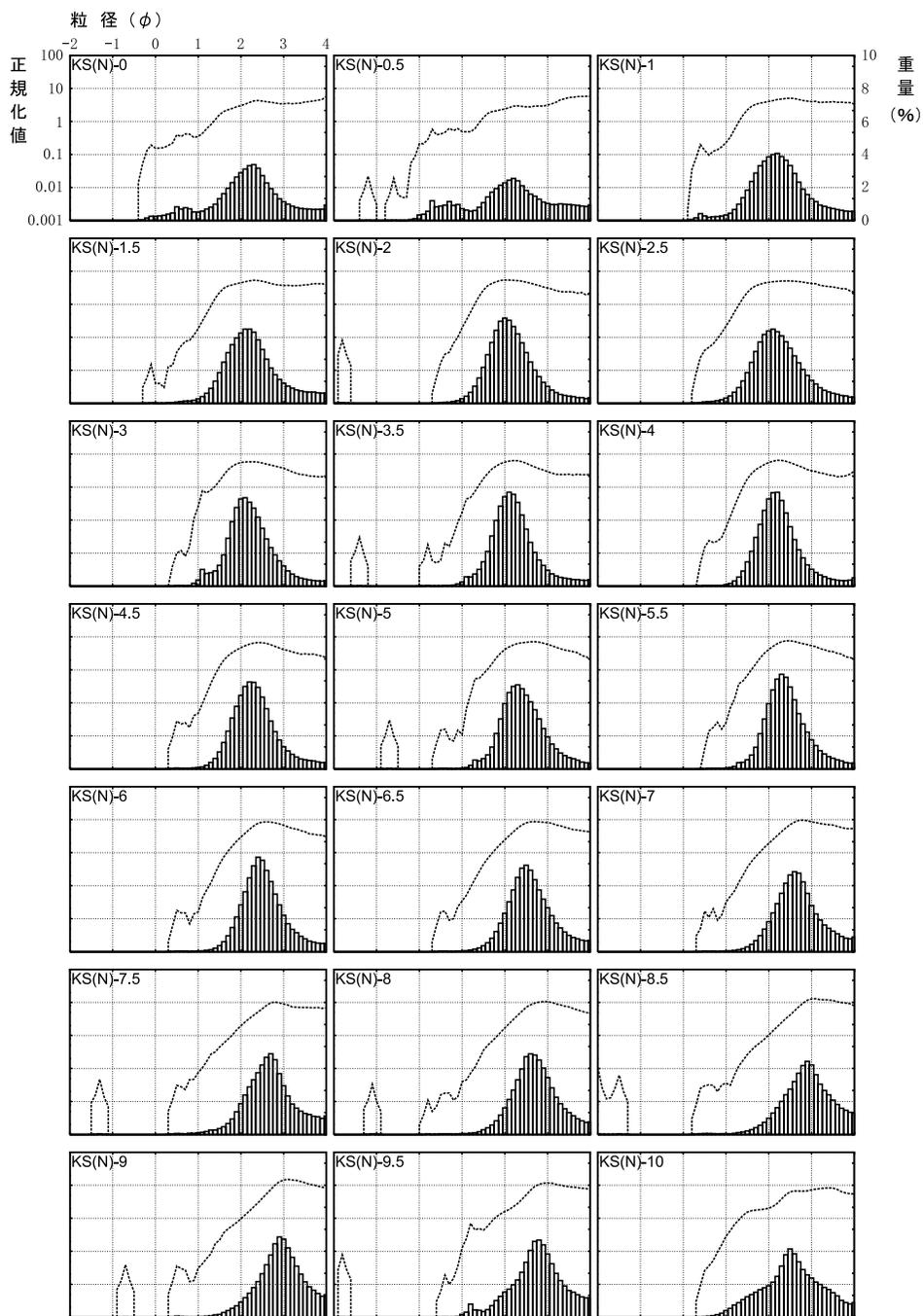


図37 KS(N)系統の各試料の粒度分布・正規化曲線と全体の粒度分布の正規確率紙上プロット

粒度分析データ

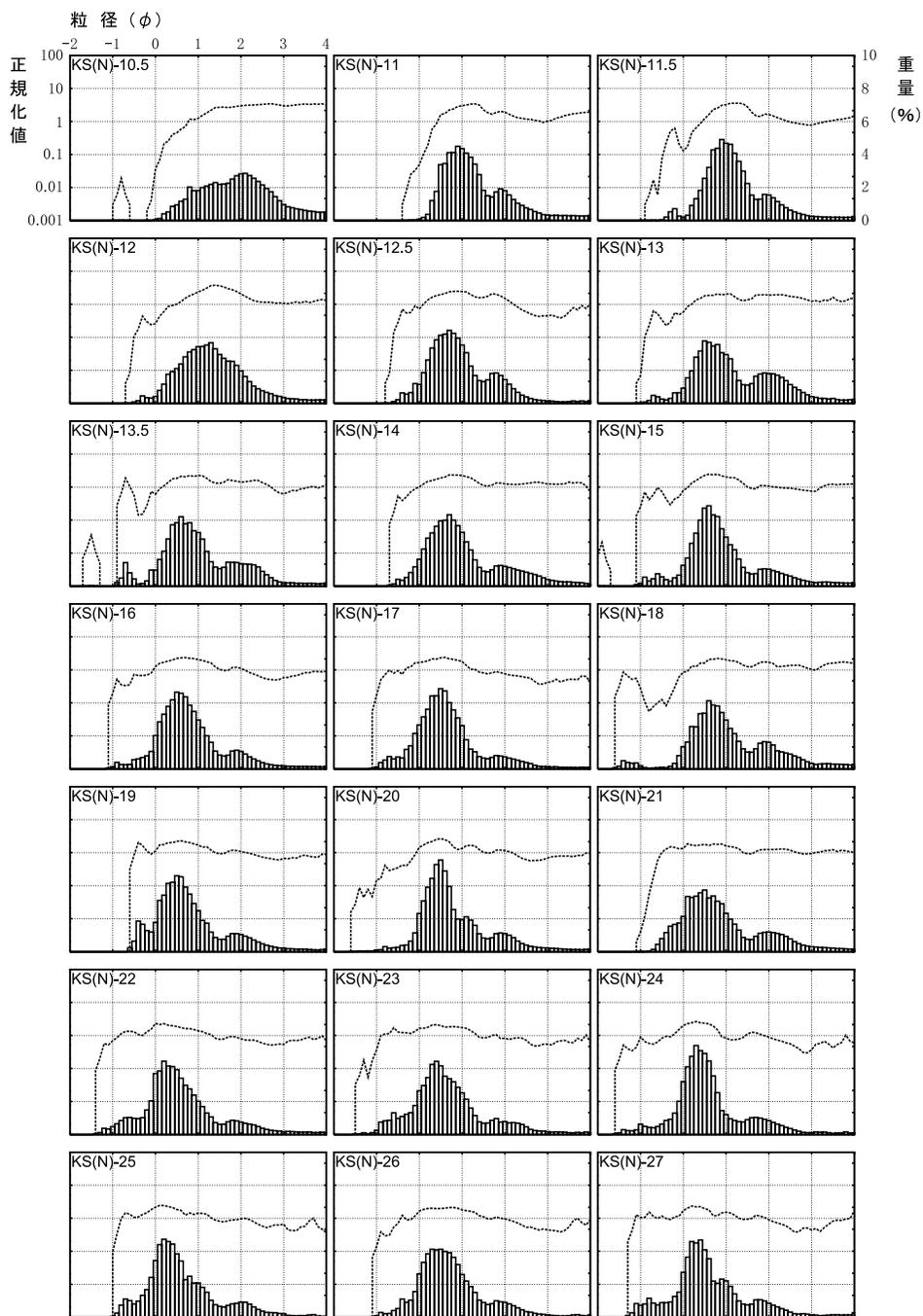


図37つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

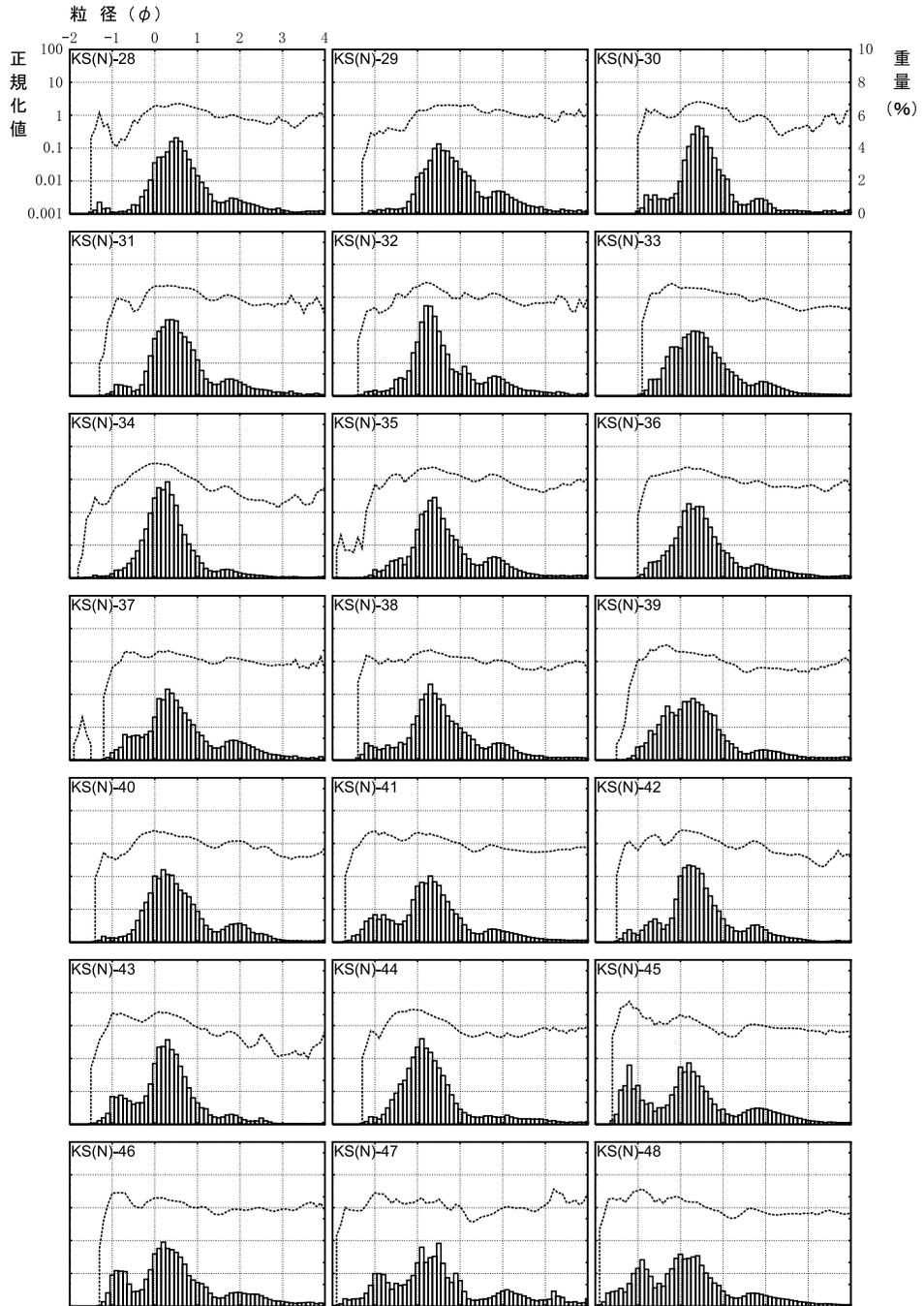


図37つづき

粒度分析データ

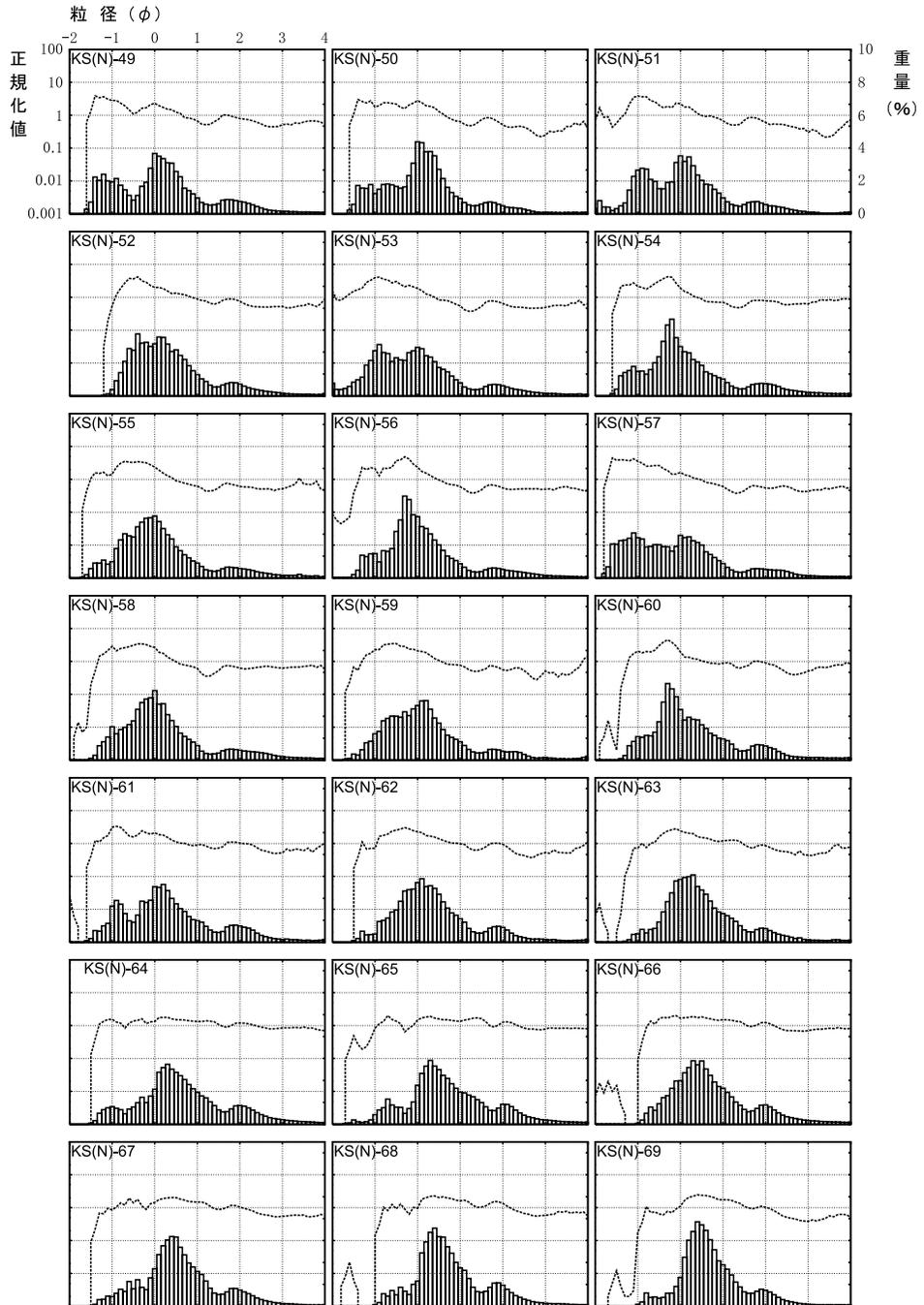


図37つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

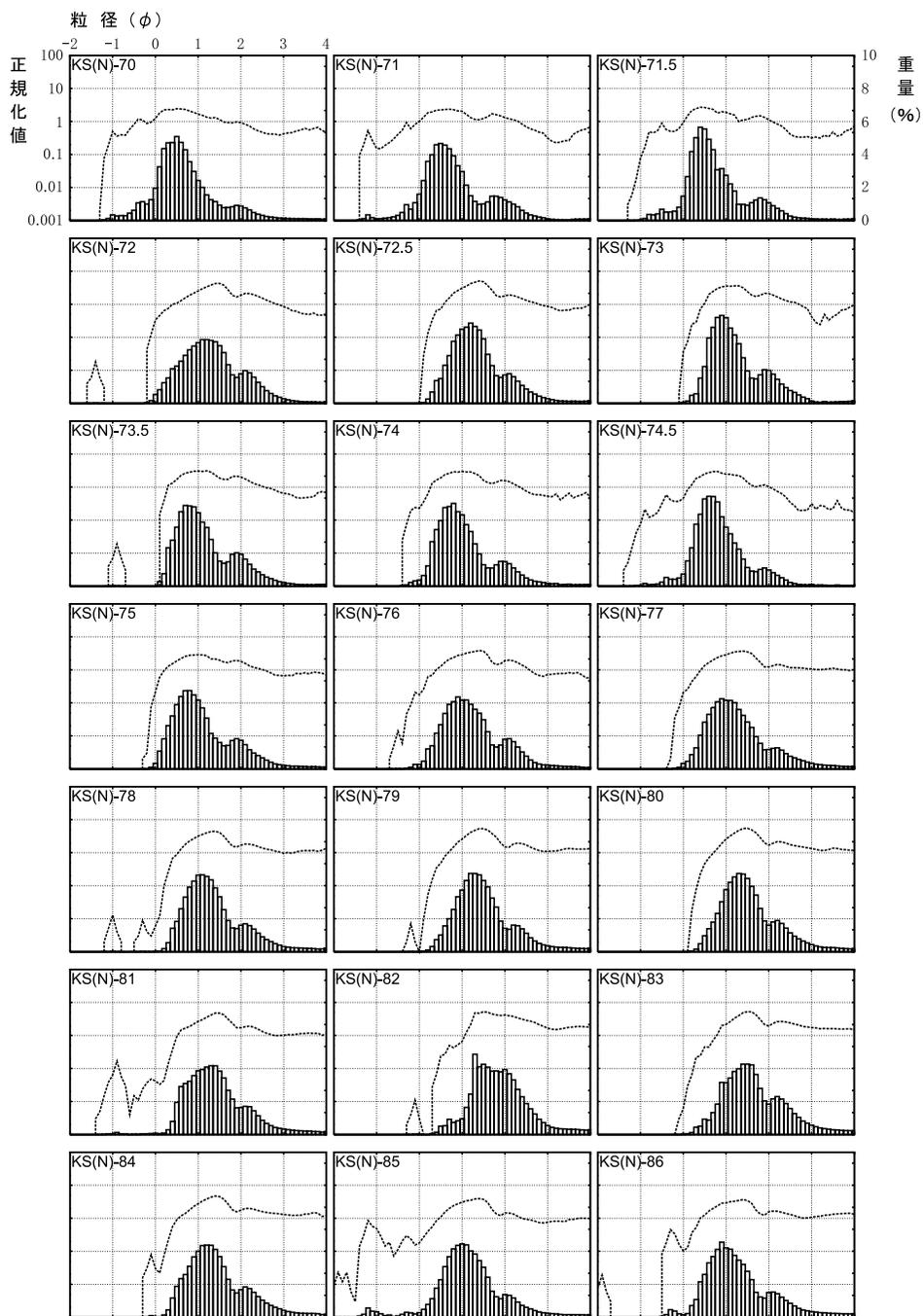


図37つづき

粒度分析データ

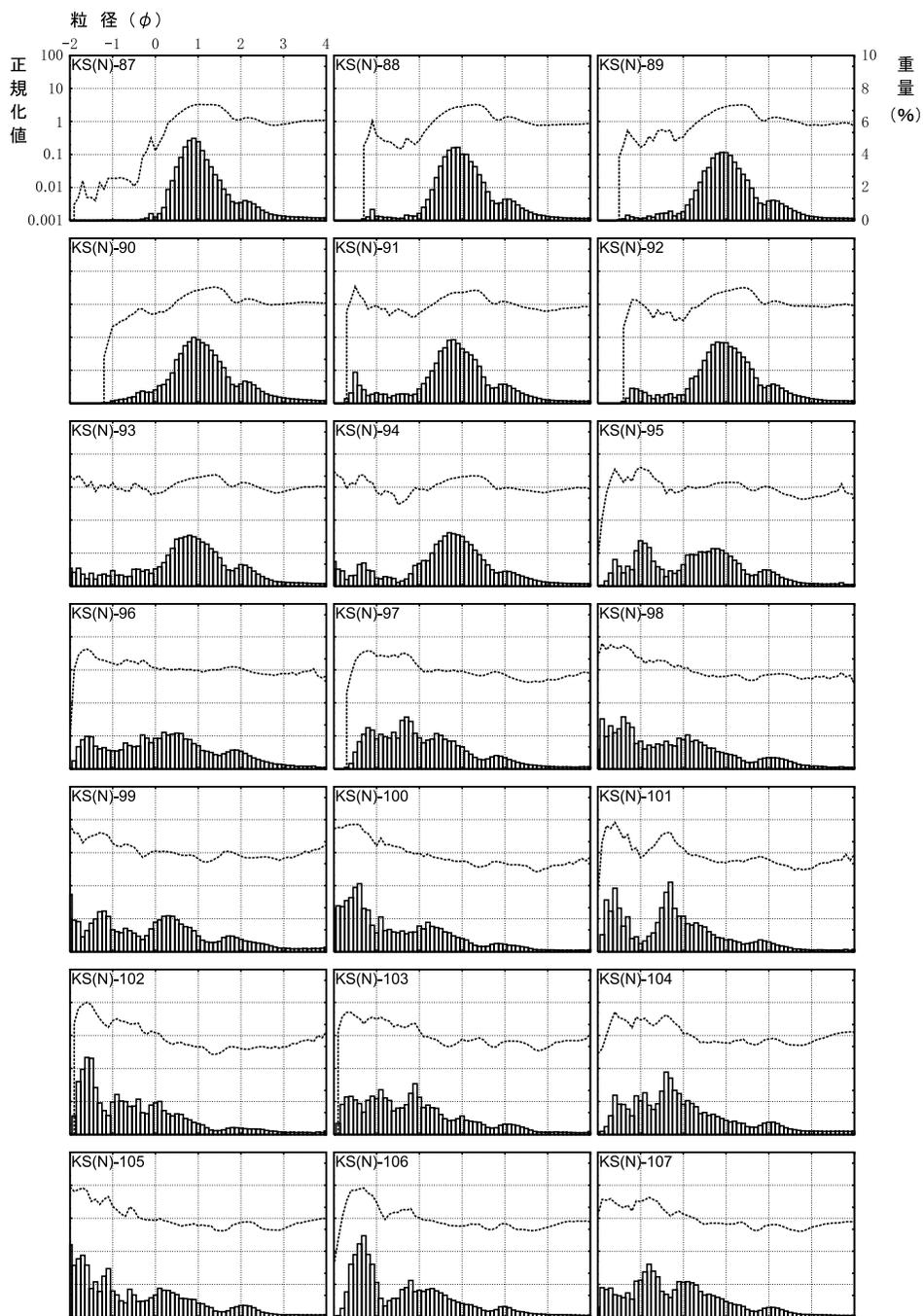


図37つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

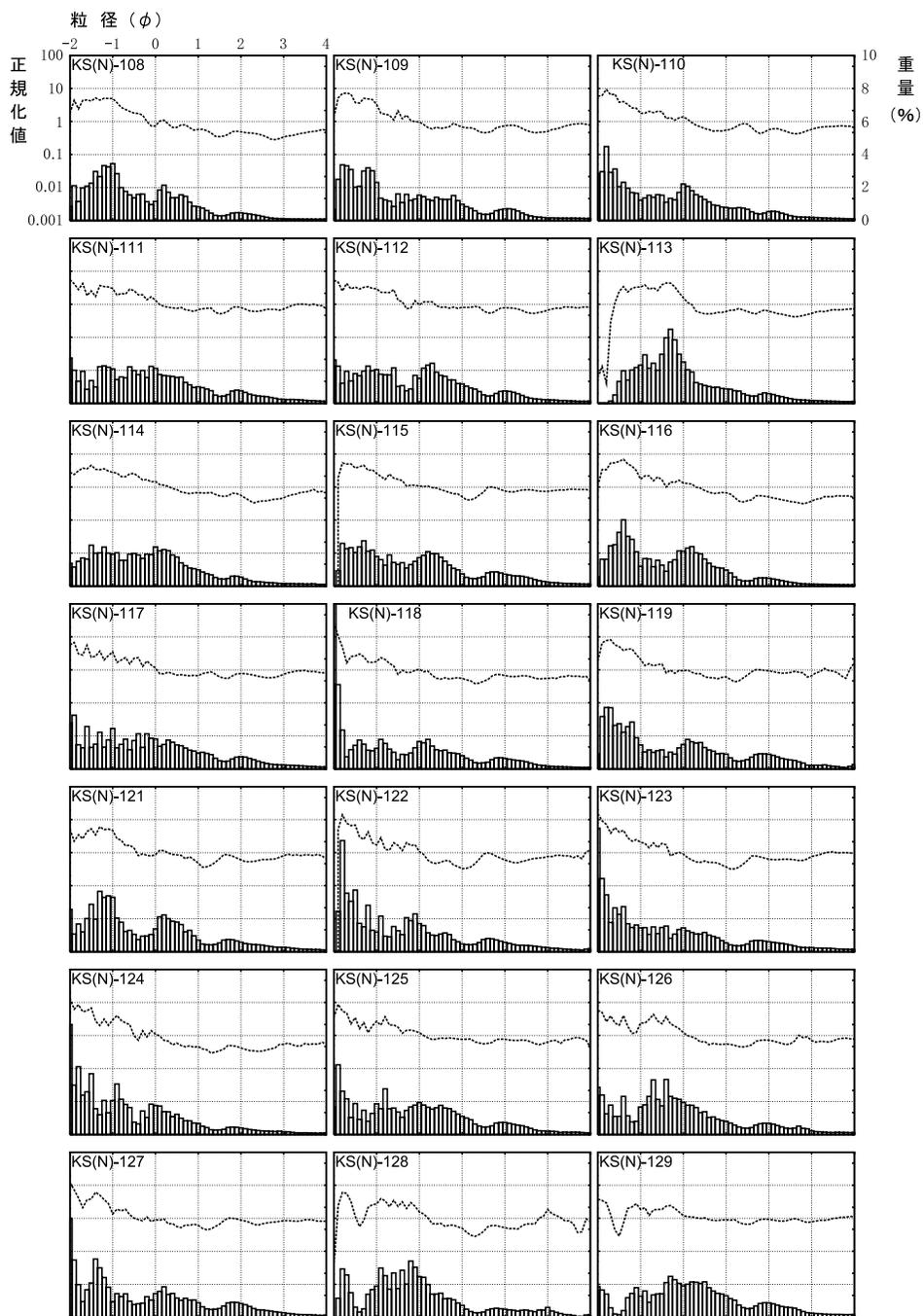


図37つづき

粒度分析データ

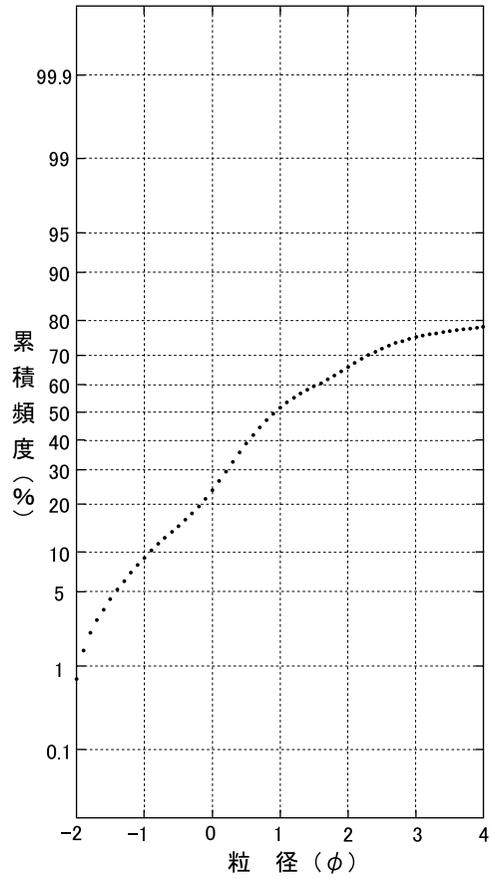
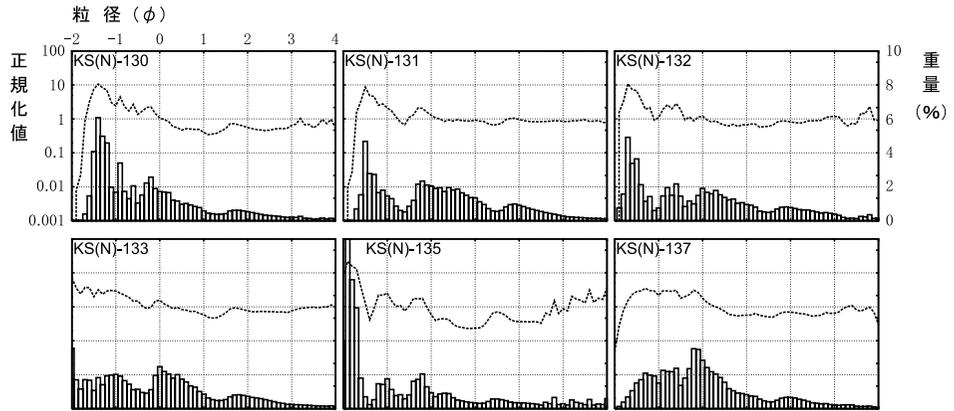


図37つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

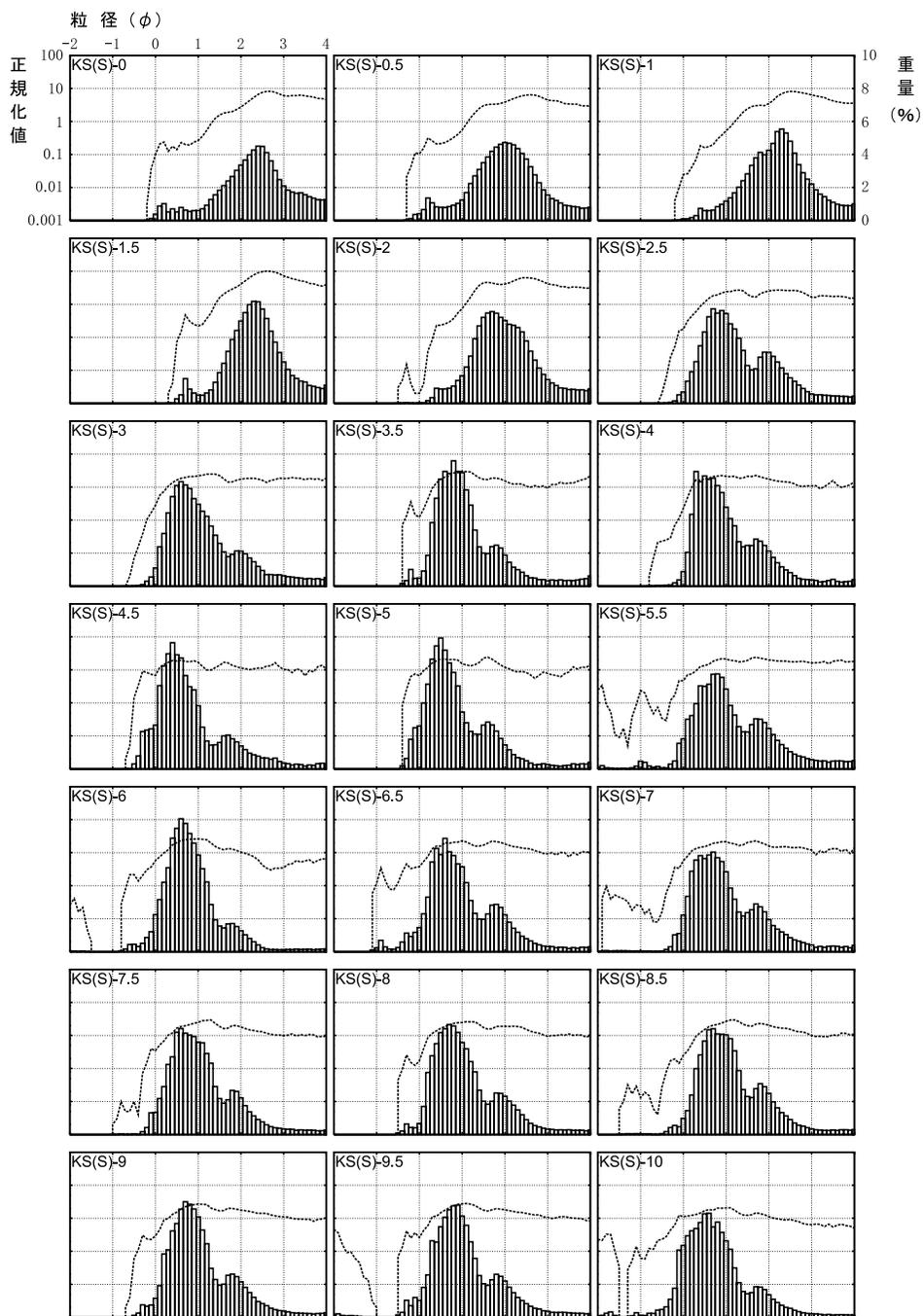


図38 KS(S)系統の各試料の粒度分布・正規化曲線と全体の粒度分布の正規確率紙上プロット

粒度分析データ

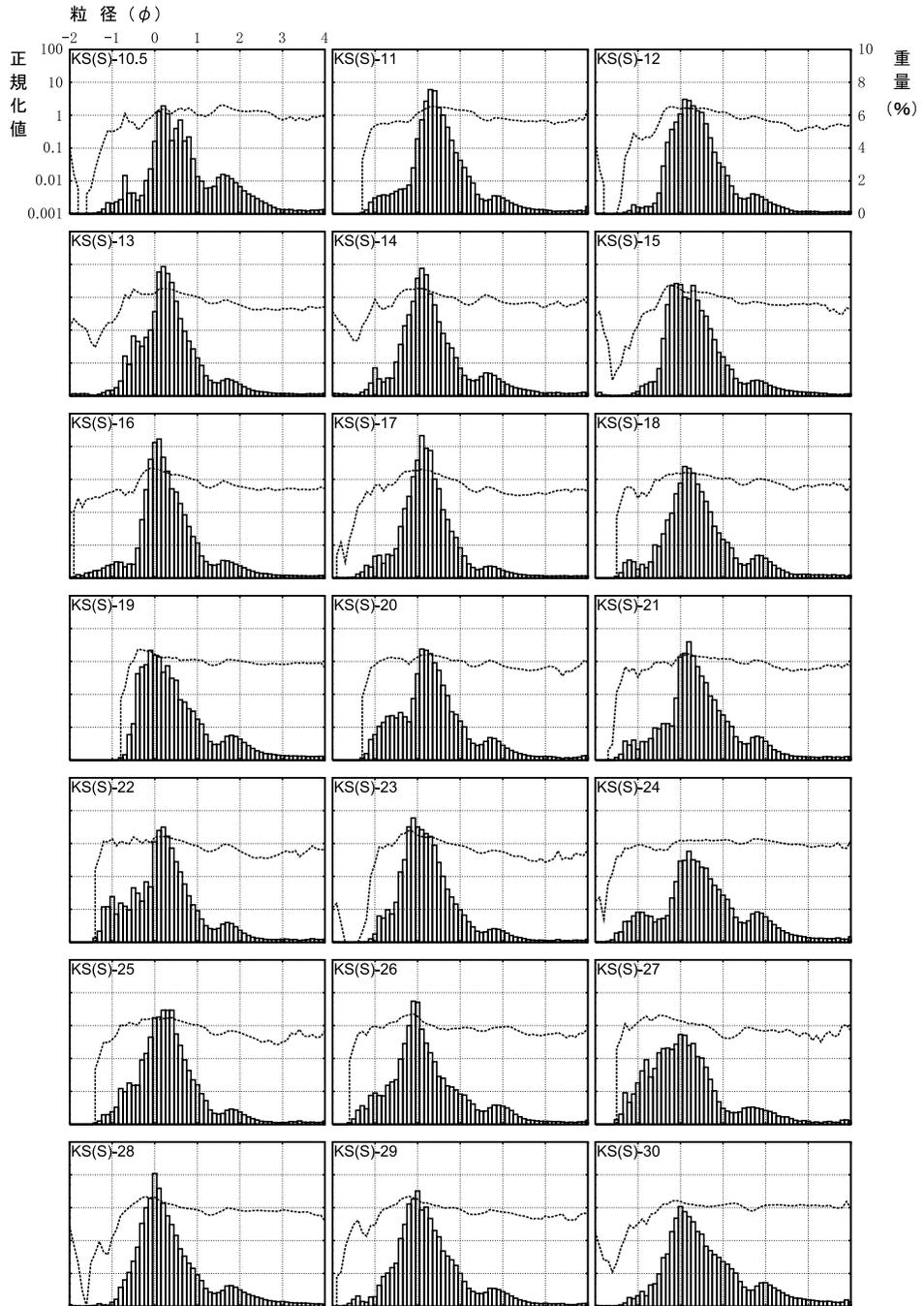


図38つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

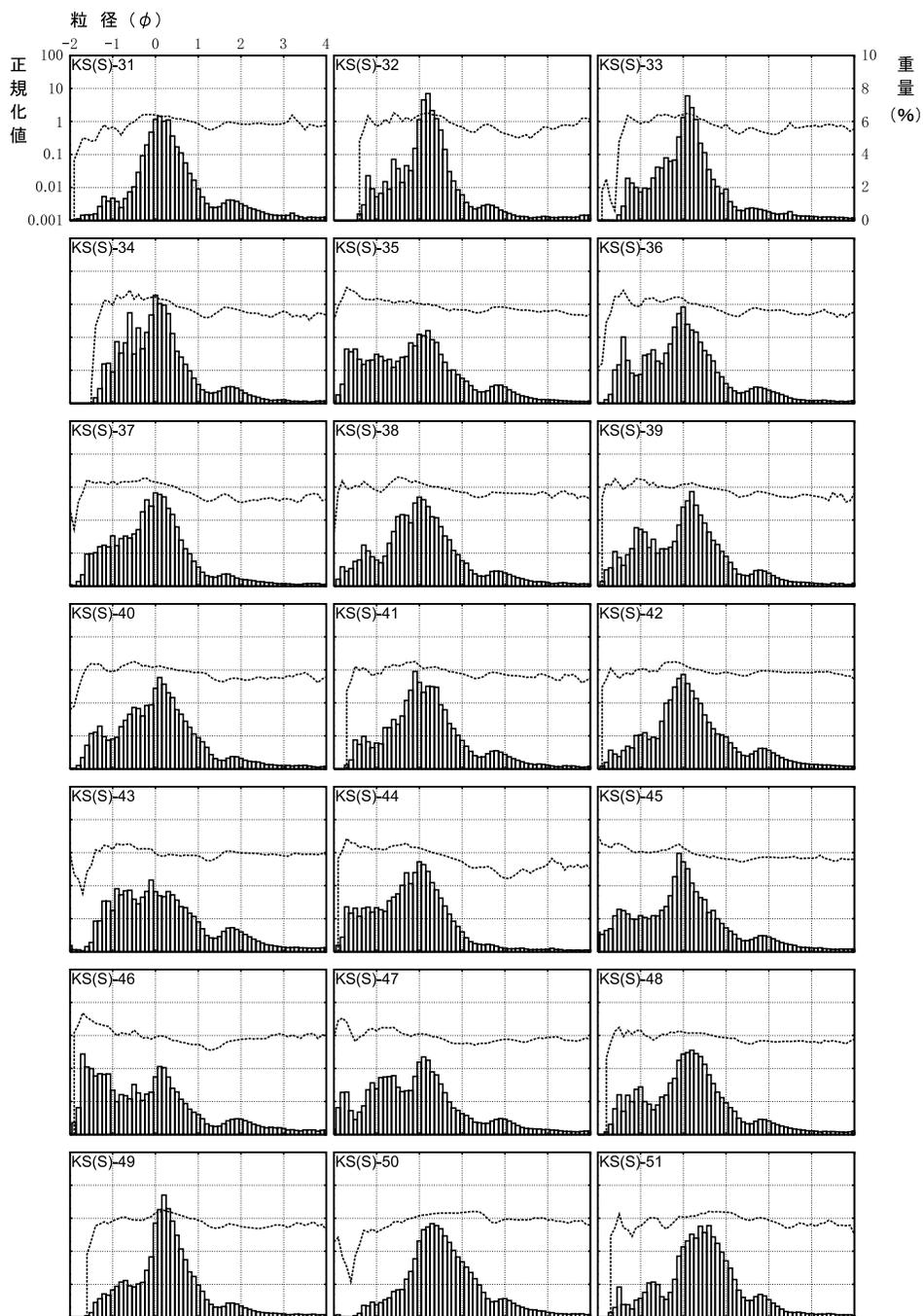


図38つづき

粒度分析データ

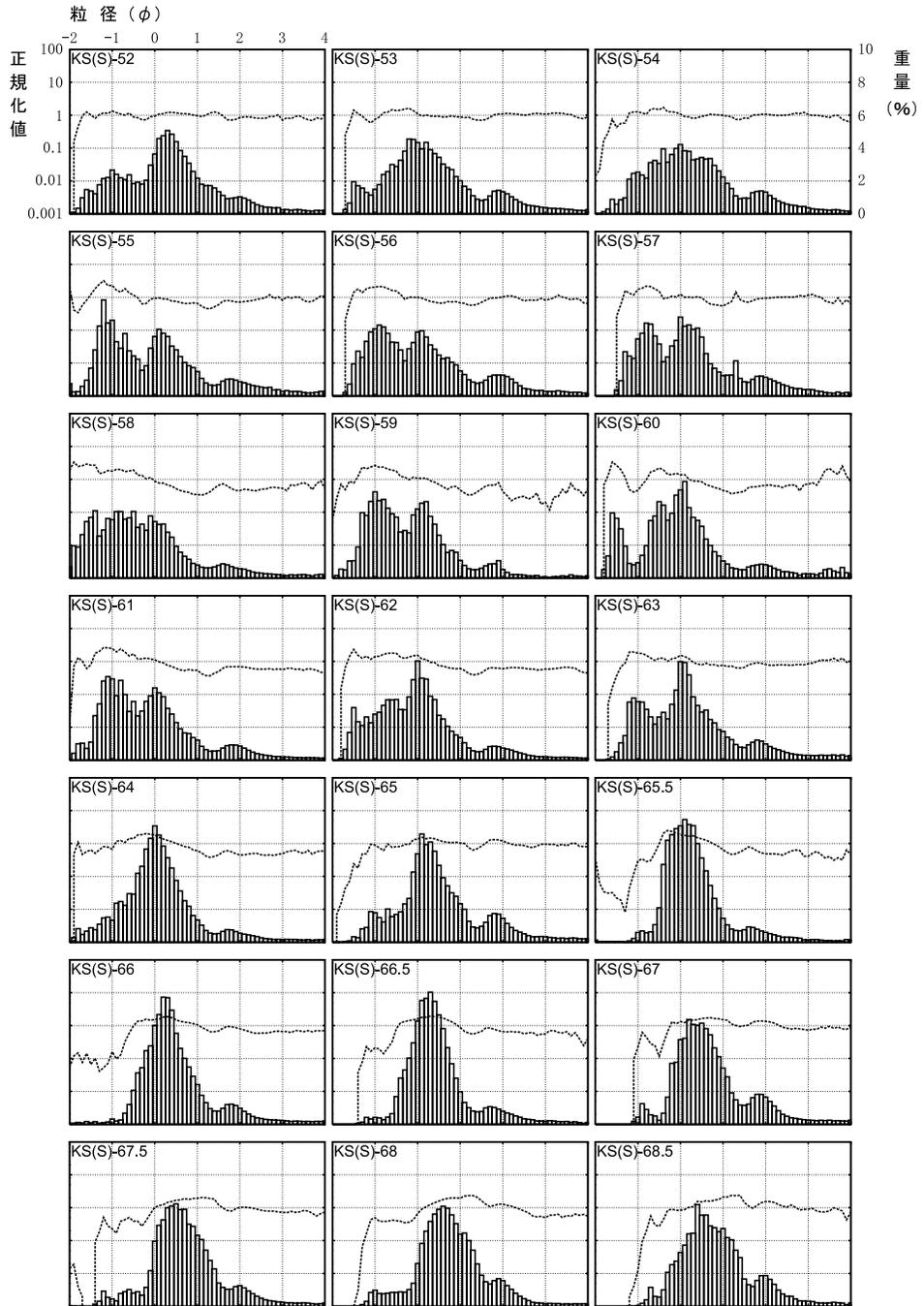


図38つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

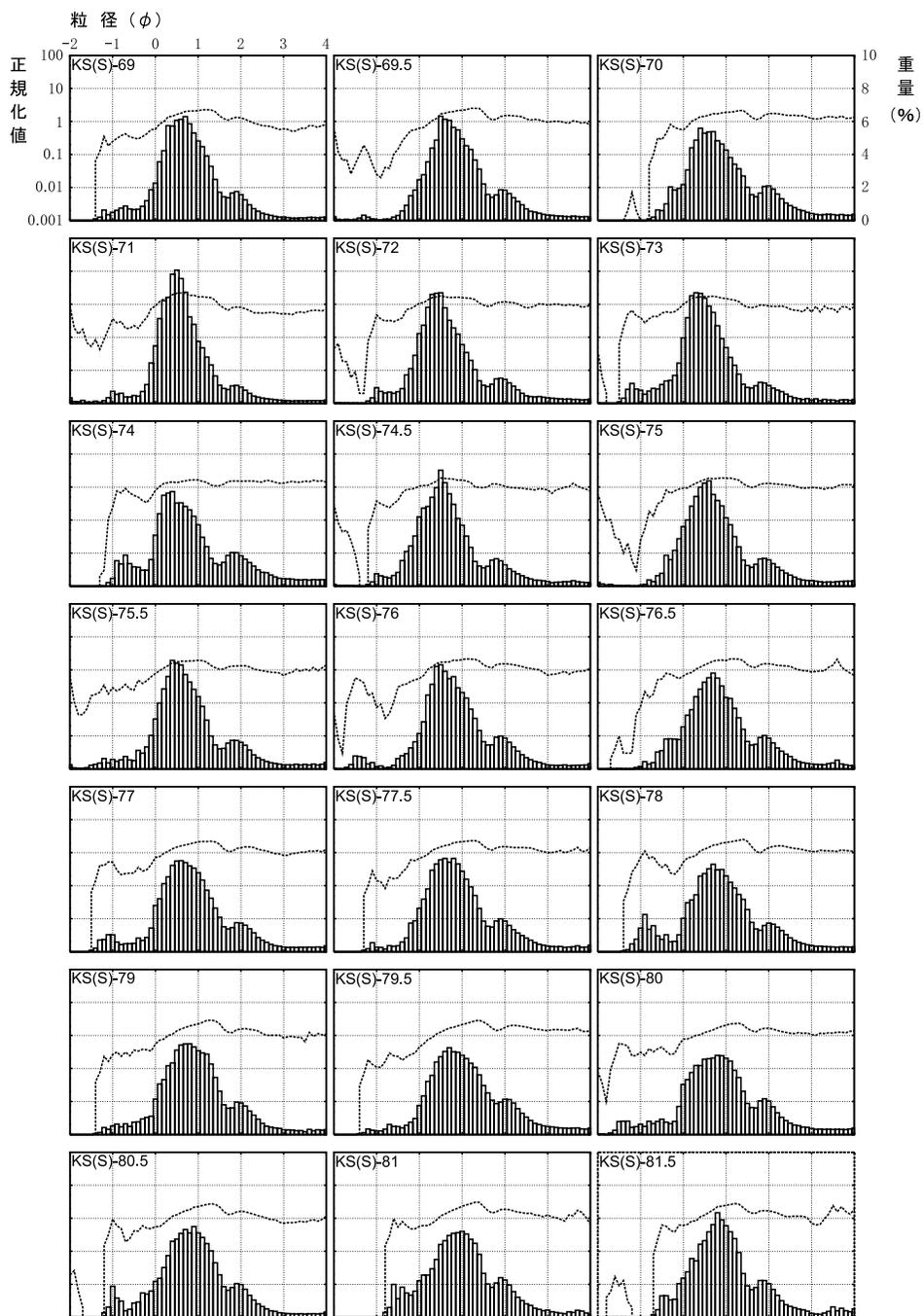


図38つづき

粒度分析データ

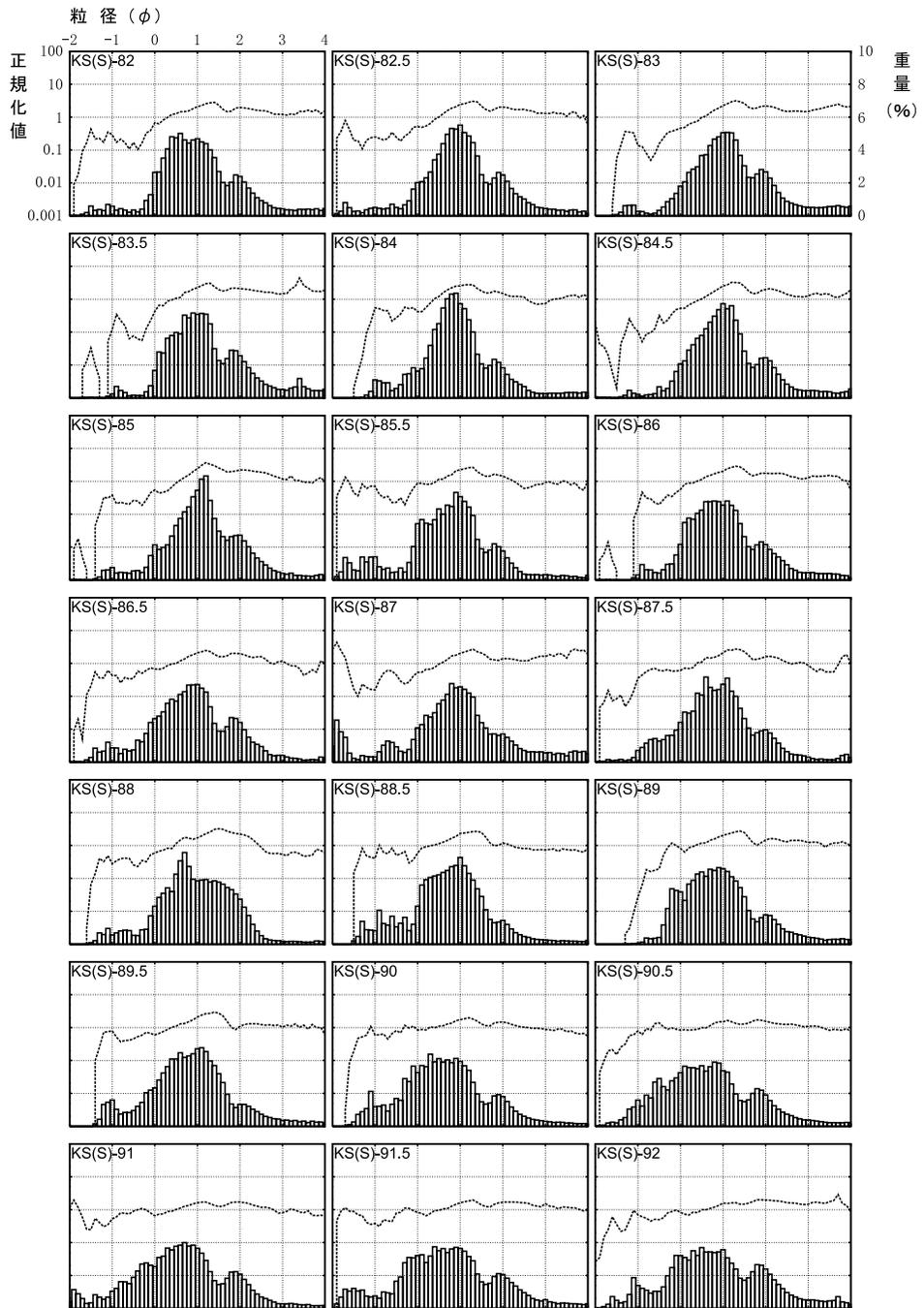


図38つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

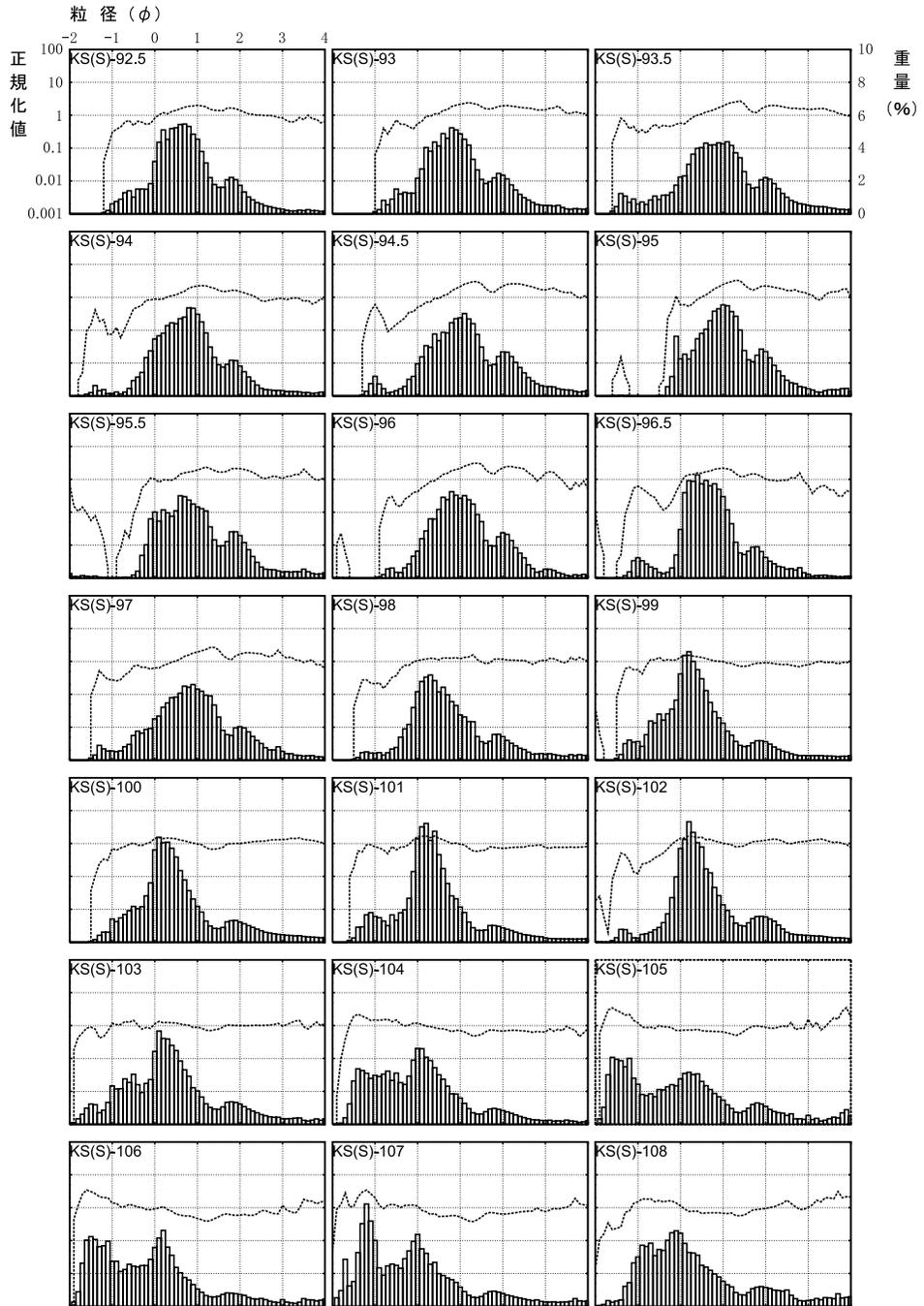


図38つづき

粒度分析データ

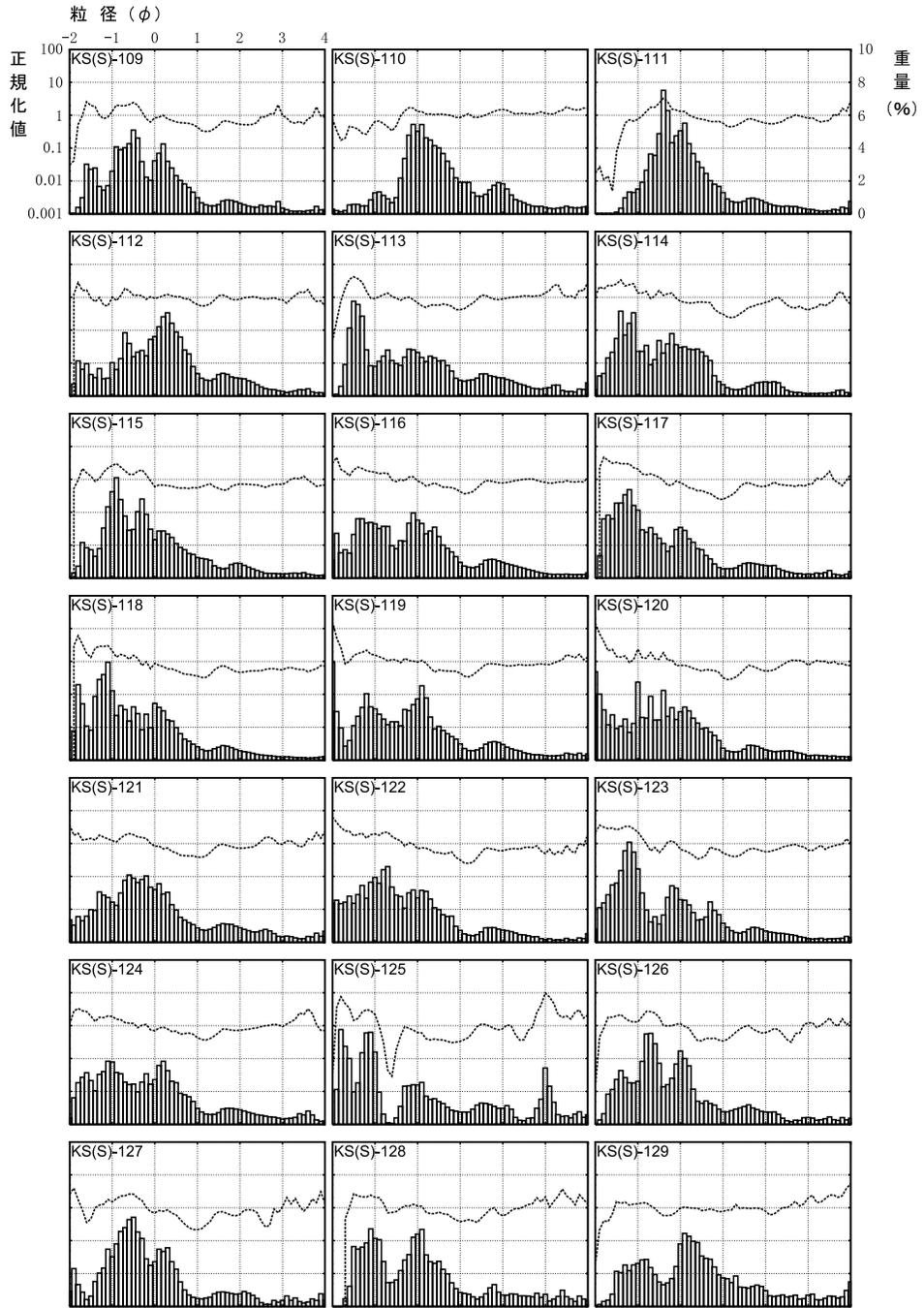


図38つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

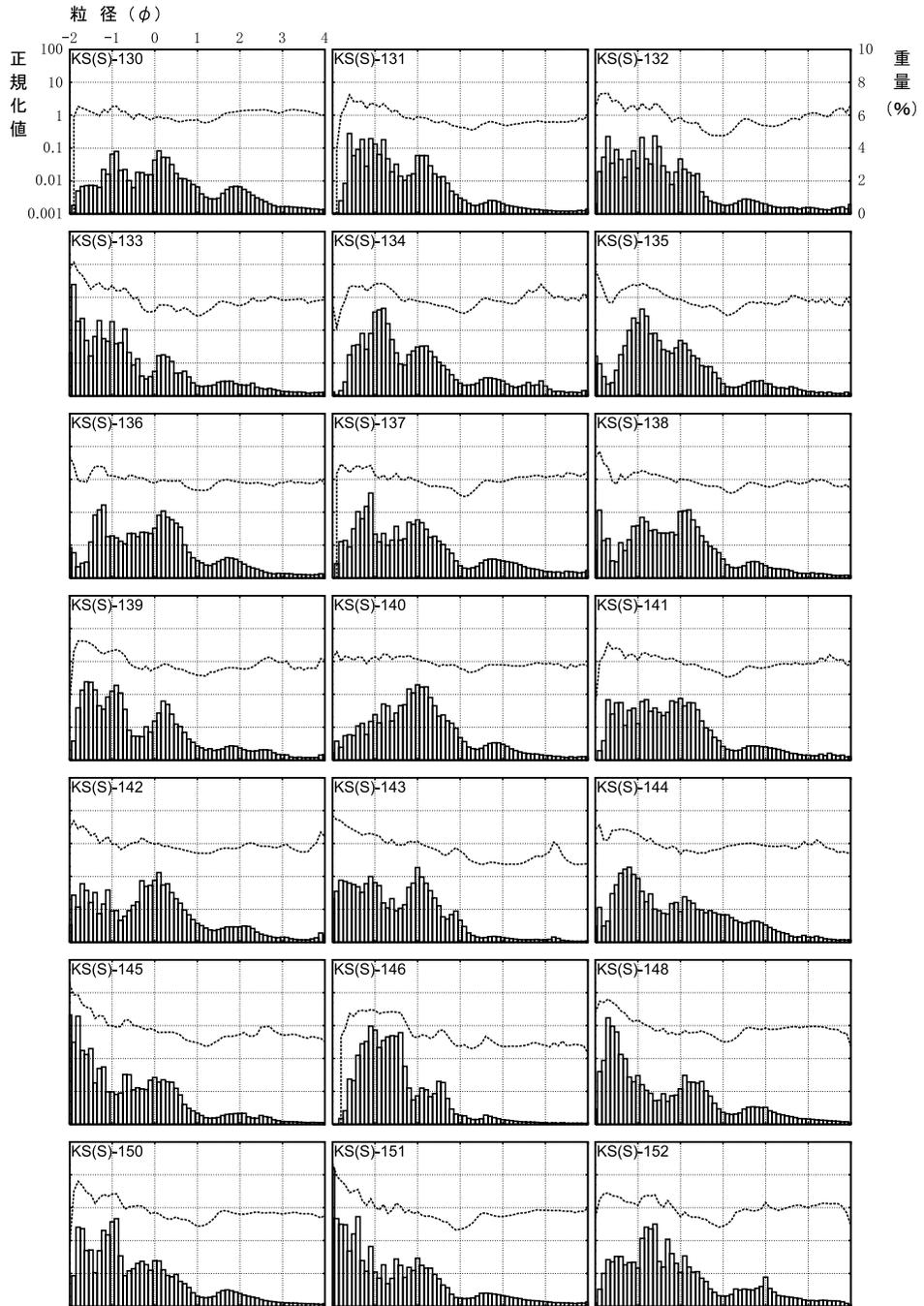


図38つづき

粒度分析データ

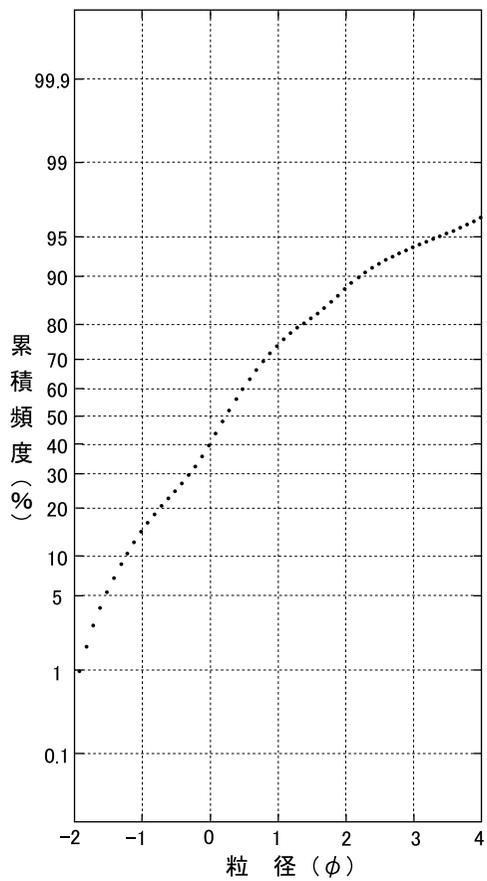
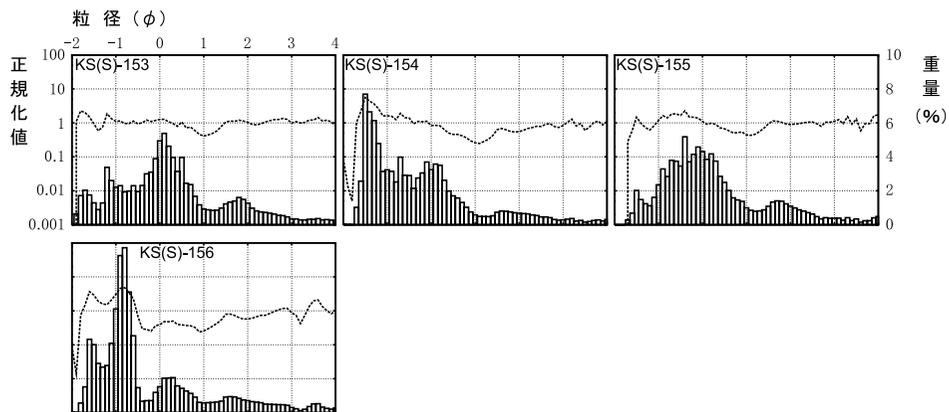


図38つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

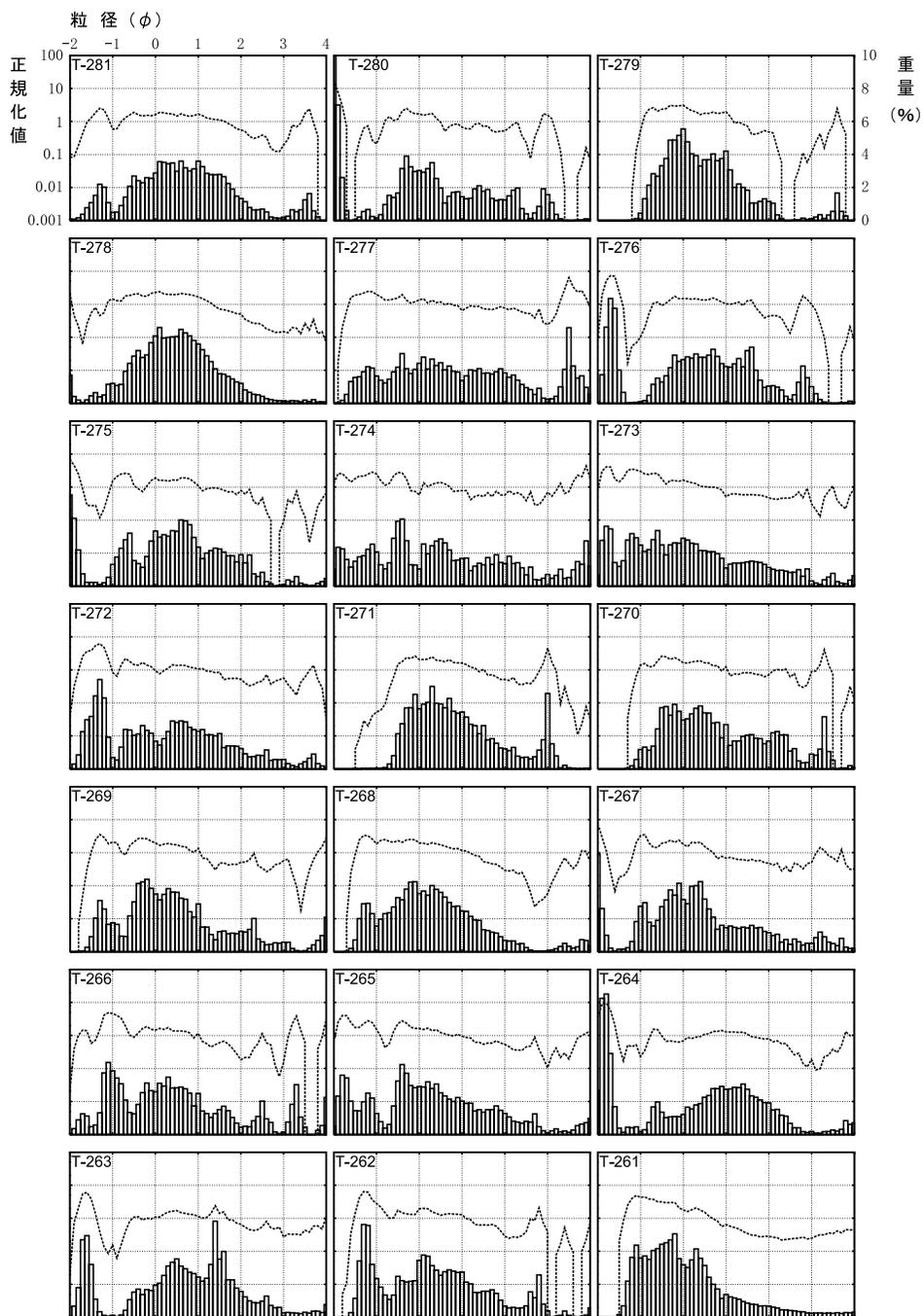


図39 T系統の各試料の粒度分布・正規化曲線と全体の粒度分布の正規確率紙上プロット

粒度分析データ

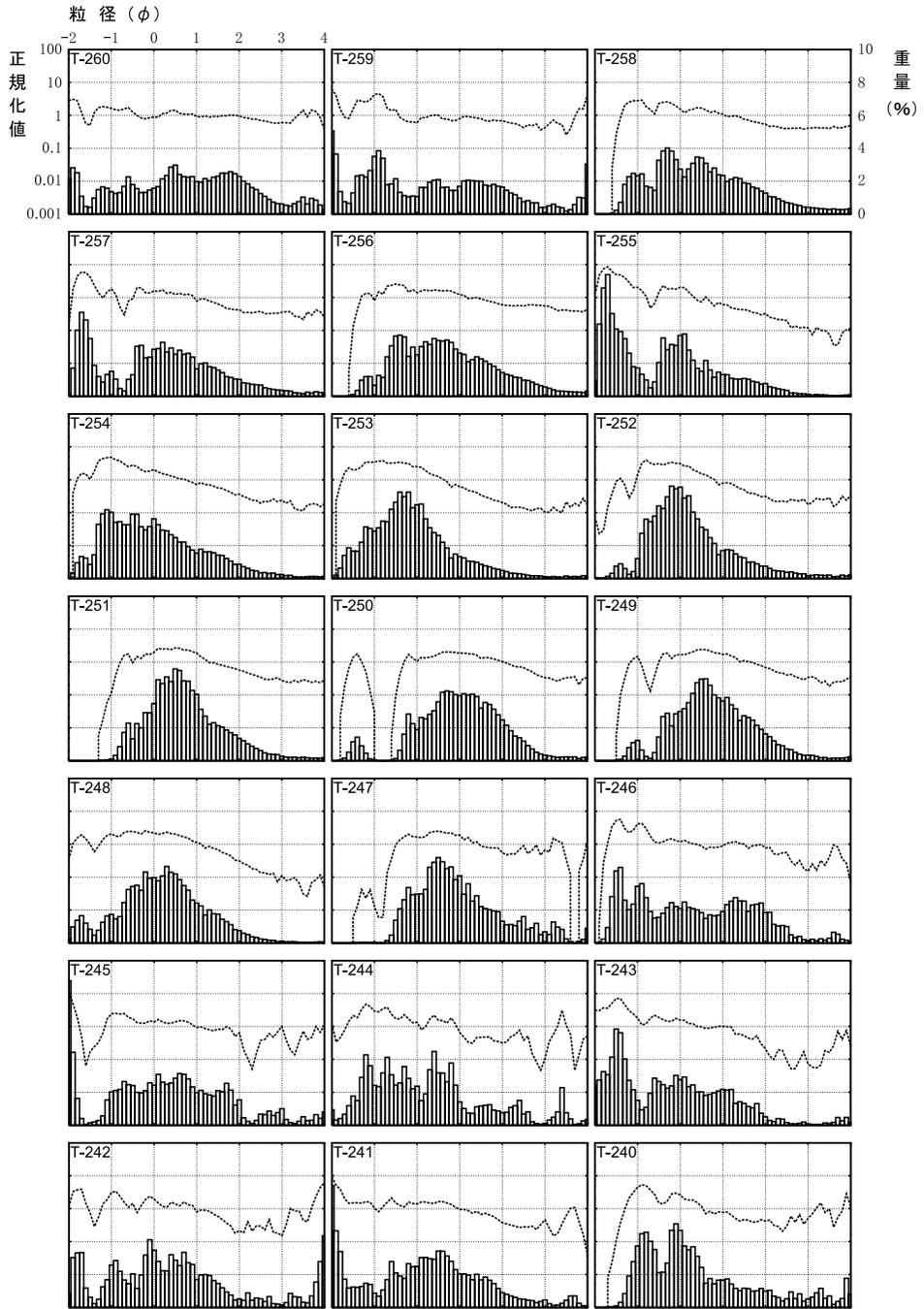


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

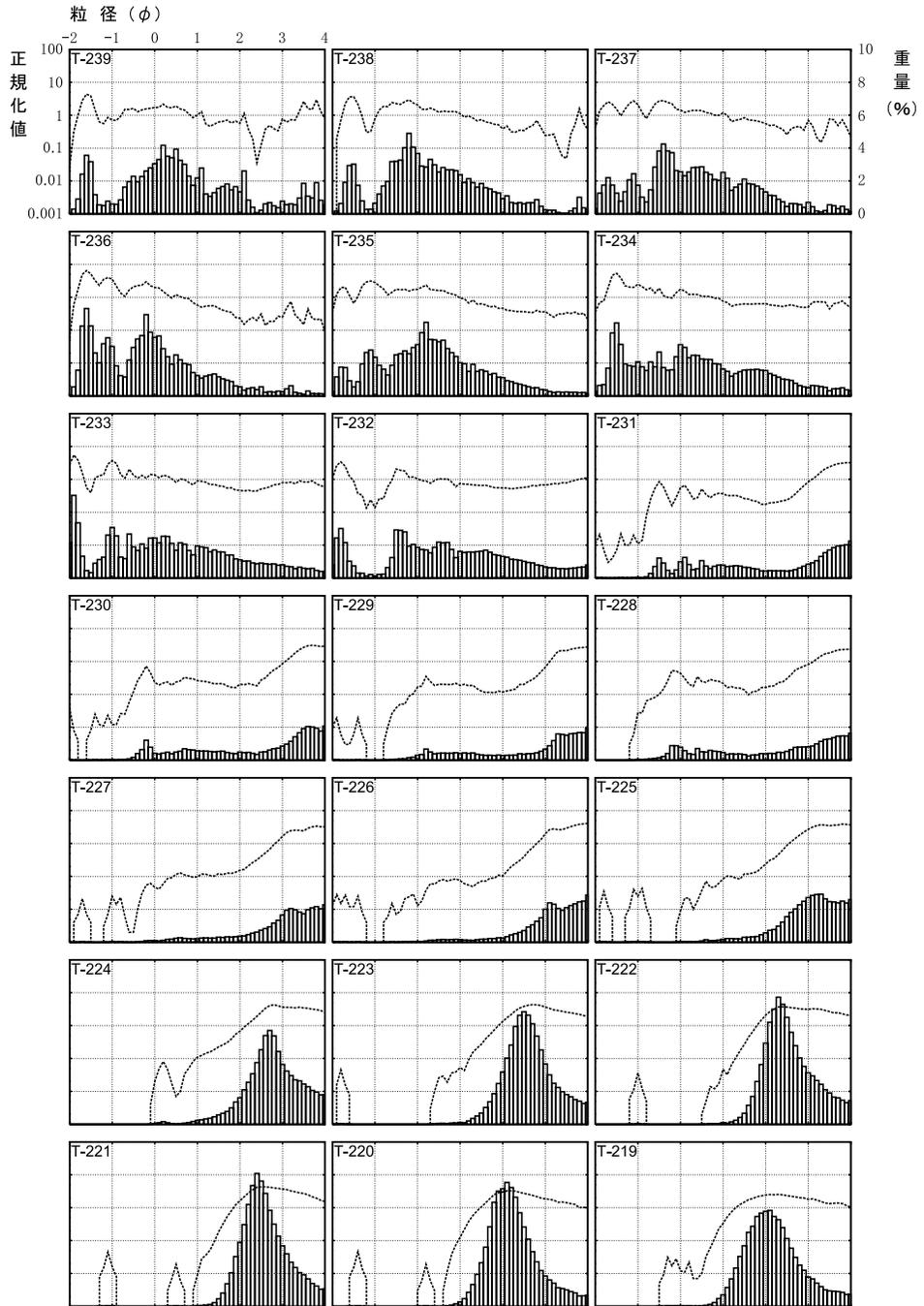


図39つづき

粒度分析データ

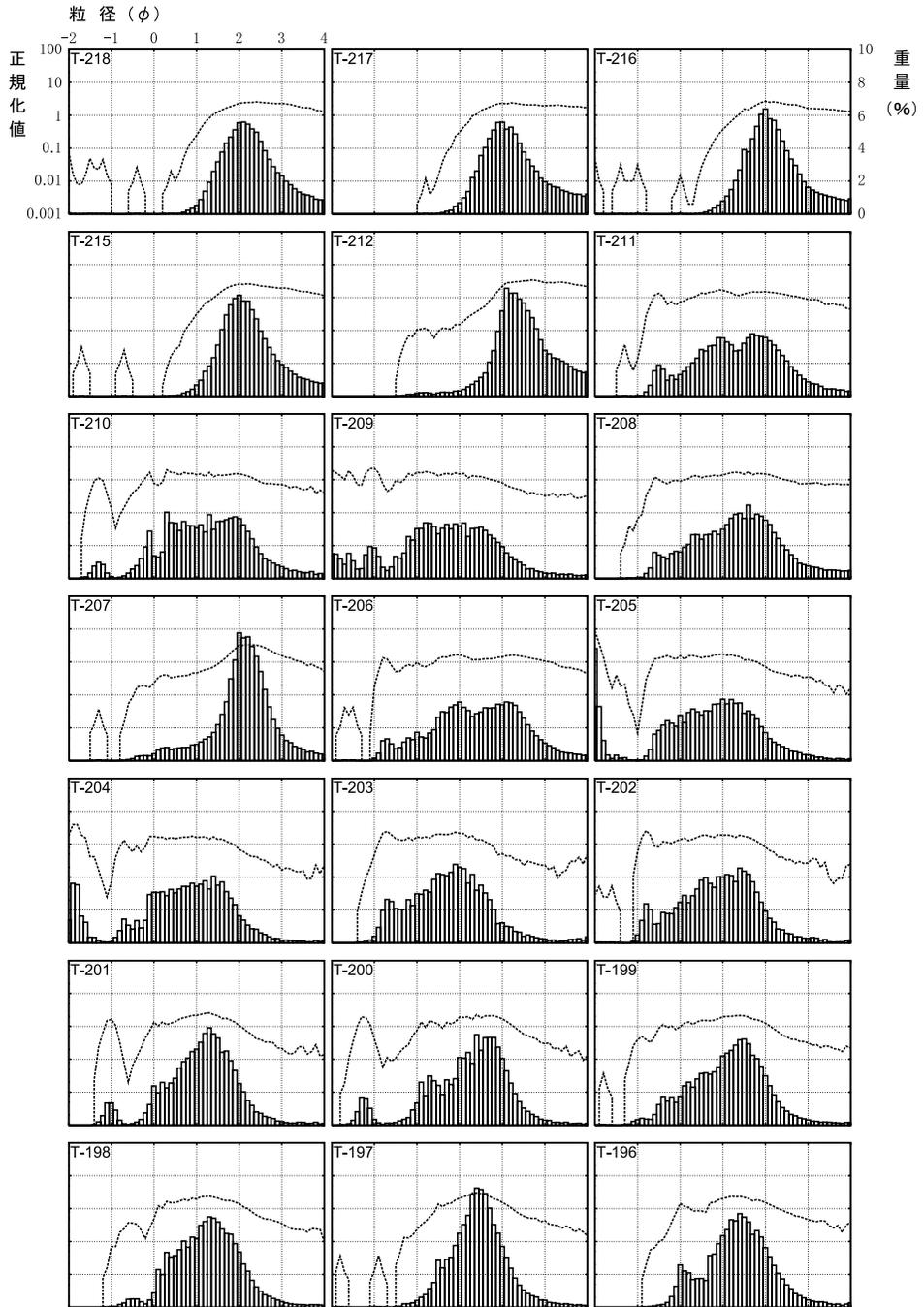


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

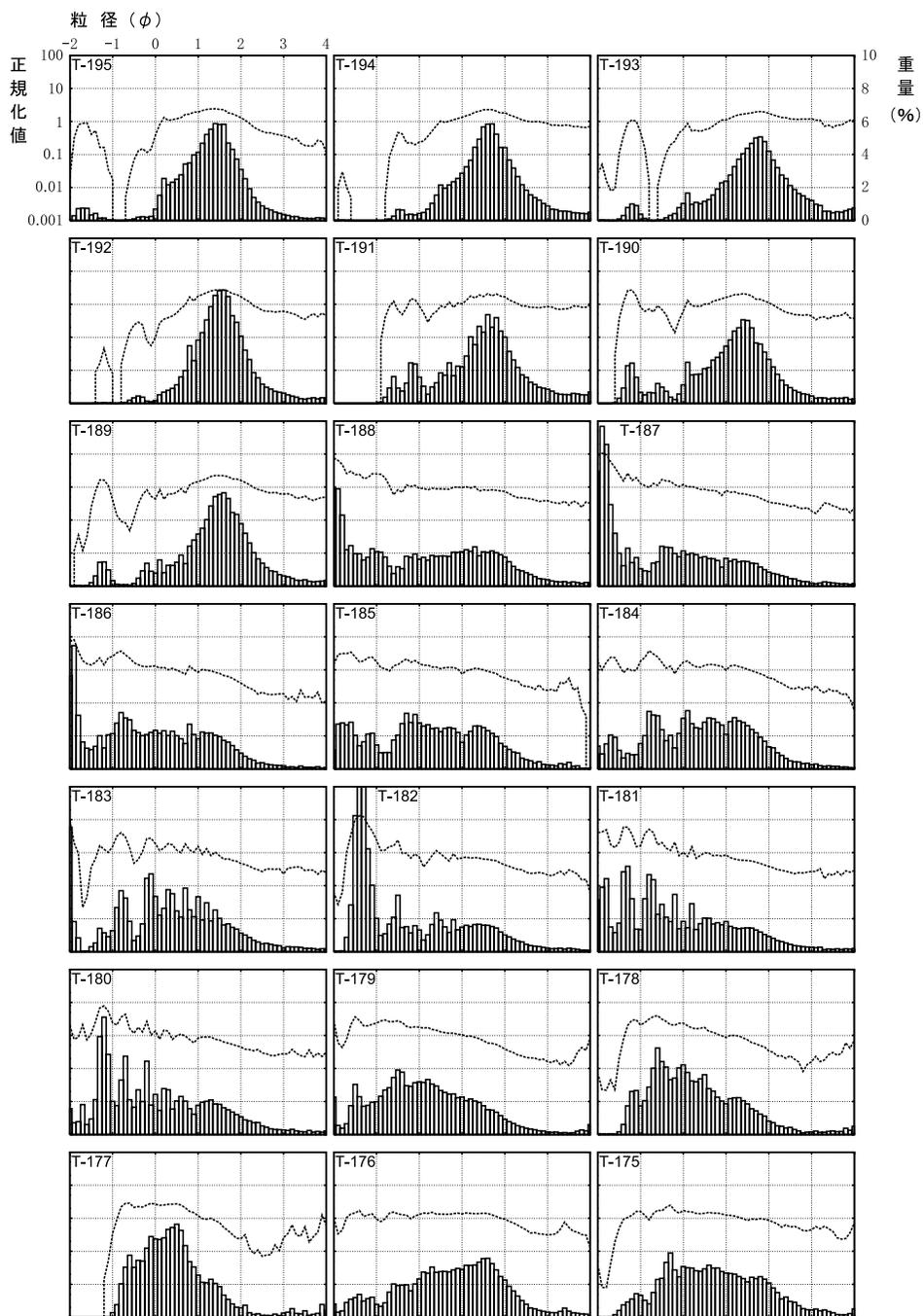


図39つづき

粒度分析データ

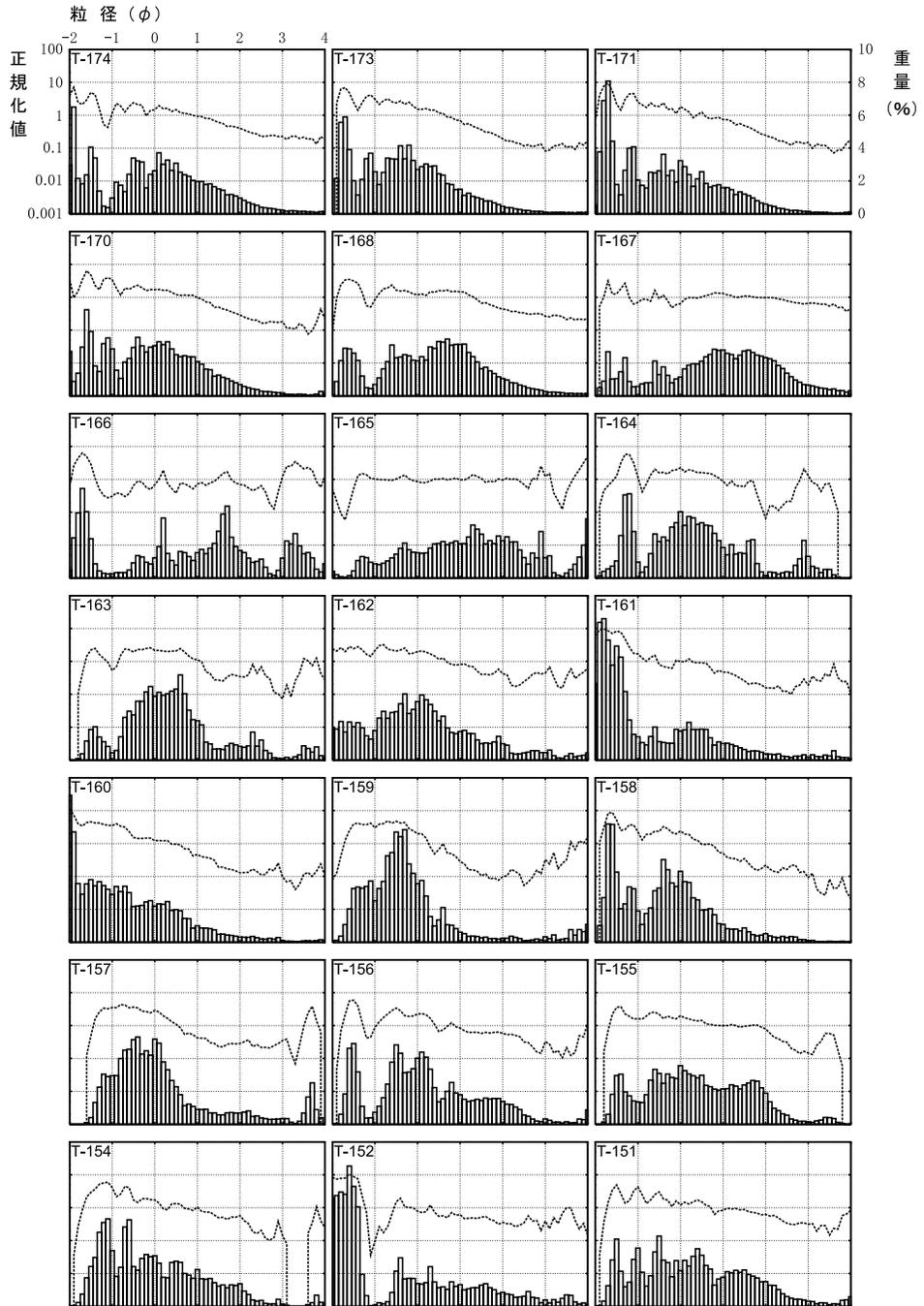


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

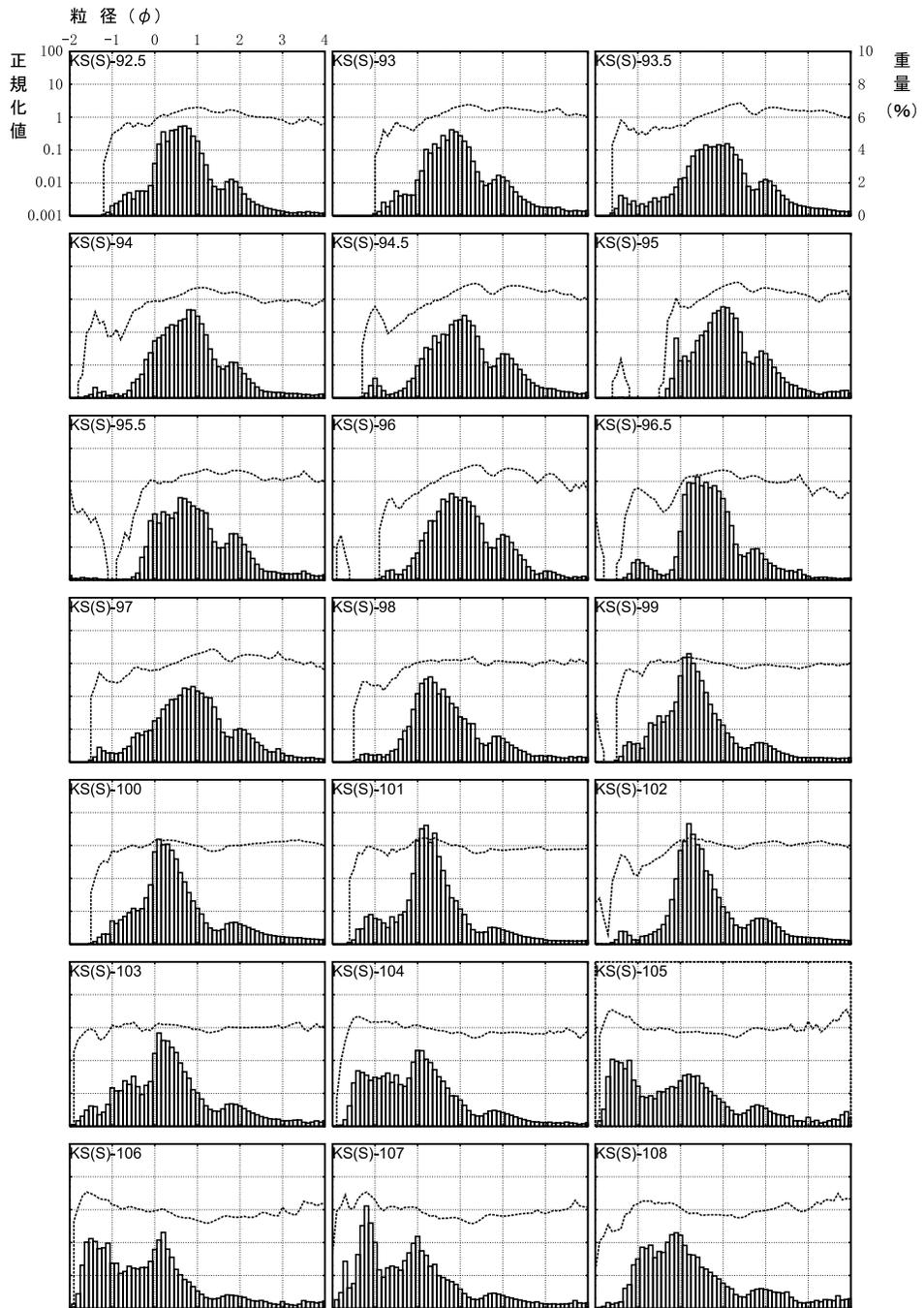


図39つづき

粒度分析データ

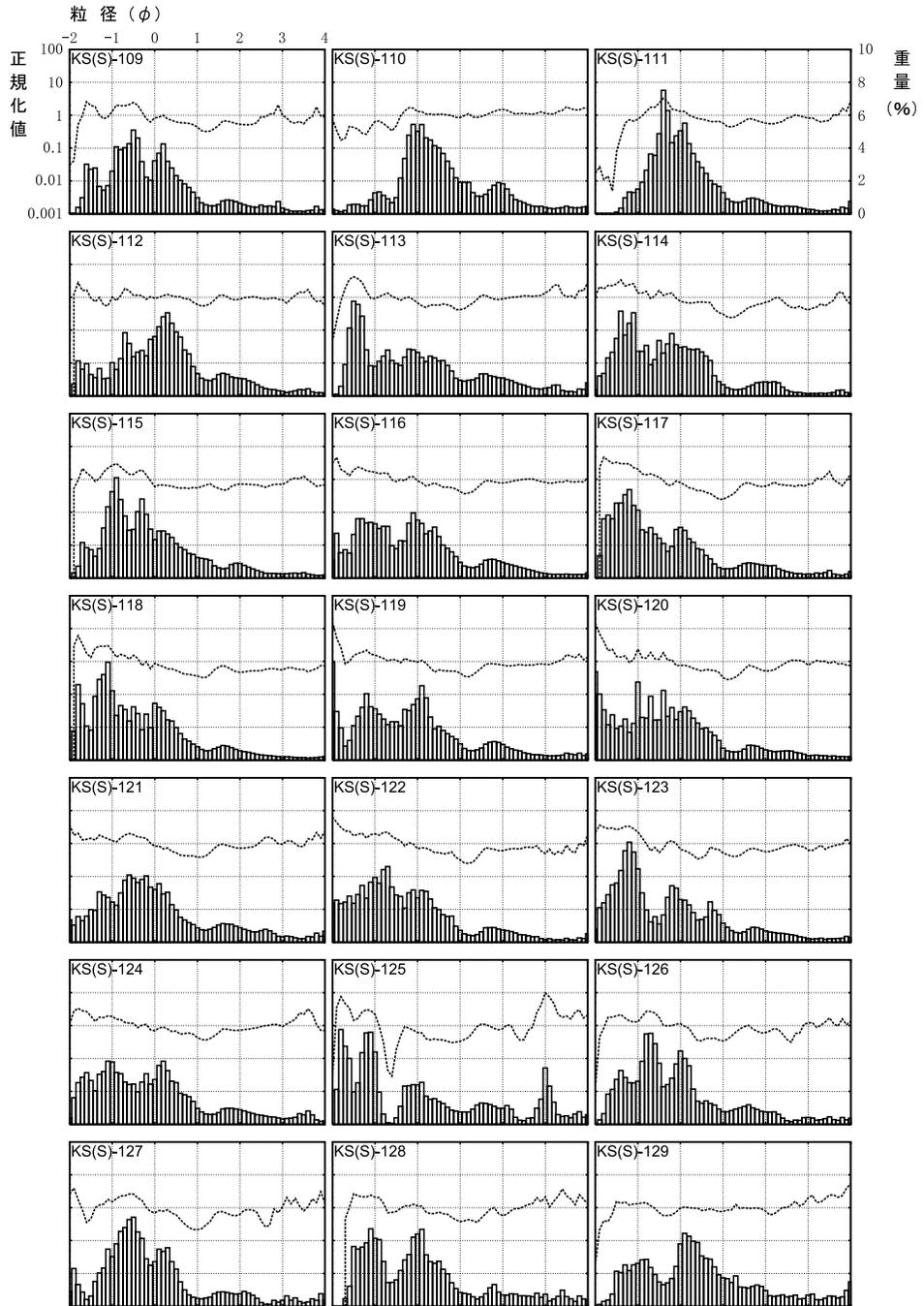


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

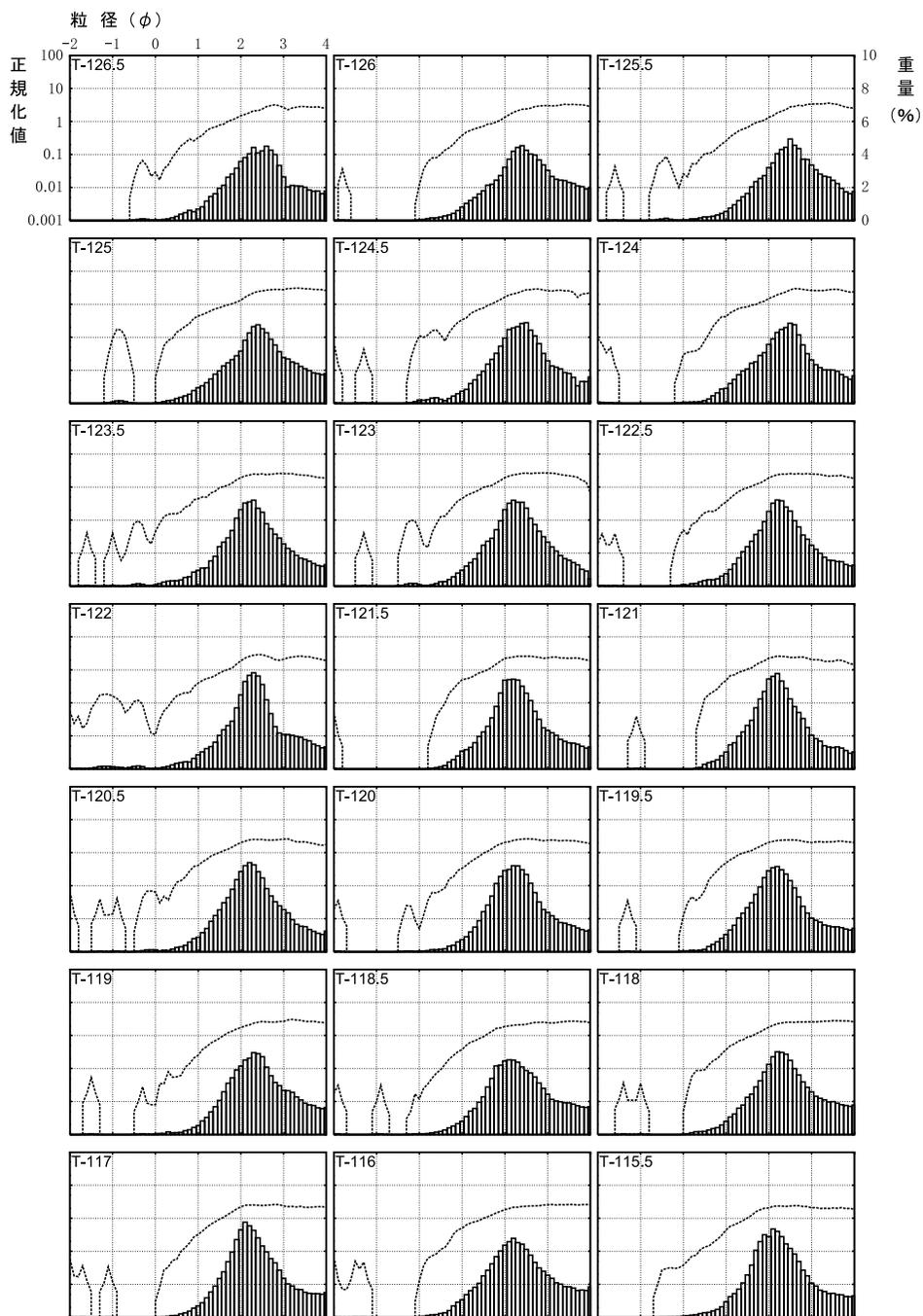


図39つづき

粒度分析データ

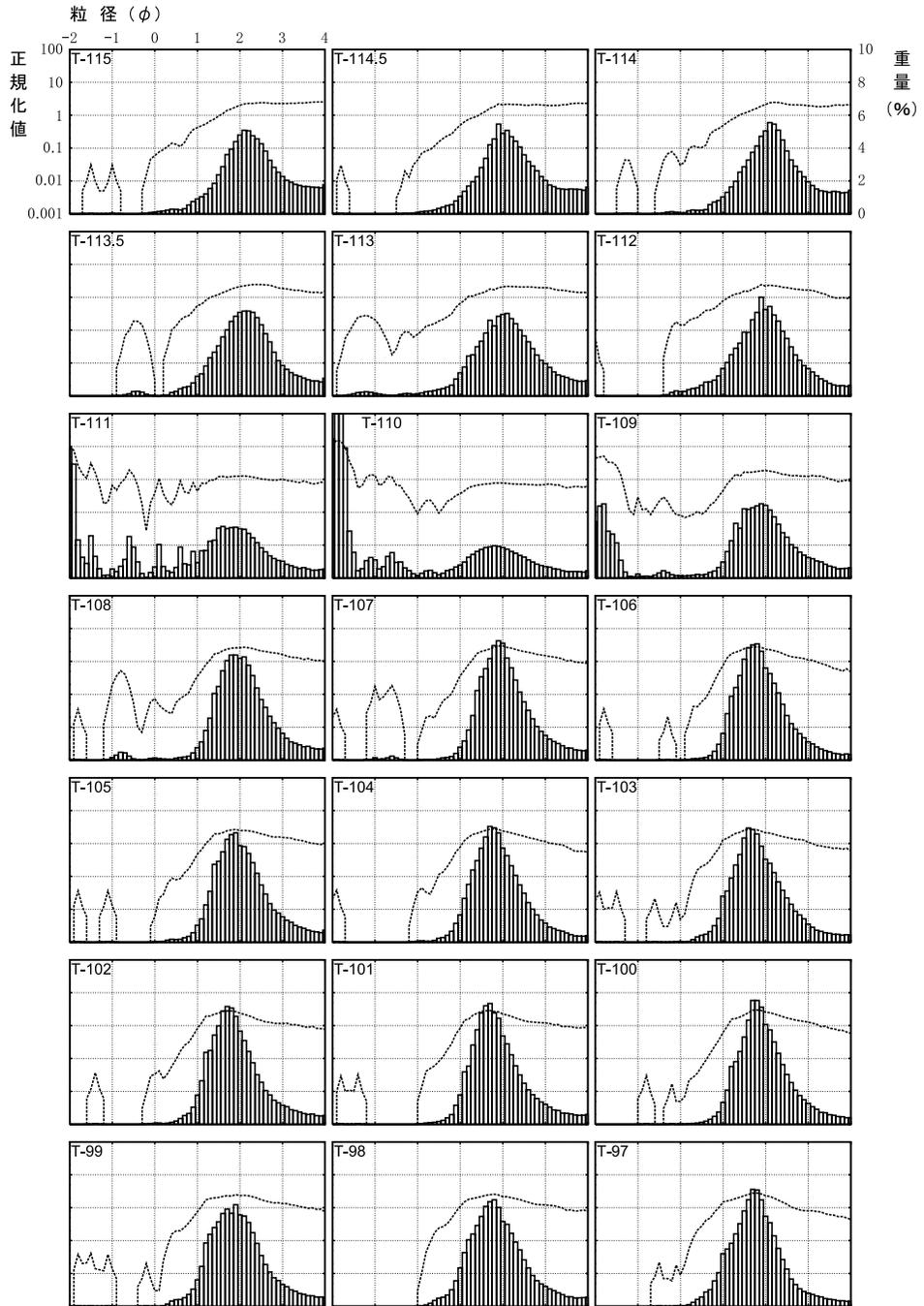


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

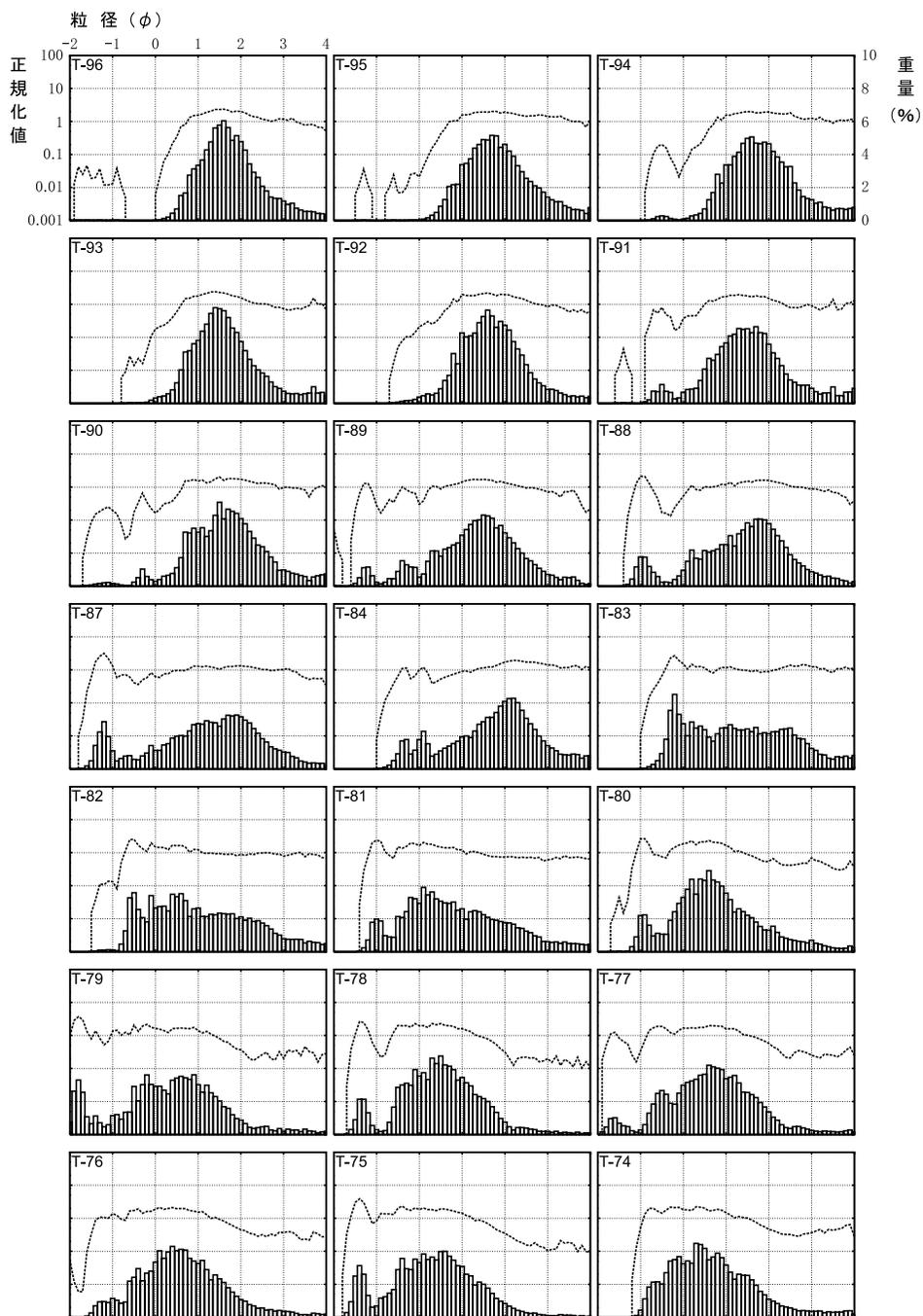


図39つづき

粒度分析データ

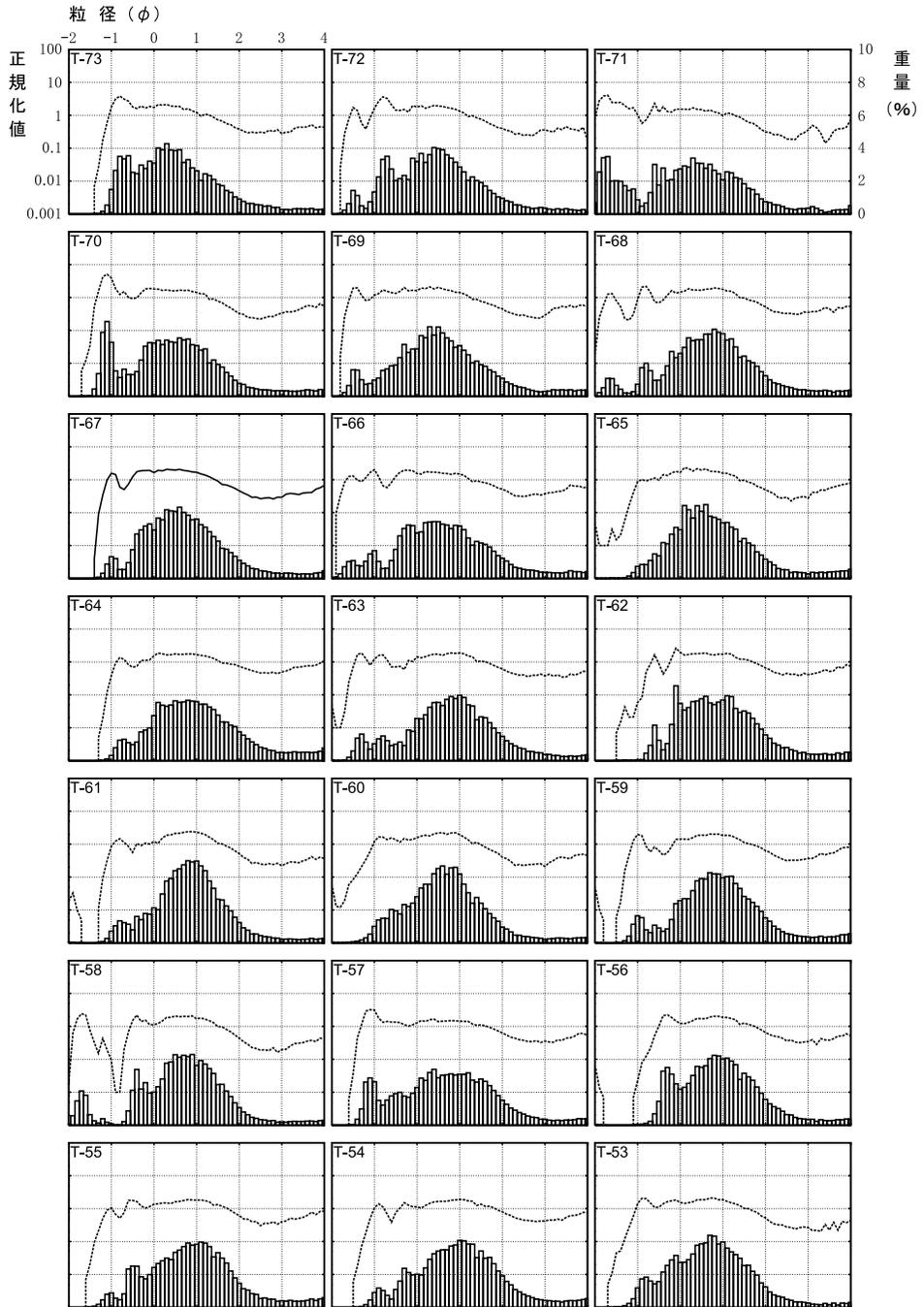


図39つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

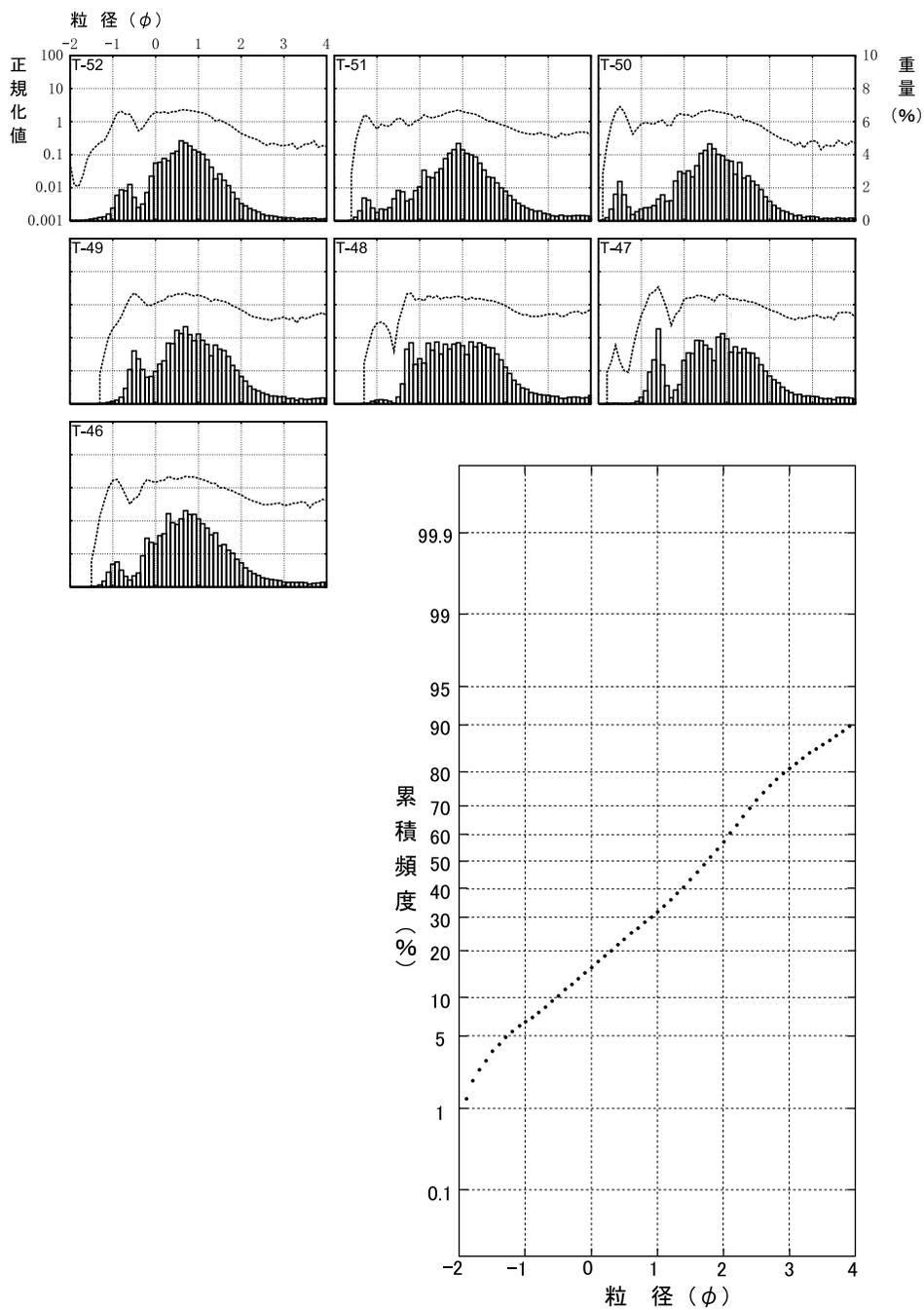


図39つづき

粒度分析データ

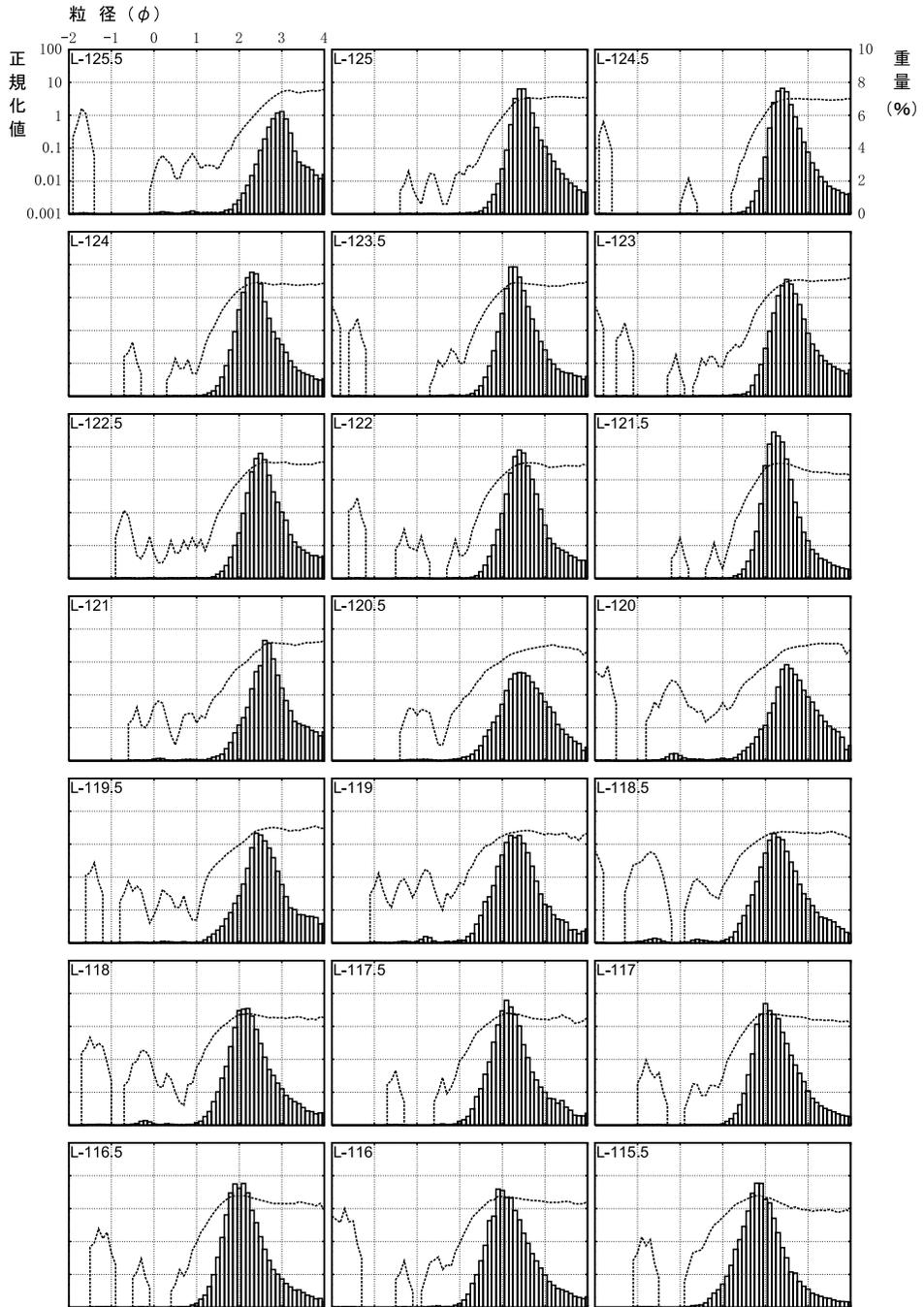


図40 L系統の各試料の粒度分布・正規化曲線と全体の粒度分布の正規確率紙上プロット

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

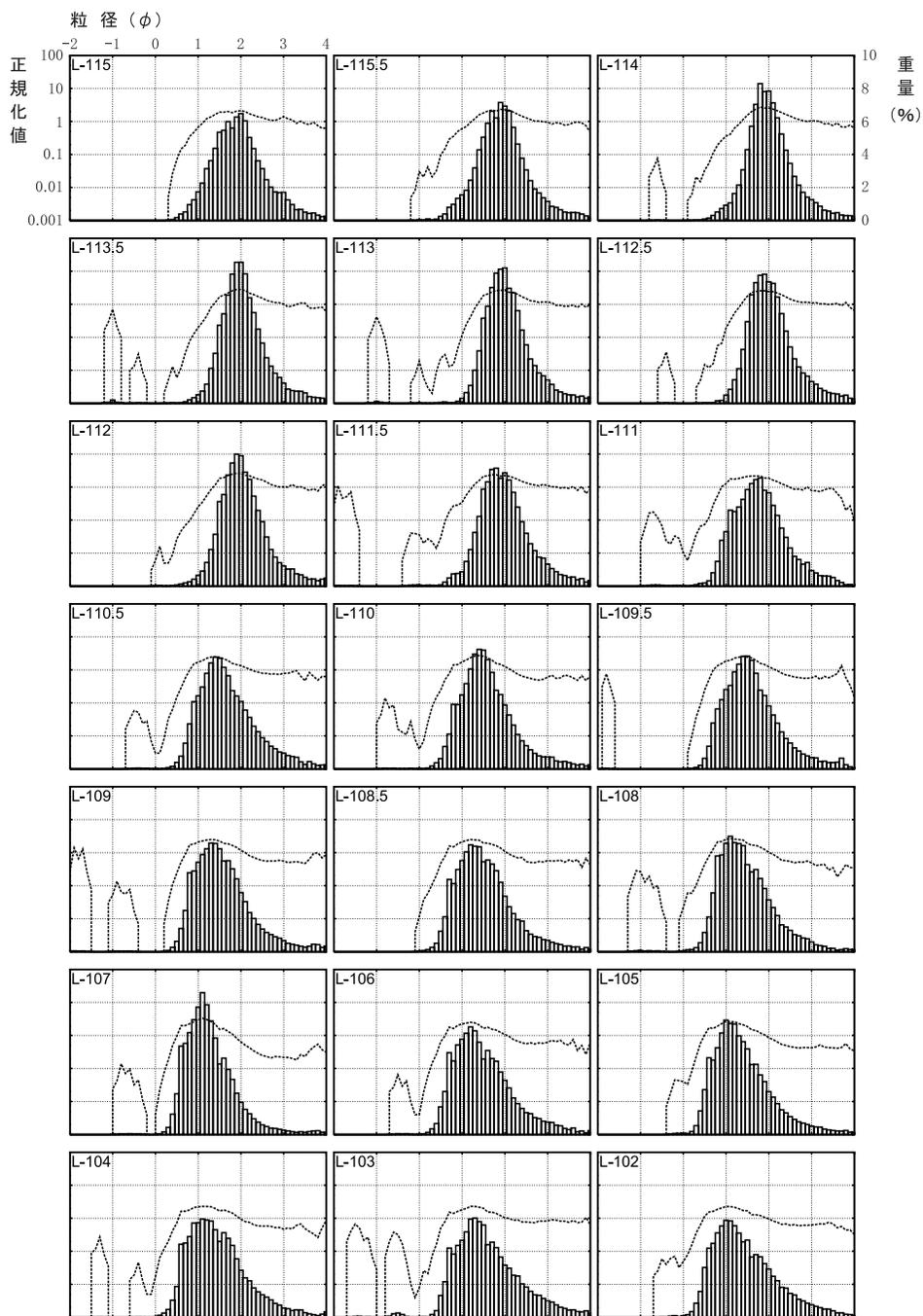


図40つづき

粒度分析データ

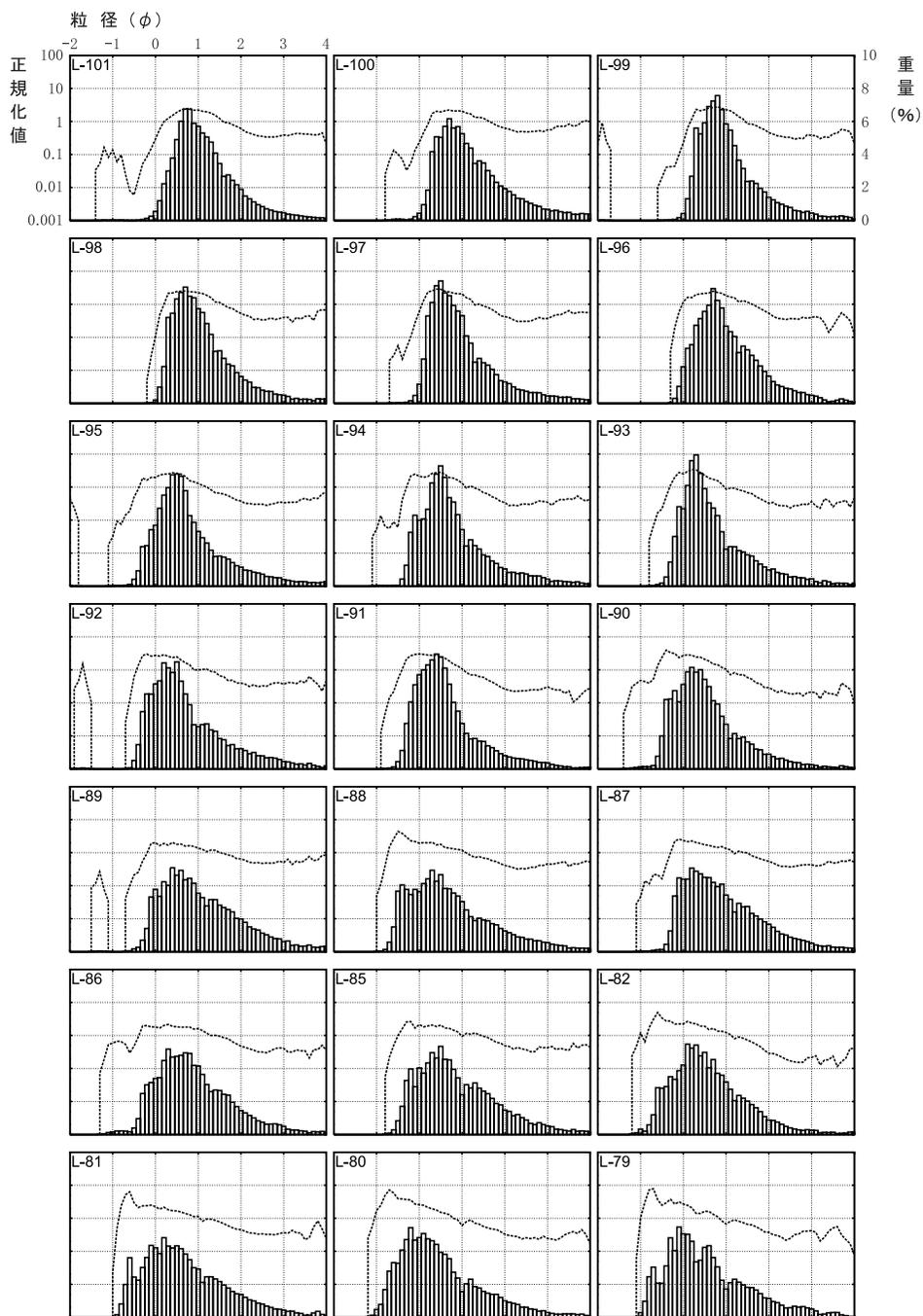


図40つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

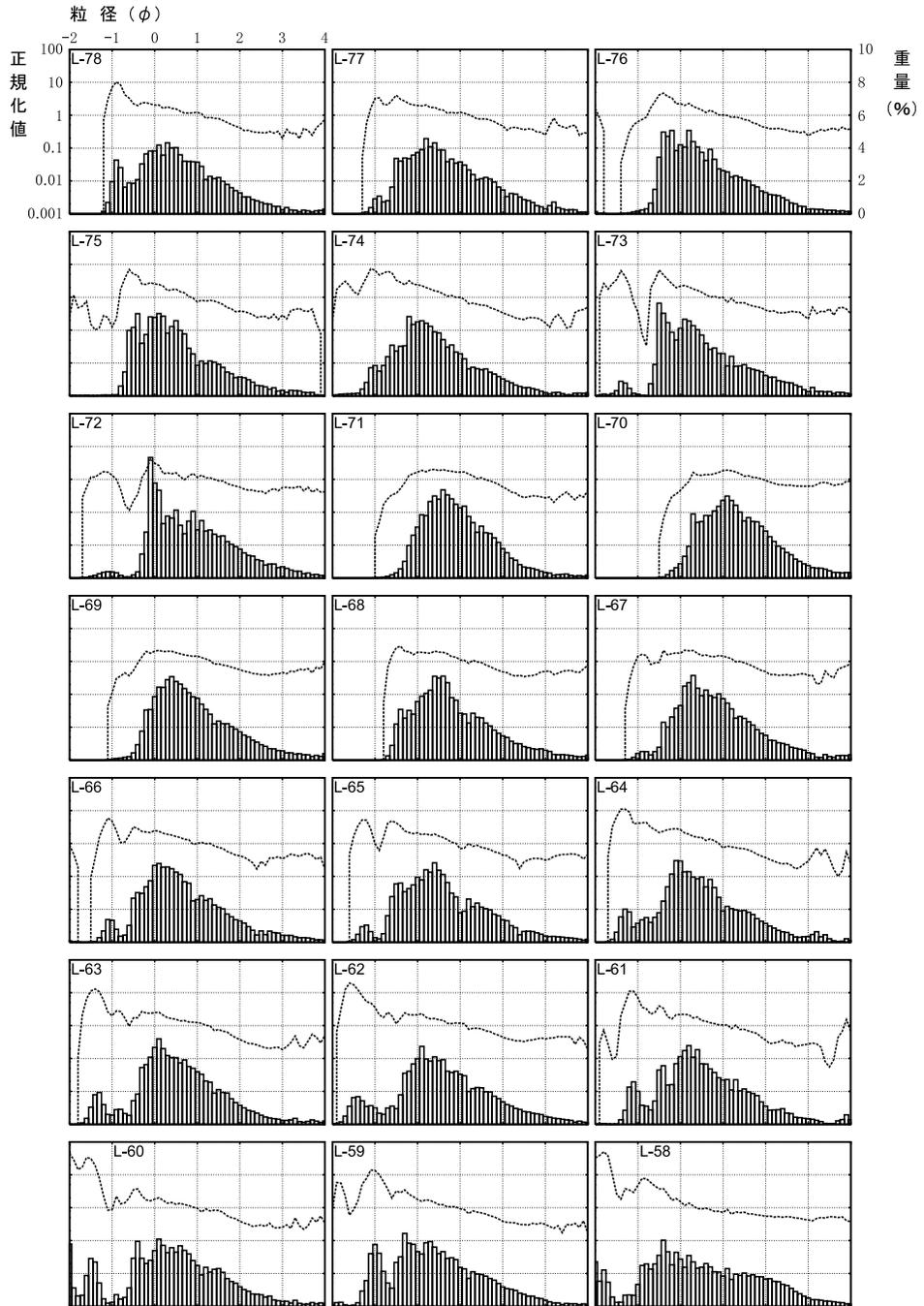


図40つづき

粒度分析データ

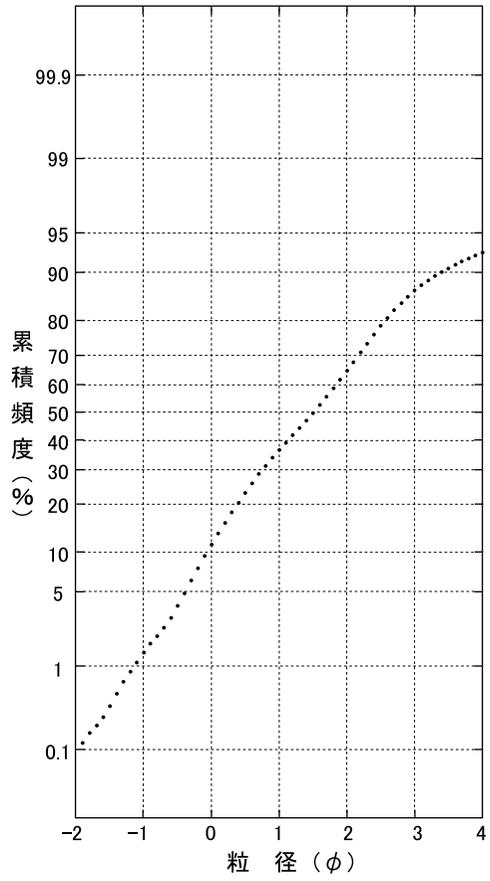
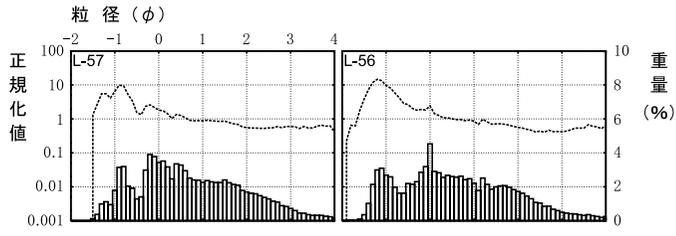


図40つづき

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

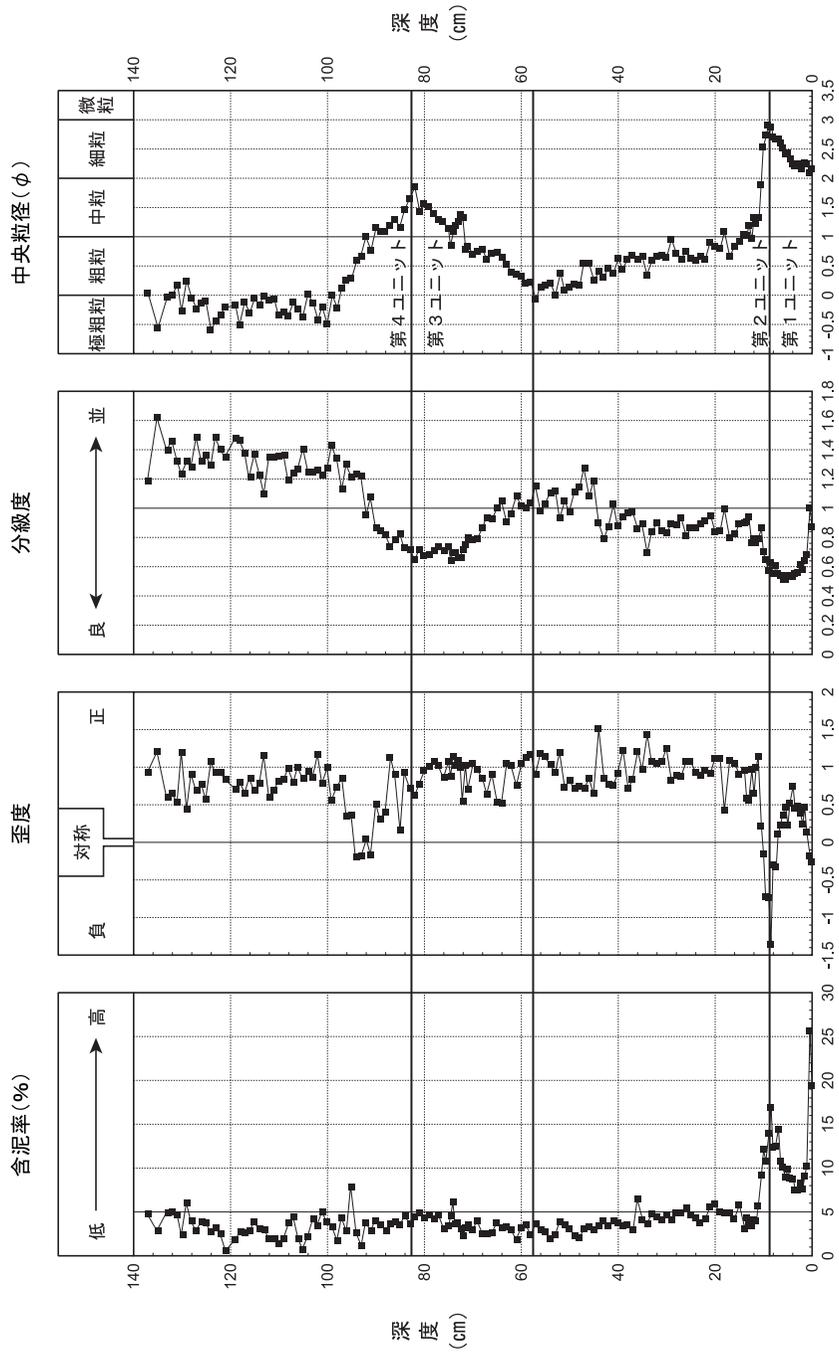


図41 KS(N)系統の粒度特性の垂直変動

粒度分析データ

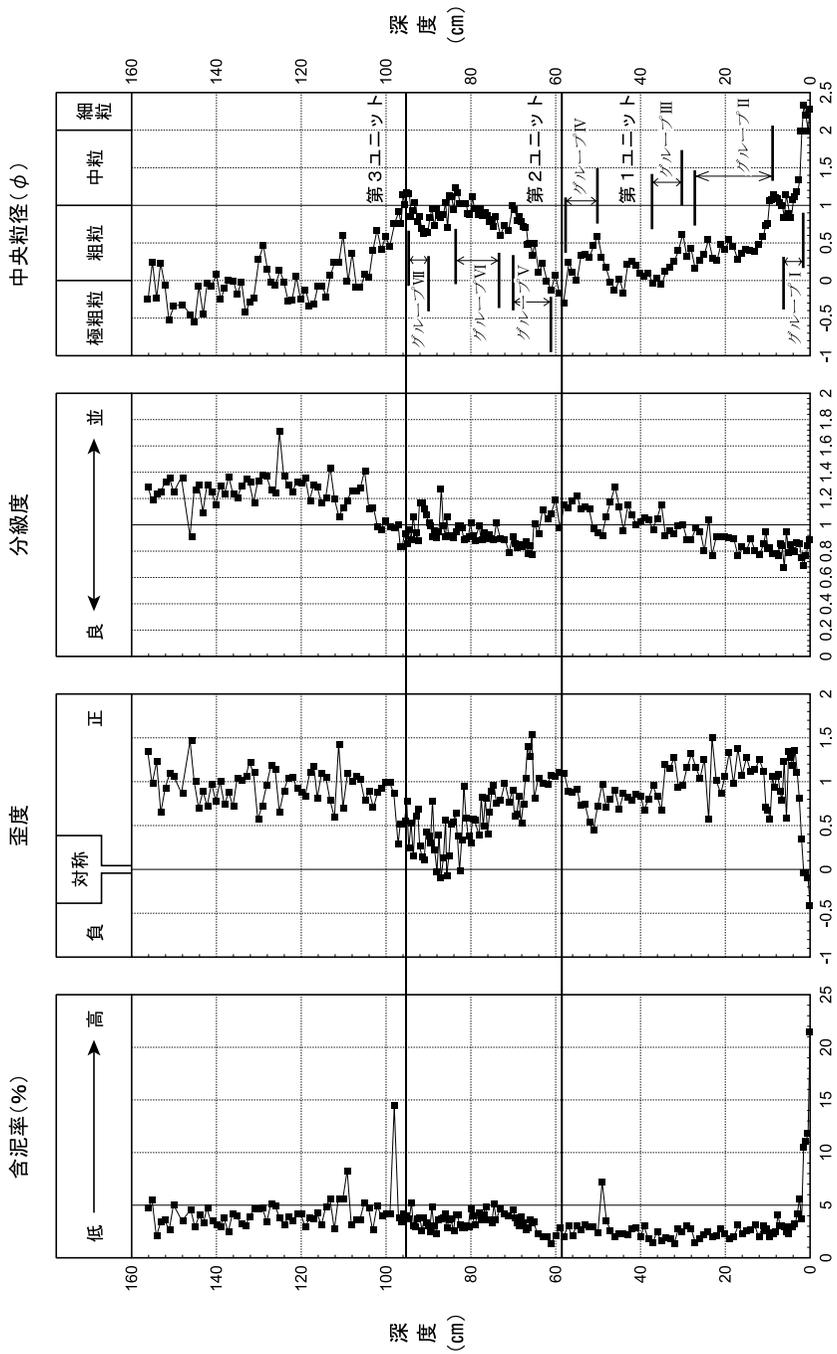


図42 KS(S)系統の粒度特性の垂直変動

弥生時代の砂質土石流堆積物の地点別粒度分析

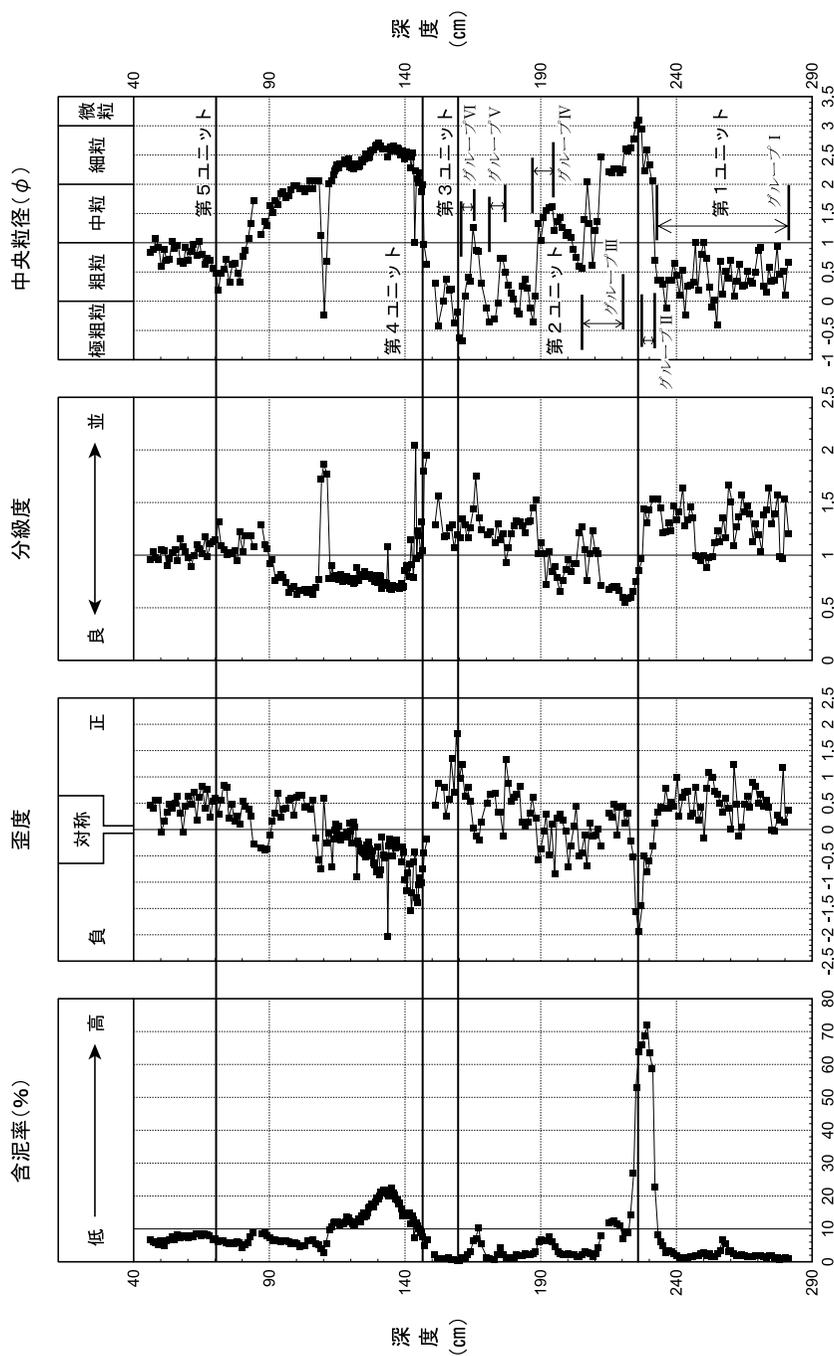


図43 T系統の粒度特性の垂直変動

粒度分析データ

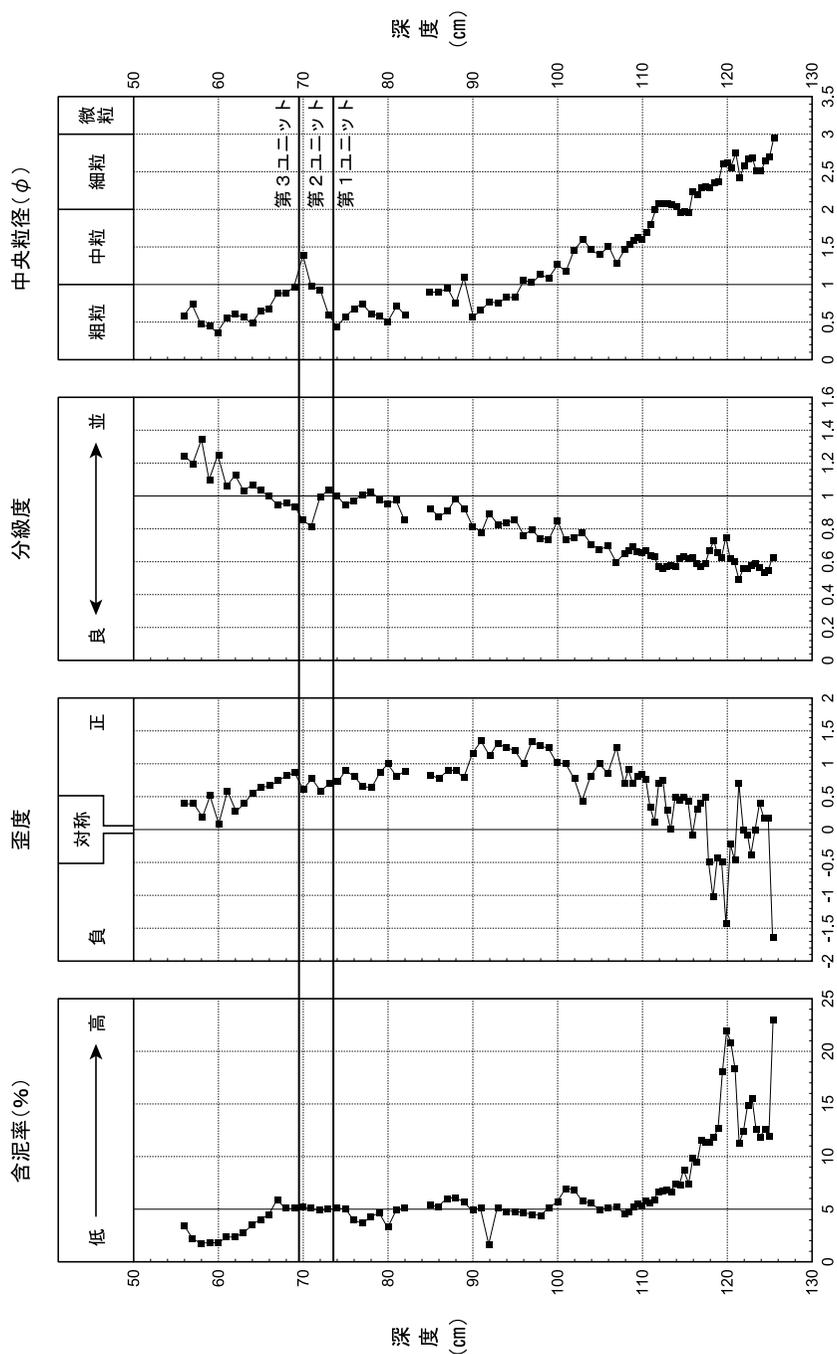
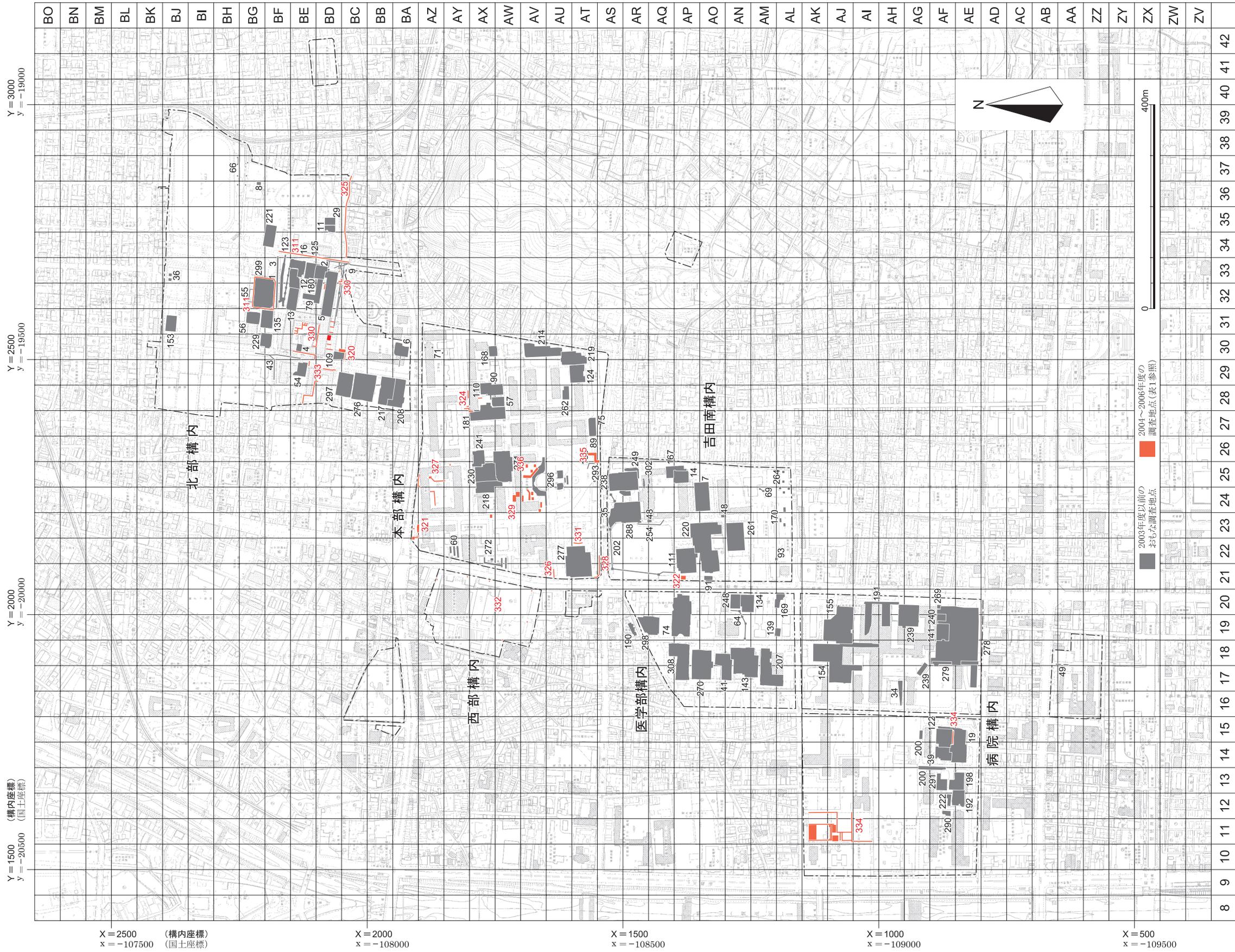


図44 L系統の粒度特性の垂直変動

京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度

目 次

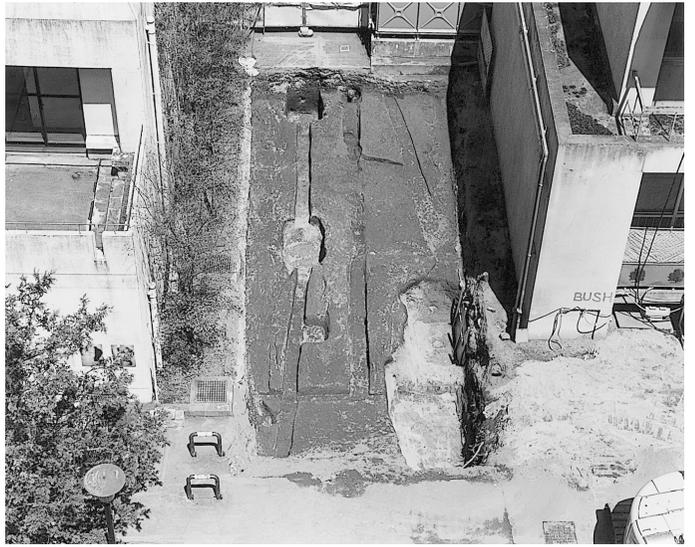
- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～4 京都大学北部構内BC30区の発掘調査
- 5・6 京都大学本部構内BA22区の発掘調査
- 7・8 京都大学吉田南構内AP21区の発掘調査
- 9～11 京都大学構内における分布調査・立合調査



国土座標は日本測地系第VI座標系を用いる

図版1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

1 表土除去後，調査区全景（南から）



2 茶褐色土上面検出の遺構（北から）

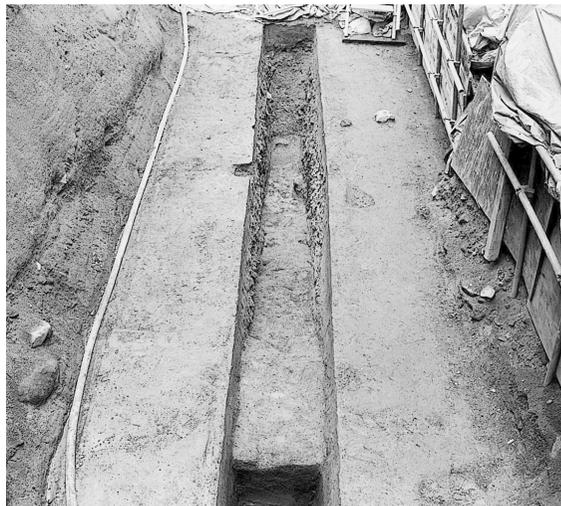


3 黄色砂上面検出の遺構（南から）





1 暗褐色粘質土上面（南から）



2 調査区中央南北トレンチ（北から）



3 調査区東壁，洪水性堆積物（南西から）



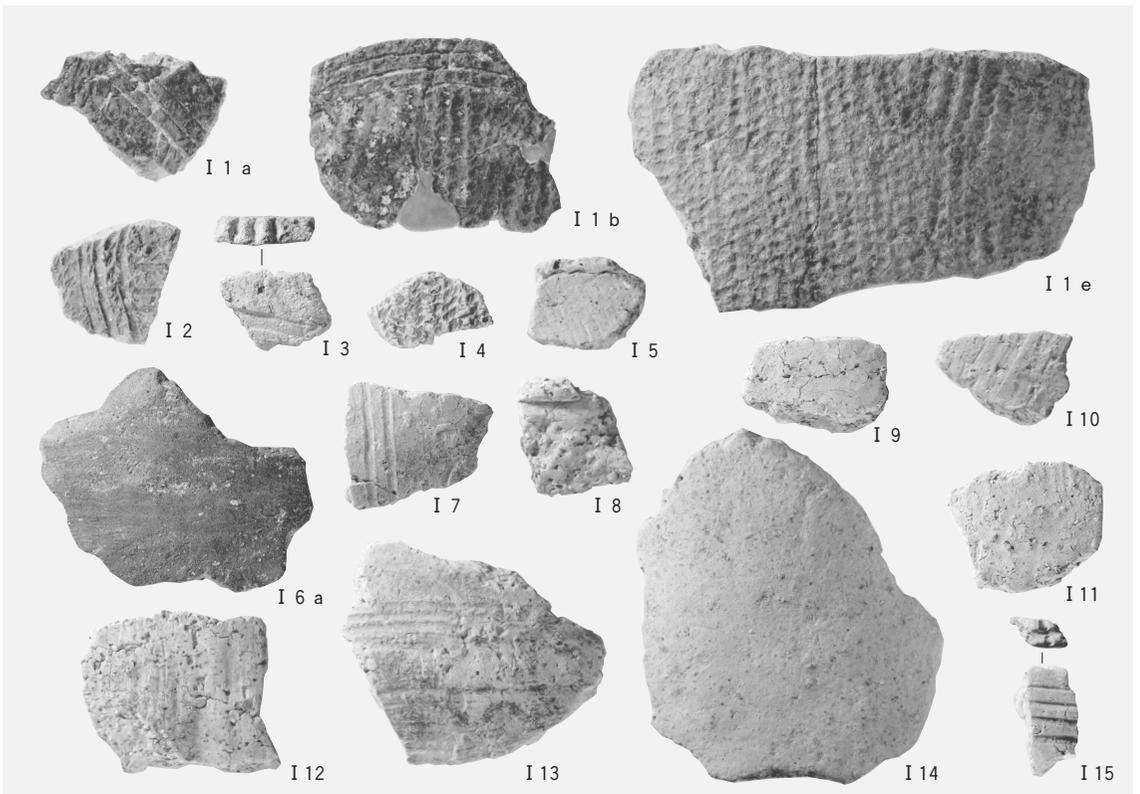
4 縄文土器（I 1）出土状況（東から）



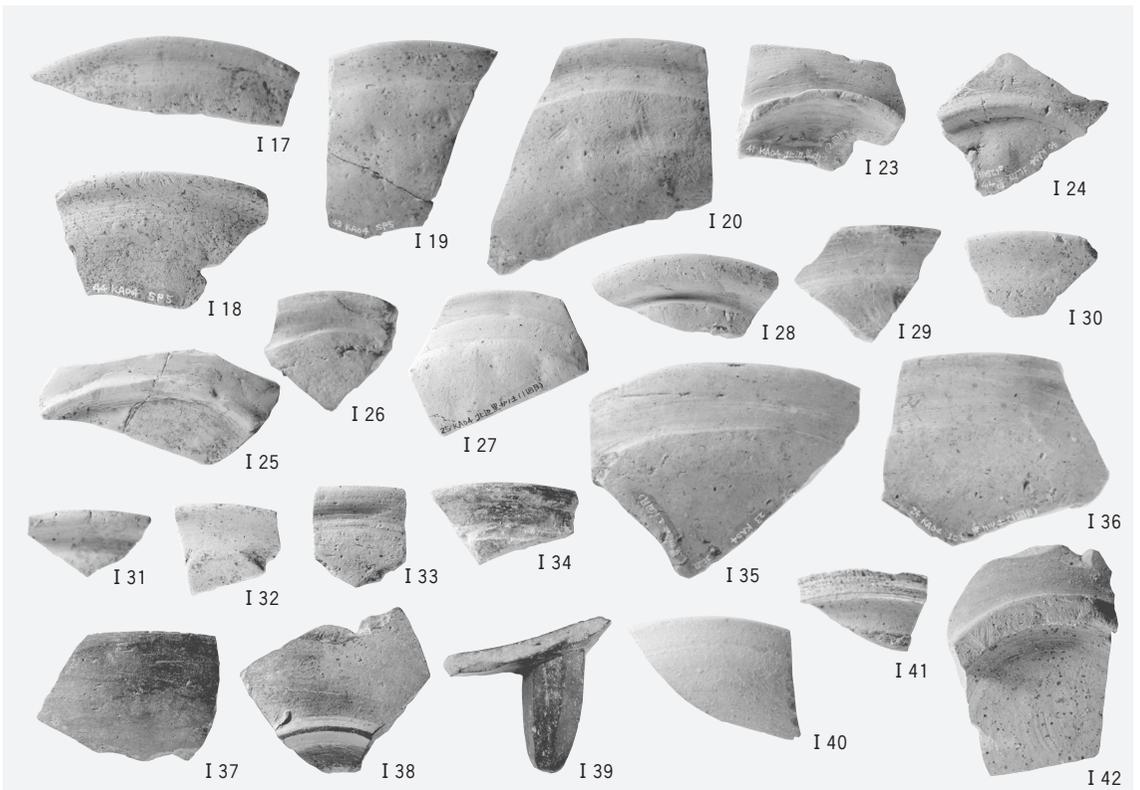
5 調査区北壁の層位（南から）



6 調査区南壁の層位（北から）



1 縄文土器 (I 1 ~ I 5 中期, I 6 a, I 7 後期, I 8 ~ I 10 晚期, I 11 ~ I 14 後晚期)
弥生土器 (I 15 前期)



2 SP 5 出土遺物 (I 17 ~ I 19 土師器), SP 12 出土遺物 (I 20 土師器)
黒褐色土出土遺物 (I 23 ~ I 36 土師器, I 37 ~ I 39 黑色土器, I 40 · I 41 灰釉陶器, I 42 須恵器)



1 A区完掘後全景（南から）



2 A区北壁の黄色砂（南から）



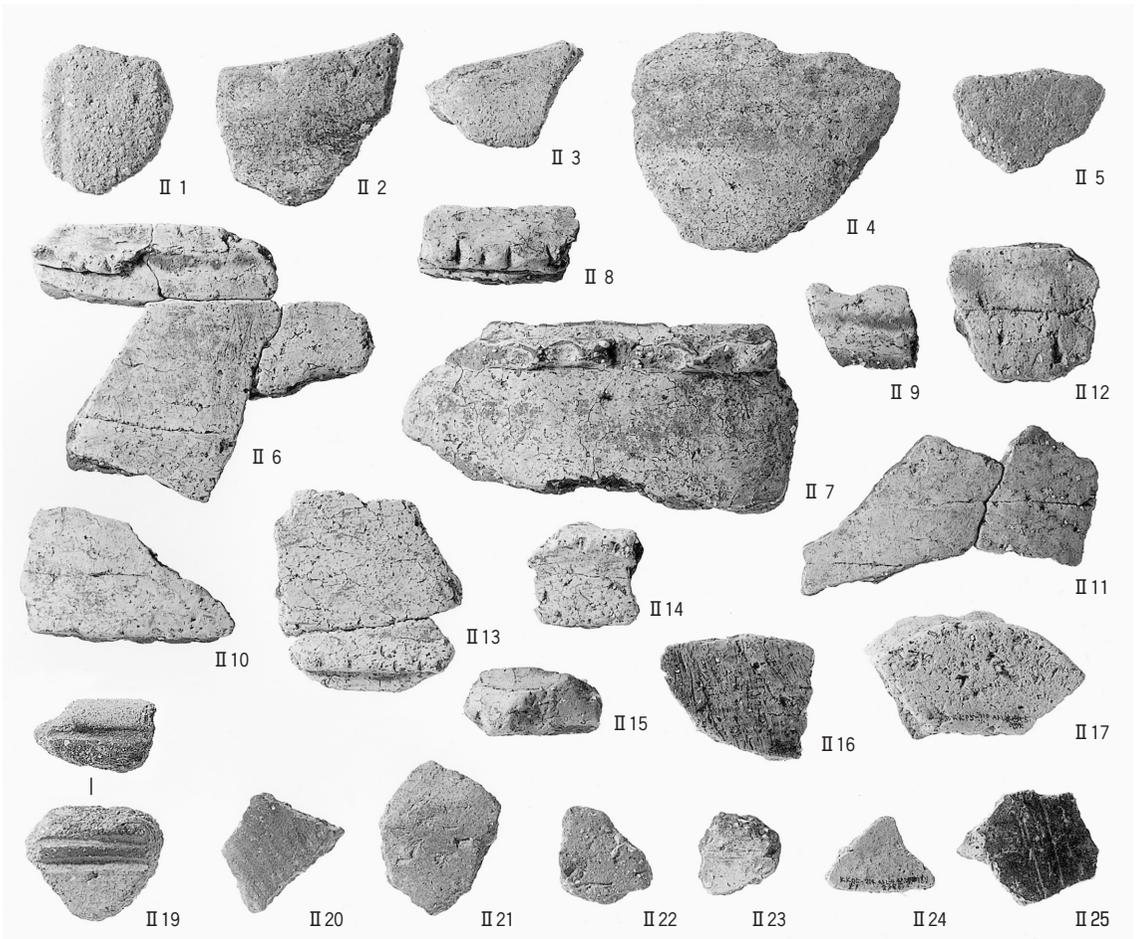
3 A区暗灰色土上面（東から）



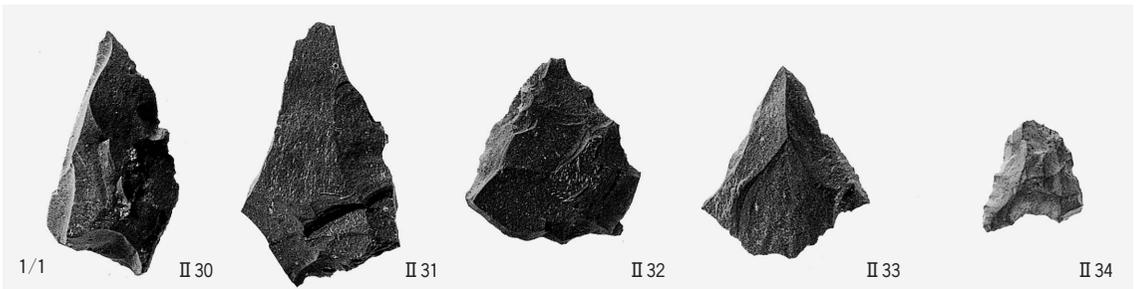
4 C・D区完掘後全景（南から）



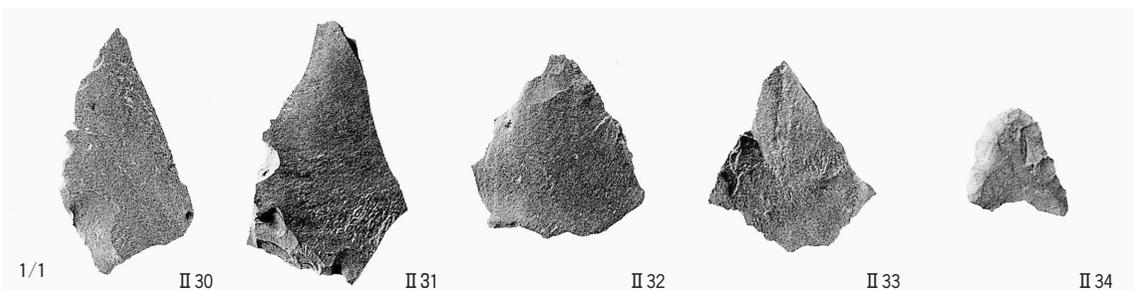
5 E区東壁（西から）



1 先史時代の土器（II 1 中期，II 2～II 5・II 19～II 22後期，II 6～II 17・II 23～II 25晩期）



2 石鏃



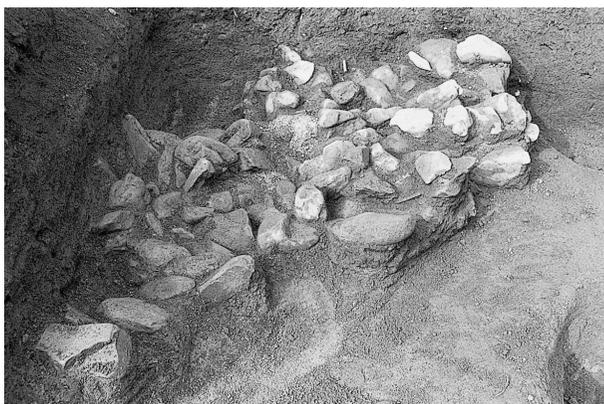
3 石鏃（同上裏面）



1 黄色砂上面遺構完掘全景（南から）



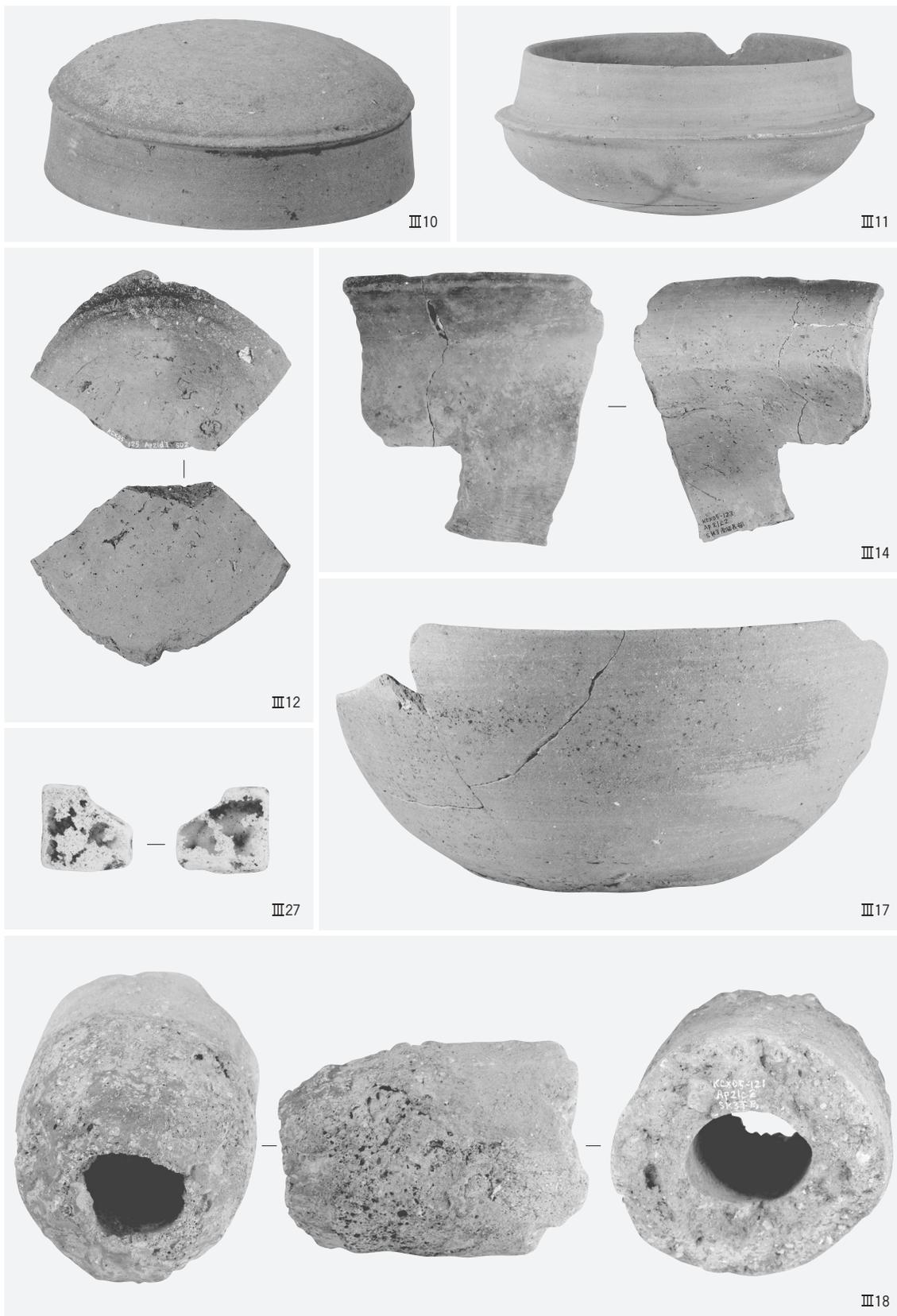
2 溝SD 2（吉田二本松7号墳周溝）内須恵器出土状況（西から）



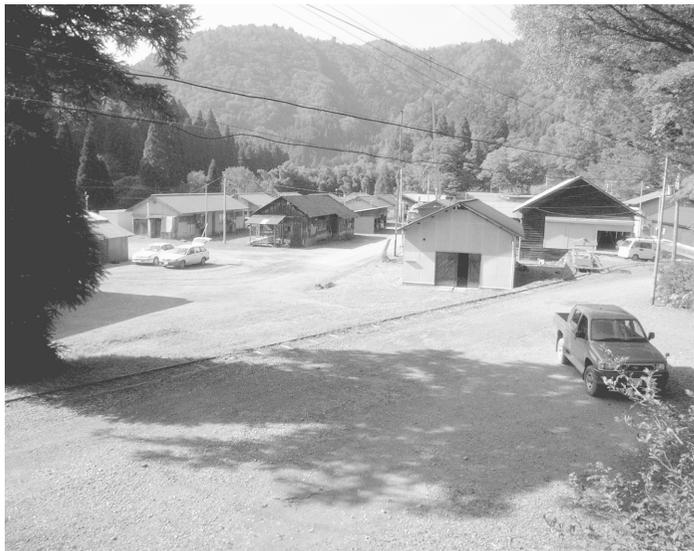
3 集石S X 1 検出状況（東から）



4 調査区西壁北半の層位（SD 2・黄砂・黒褐色土）



S D 2 出土遺物 (III10~III12須恵器), S K 3 出土遺物 (III14土師器, III17須恵器, III18轆羽口), 茶褐色土出土遺物 (III27二彩陶器)



1 調査地全景（南東から）



2 職員宿舎地点（西から）



3 職員宿舎地点南壁層序（北から）



1 335地点全景（西から）



2 335地点西壁藩邸堀断面確認状況（東から）



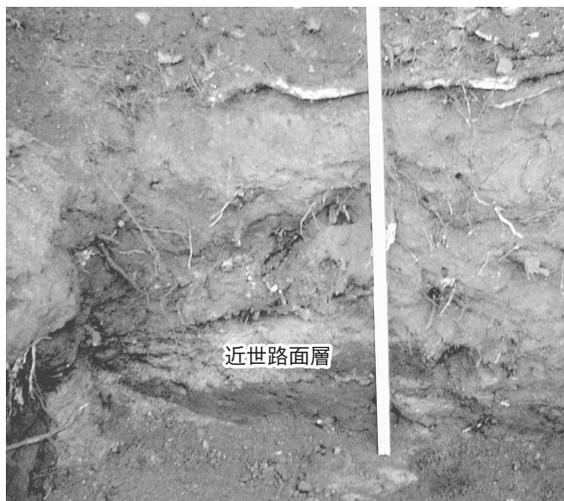
3 329e・336a地点付近全景（南から）



4 329e地点近世白色粗砂層検出状況（西から）



5 329f地点付近全景（南西から）
本部構内各地点の立合調査（その1）



6 329f地点近世路面層断面確認状況（南から）



1 326地点全景（東から）



2 326地点断面黄色砂確認状況（南から）



3 329b地点掘削状況（東から）



4 329b地点掘り上げ状況（東から）



5 329b地点北壁（南から）
本部構内各地点の立合調査（その2）



6 329a地点煉瓦組水路確認状況（南から）

2009年3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2004~2006年度

編集 京都大学文化財総合研究センター
発行 京都市左京区吉田本町
印刷 三星商事印刷株式会社
製本 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300